名城大学FD活動報告書

Meijo Faculty Development activity report

平成29年度

名城大学
大学教育開発センター委員会

目　　次

1．はじめに
- 平成29年度の FD 活動を振り返って…… 1
  大学教育開発センター委員会委員長　安藤　喜代美

2．平成29年度大学教育開発センター委員会
- 委員構成…… 3
- 活動記録…… 7

3．平成29年度 FD 活動一覧
（第19回 FD フォーラム、第５回～第７回 FD 学習会、平成29年度授業改善アンケート、「ビデオ・オン・デマンド講義（VOD）」の提供、名城大学教育年報、FD 活動報告書、教育功労賞表彰、学外セミナー・研究集会等への派遣）…… 11

4．平成29年度正課外教育活動一覧
（入学前教育、名城サプリメント教育、学習サポートルーム）…… 17

5．平成29年度 各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の活動報告 …… 23
- 法学部・法学研究科
- 経営学部・経営学研究科
- 経済学部・経済学研究科
- 理工学部・理工学研究科
- 農学部・農学研究科
- 薬学部・薬学研究科
- 都市情報学部・都市情報学研究科
- 人間学部・人間学研究科
- 外国語学部
- 総合学術研究科
- 法務研究科
- 教職センター

6．トピックス
- 第19回 FD フォーラム実施報告
  - 第19回 FD フォーラム実施報告…… 75
  - 所属別参加状況…… 76
  - 参加者アンケート集計結果…… 77
  - 当日配布資料…… 85
- FD 学習会実施報告（第５回、第６回、第７回）…… 98
- 教育功労賞表彰報告
  - 表彰者一覧…… 129
  - 表彰内容…… 130

7．資料
- 大学教育開発センター要項…… 135
- 平成29年度所属別 FD 活動参加状況…… 137

8．おわりに
- あ　と　が　き　…… 139

１．はじめに

平成29年度のFD活動を振り返って

大学教育開発センター委員会委員長
安　藤　喜　代　美

平成29年度より、これまで独立した委員会として活動していましたFD委員会と大学教育開発センター委員会を活動強化・合理化のため併合し、委員も各学部から２名を選出していただき、FD活動をさらに推進する体制となりました。その一つがFD学習会で、今年度は３回、開催することができ、そのテーマにも一貫性をもたせ、進めることができました。そして、例年開催しています「FDフォーラム」も学習会のテーマと連動させ、教養教育とアクティブラーニングの２つの視点から構成することとしました。

まず、今年度１回目の「第５回FD学習会」（７月18日（火））では、名城大学が教養教育において全学部共通科目とするよう設定した「基軸科目」をテーマとし、人間学部の宮嶋秀光先生からその科目における教育目的､実践方法､課題などについてお話を聞かせていただきました。２回目（12月21日（木））の「第６回FD学習会」では２部構成にして､前半は１回目と同様に基軸科目をテーマに、農学部の山岸健三先生と外国語学部のアーナンダ・クマーラ先生から、それぞれの学部における「基軸科目」の目的、授業手法などについてお話していただき、その話題を題材として後半では、アクティブラーニングの利点、課題などについて、参加者の皆さんにグループ討論をしていただきました。３回目（３月９日（金））となる「第７回FD学習会」でも「基軸科目」をテーマとし、学部でその科目を担当されている法学部の伊川正樹先生、経営学部の高山晃郎先生、都市情報学部の森杉雅史先生に、１・２回目と同様に、学部の「基軸科目」についてお話を聞かせていただきました。

また、これら３回のFD学習会よりも大規模な「FDフォーラム」(11月９日（木)）では、メインテーマを「大学教養で何を学ぶか」とし、第１部の基調講演では名古屋大学大学院人文学研究科の日比嘉高准教授にフォーラムのタイトルでもある「大学教養で何を学ぶか」についてご講演いただきました。第２部は、名城大学の教養科目でもある「基軸科目」を事例として、学びを導く手法とされている「アクティブラーニング」の視点から、経済学部の渋井康弘先生、薬学部の原田健一先生、人間学部の加茂省三先生に、学部の「基軸科目」について報告していただきました。

こうして今年度は､名城大学の教養科目の一つとして「基軸科目」を設けている８学部全てから、基軸科目の教育目的、実践方法、課題などについてお話を聞くことができました。それぞれの学部が独自の手法で「基軸科目」を運営しているのですが、どの学部の授業にも学生が自ら学ぶ､「アクティブラーニング」の要素が満ち溢れるものでした。他の先生方の授業手法について聞き、課題を共有することはまさに、我々教員にとってのFDであり、非常に貴重な時間でもありました。

もちろん、こうした活動以外にも、Webによるアンケート調査の推進、ジェイ・サーブやPROGテストのような学修行動調査を活用することで、学生の学修成果の可視化を試みるなど様々なFD活動を行いました。しかし、重要なことは、実施することによって得られたことを授業や学生指導などに生かし、学生にフィードバックすることのように思います。

この機会に文部科学省のホームページで「Faculty Development」でその意味するところを確認しました。下記が中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会の審議でまとめられた「用語解説」に記載されている説明です。

> 教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。具体的な例としては，教員相互の授業参観の実施，授業方法についての研究会の開催，新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。なお，大学設置基準等においては，こうした意味での FD の実施を各大学に求めているが，FD の定義・内容は論者によって様々であり，単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず，広く教育の改善，更には研究活動，社会貢献，管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとして FD の語を用いる場合もある。
> （http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_002.pdf）

「FD」の定義は、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」と多様性を含む意味合いとなっているため、次の行では例示を挙げて定義を具体的に説明しています。しかし、こうした個々の方策に振り回されるのではなく、先にも述べたように、授業や学生指導に生かされることが肝心であり、それができる名城大学固有の FD 活動に取り組むことが、何よりも大切であり、期待されることです。

２．平成29年度
大学教育開発センター委員会

平成29年度　大学教育開発センター委員会委員

所属等	職　名	氏　名	職　名	氏　名
大学教育開発センター長	委員長・教授	安藤　喜代美		
学務センター長	教授	山岸　健三		
法学部	教授	渡邊　亙	准教授	仁井田　崇
経営学部	教授	長尾　晃宏	教授	堀川　新吾
経済学部	教授	折原　卓美	准教授	新井　大輔
理工学部	教授	山田　宗男	教授	坂東　俊治
農学部	教授	津呂　正人	准教授	平児　慎太郎
薬学部	教授	大津　史子	教授	湯川　和典
都市情報学部	教授	杉浦　真一郎	教授	若林　拓
人間学部	教授	岡戸　浩子	助教	加藤　昌弘
外国語学部	准教授	柳沢　秀郎	准教授	ポール・ウィキン
総合学術研究科	助教	神藤　定生		
法務研究科	准教授	河北　洋介		
教職センター	准教授	谷口　正明		
学務センター	事務部長	青山　和順		
大学教育開発センター	事務部長	大武　貞光		

大学教育開発センター委員会　専門委員会　分担表

【入学前教育専門委員会（10名)】

所属等	職　名	氏　名	備　考
大学教育開発センター	センター長・教授	安藤　喜代美	委員長
法学部	教授	渡邊　亙	
経営学部	教授	堀川　新吾	
経済学部	准教授	新井　大輔	
理工学部	教授	山田　宗男	
農学部	教授	津呂　正人	
薬学部	教授	湯川　和典	
都市情報学部	教授	若林　拓	
人間学部	助教	加藤　昌弘	
外国語学部	准教授	柳沢　秀郎	

【正課外プロジェクト専門委員会（７名)】

所属等	職　名	氏　名	備　考
理工学部	教授	山田　宗男	委員長
大学教育開発センター	センター長・教授	安藤　喜代美	
法学部	教授	渡邊　亙	
農学部	教授	津呂　正人	
薬学部	教授	湯川　和典	
都市情報学部	教授	亀井　栄治	
学務センター	事務部長	青山　和順	

【授業アンケート専門委員会（12名)】

所属等	職　名	氏　名	備　考
大学教育開発センター	センター長・教授	安藤　喜代美	委員長
学務センター	センター長・教授	山岸　健三	
法学部	准教授	仁井田　崇	
経営学部	教授	長尾　晃宏	
経済学部	教授	折原　卓美	
理工学部	教授	坂東　俊治	
農学部	准教授	平児　慎太郎	
薬学部	教授	大津　史子	
都市情報学部	教授	若林　拓	
人間学部	教授	岡戸　浩子	
外国語学部	准教授	ポール・ウィキン	
教職センター	准教授	谷口　正明	

【FD 専門委員会（13名)】

所属等	職　名	氏　名	備　考
大学教育開発センター	センター長・教授	安藤　喜代美	委員長
法学部	准教授	仁井田　崇	
経営学部	教授	堀川　新吾	
経済学部	教授	折原　卓美	
理工学部	教授	坂東　俊治	
農学部	准教授	平児　慎太郎	
薬学部	教授	大津　史子	
都市情報学部	教授	亀井　栄治	
人間学部	教授	岡戸　浩子	
外国語学部	准教授	ポール・ウィキン	
総合学術研究科	助教	神藤　定生	
法務研究科	准教授	河北　洋介	
大学教育開発センター	事務部長	大武　貞光	

【教育広報専門委員会（４名)】

所属等	職　名	氏　名	備　考
理工学部	教授	山田　宗男	委員長
総合学術研究科	助教	神藤　定生	
法務研究科	准教授	河北　洋介	
教職センター	准教授	谷口　正明	

平成29年度　大学教育開発センター委員会活動記録

第１回　平成29年４月６日（木）

【審議事項】

１．副委員長の選出について

２．平成29年度の活動について

（１）大学教育開発センター委員会およびFD委員会からの引き継ぎ事項について

（２）専門委員会の設置について

（３）大学教育開発センター委員会が所管する助成制度の審査分担について

３．平成29年度院高度化費（充実施策）の使途について

（１）平成29年度大学院生研究助成（A)(B）の募集について

（２）平成29年度国際的調査・研究助成の募集について

（３）審査スケジュール、審査手続について

４．授業改善アンケート結果データの開示請求（農学部）について（継続）

【報告事項】

１．平成29年度大学教育開発センター配布予算について

２．第４回FD学習会実施報告について

３．平成29年度新任教職員FD研修の実施報告について

４．多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル)」養成プランの公募について

５．平成29年度教育の質向上プロジェクトについて

６．私立大学等総合改革支援事業について

（１）選定結果について

（２）執行部からの改善策について

７．施設有効活用検討WGの審議結果について

第２回　平成29年５月11日（木）

【審議事項】

１．平成29年度前期授業改善アンケートの実施について

２．平成29年度FDフォーラム企画について

３．第５回FD学習会の実施について

４．学部・研究科・センターにおけるFD推進組織の共通課題について

５．学修行動調査の実施について

（１）学務センター学生アンケートについて

（２）ジェイサープ、PROGテストの実施について

６．全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）オンデマンド講義の活用について

７．FD企画に係る講師謝礼について

8．教育の質向上プロジェクト予算執行計画変更時の対応について

9．授業改善アンケート結果データの開示請求（農学部）について（継続）

【報告事項】

1．大学教育開発センター委員会専門委員会の分担について

2．院高度化費および教育の質向上プロジェクトの審査分担について

3．平成29年度大学院生研究助成（A)(B)、国際的調査・研究助成募集状況について

4．各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織について

5．学外 FD 企画への参加支援について

6．平成29年度名城サプリメント教育の実施について

7．平成29年度学習サポートルームの稼働について

8．第８回大学教育開発センター委員会の開催日程変更について

第３回　平成29年６月１日（木）

【審議事項】

1．平成29年度院高度化費の使途について

（１）配布予算額の変更について

（２）大学院生研究助成（A)・(B）及び国際的調査・研究助成の採択について

（３）英語プレゼンテーション講座の実施について

2．学修行動調査の外部調査実施学部について

3．授業改善アンケート結果データの利用願について（農学部)(継続）

【報告事項】

1．大学教育学会第39回大会（広島大学、６/10（土）・６/11（日）開催）の開催案内について

第４回　平成29年７月６日（木）

【審議事項】

1．平成29年度授業改善アンケートのフィードバックについて

2．平成29年度教育年報（第12号）の発刊について

3．平成29年度 FD 活動報告書の発刊について

【報告事項】

1．大学教育開発センター委員会専門委員会分担の一部変更について

2．平成29年度前期授業改善アンケートの中間報告について

3．第19回 FD フォーラムについて

4．平成29年度私立大学等改革総合支援事業について

第５回　平成29年10月５日（木）

【審議事項】

１．名城サプリメント教育の運営について

（１）学部のニーズ調査結果について

（２）名城サプリメント教育の後期実施について

２．学習サポートルームの運営について

（１）オープンキャンパス企画および相談員座談会の実施報告について

（２）学習サポートルームの後期開室について

３．平成29年度後期授業改善アンケート実施に向けて

（１）前期授業改善アンケート実施報告について

（２）後期授業改善アンケート実施について

４．平成29年度教育功労賞推薦要項について

５．第19回 FD フォーラムについて

（１）FD 委員への周知依頼について

（２）司会について

６．各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の中間報告について

【報告事項】

１．平成29年度教育年報特集記事の推薦テーマについて

２．平成29年度私立大学等改革総合支援事業について

３．平成29年度大学教育再生戦略推進費「成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成（enPiT）」enPiT-Pro の採択について

４．平成29年度英語プレゼンテーション講座実施結果について

５．平成30年度文部科学省概算要求について

第６回　平成29年11月９日（木）

【審議事項】

１．教育の質向上プロジェクトについて

（１）平成29年度成果報告について

（２）平成30年度プロジェクトの公募について

２．授業改善アンケート（平成28年度後期･平成29年度前期）のデータ利用願について（農学部）

【報告事項】

１．第１回授業アンケート専門委員会会議報告について

２．第３回正課外プロジェクト専門委員会会議報告について

３．平成30年度推薦合格者入学前オリエンテーションについて

４．授業改善アンケートに係る学長方針について

（学部長会報告（平成29年10月20日開催））

５．各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織の活動（中間報告）について

第７回　平成29年12月７日（木）

【審議事項】

１．平成30年度教育の質向上プロジェクトの公募について

（１）募集内容（タイプ１、タイプ２）について

（２）審査ヒアリングの実施について

２．第６回 FD 学習会の開催について

【報告事項】

１．名城大学教育年報（第12号）の応募・編集状況について

２．第19回 FD フォーラムの実施報告について

３．平成29年度後期授業改善アンケートについて

第８回　平成30年１月11日（木）

【審議事項】

１．平成29年度教育功労賞審査について

２．第７回 FD 学習会の実施について

３．平成29年度教育の質向上プロジェクト成果報告会（ポスターセッション企画）について

４．平成30年度新任教職員 FD 研修について

【報告事項】

１．平成29年度後期授業改善アンケートの実施報告（中間）について

２．第６回 FD 学習会の実施報告について

３．内部監査結果報告書に関する改善計画書の提出について

第９回　平成30年３月19日（月）

【審議事項】

１．平成30年度院高度化費の充実施策について

【報告事項】

１．平成29年度大学教育開発センター委員会活動報告について

２．教育広報専門委員会の活動報告および次年度課題について

（１）名城大学教育年報

（２）FD 活動報告書

３．平成30年度名城サプリメント教育及び学習サポートルームの運営について

４．平成29年度後期授業改善アンケートの実施報告について

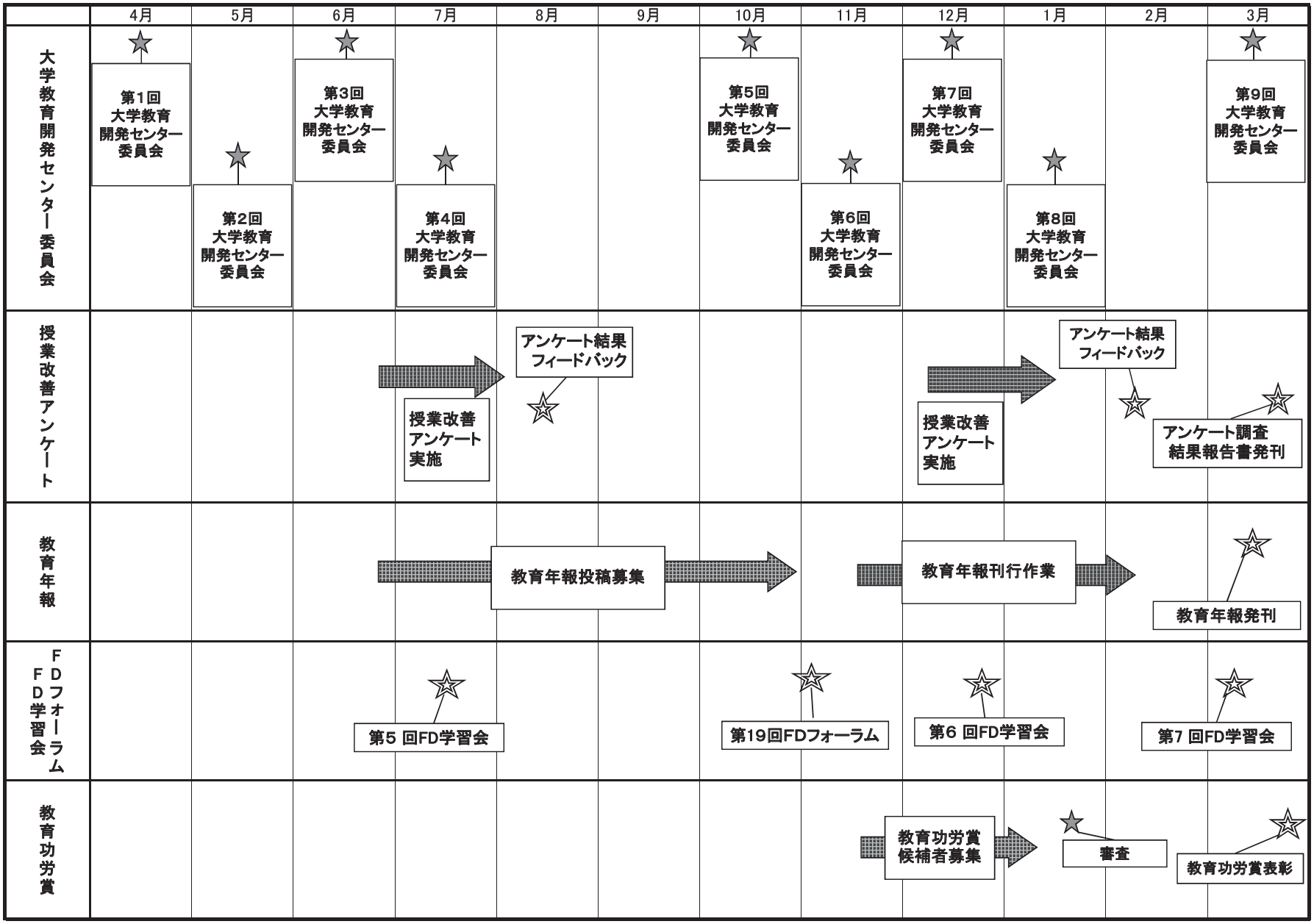
５．第７回 FD 学習会の実施報告について

６．大学院生研究助成採択者の助成辞退について

７．平成29年度各学部・研究科等における FD 取組推進組織の活動報告について

３．平成29年度 FD 活動一覧

平成29年度　FD 活動スケジュール



平成29年度　FD 活動一覧

1．第19回 FD フォーラム

日　　時：平成29年11月 9 日（木）　13：30～16：00

テ ー マ：「大学教養」で何を学ぶか

参加者数：105名

プログラム：

講演　「大学教養」で何を学ぶか

名古屋大学大学院人文学研究科　日比 嘉高 准教授

経済学部開講科目「現代社会に生きる」の紹介

名城大学　経済学部　渋井 康弘 教授

薬学部開講科目「人間と環境」の紹介

名城大学　薬学部　　原田 健一 教授

人間学部開講科目「現代に生きる」の紹介

名城大学　人間学部　加茂 省三 教授

2．FD 学習会

【第 5 回】

日　　時：平成29年 7 月18日（火）　16：00～17：30

テ ー マ：学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニング

―名城大学人間学部「現代に生きる」の実践―

参加者数：47名

講　　師：名城大学　人間学部　宮嶋 秀光 教授・学部長

【第 6 回】

日　　時：平成29年12月21日（木）　10：50～12：20

テ ー マ：学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニング

―農学部・外国語学部の「基軸科目」の実践―

参加者数：40名

講　　師：名城大学　農学部　　山岸 健三 教授（学務センター長）

名城大学　外国語学部　アーナンダ・クマーラ 教授・学部長

【第７回】

日　　時：平成30年３月９日（金）　10：50～12：20

テ ー マ：学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニング

―法学部・経営学部・都市情報学部の「基軸科目」の実践―

参加者数：45名

講　　師：名城大学　法学部　　伊川 正樹 教授

名城大学　経営学部　　高山 晃郎 准教授

名城大学　都市情報学部　森杉 雅史 教授

３．平成29年度前・後期授業改善アンケート

• 実施期間：前期…平成29年６月27日～平成29年７月24日

後期…平成29年12月12日～平成30年１月16日

• 対象科目：

学部の授業を担当する専任教員及び非常勤講師を対象とし、昨年度（平成28年度）前・後期にアンケートを実施した授業科目において実施した。昨年度の対象科目がない場合は、担当授業科目のうち、最も履修者数が多い授業科目において実施した。（ただし、体育科目、オムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目、履修者数が10名未満の科目は除く）

実施科目数は前期757科目（学生回答数：延べ　27,991件）

後期731科目（学生回答数：延べ　20,656件）

• 概　　要：

学生の授業に対する意見を把握し、改善点・要望事項を把握するとともに、調査結果を今後の授業改善の一助とするために実施した。

全対象科目のアンケートを Web 上で実施しており、集計結果は教員個人にフィードバックし、授業改善に必要な情報として活用されている。また、学部単位における FD 活動を推進する際に活用する材料として、強みと弱みを明確にした分析結果を報告書として取りまとめ、全教員に配布し、授業改善の素材として活用している。

４．全国私立大学 FD 連携フォーラム「ビデオ・オン・デマンド講義（VOD）」の提供

• 概　　要：

全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）は、中規模（8,000人）以上の学生が在籍する中規模以上の私立大学が協力して FD の分野において連携することを目的として、平成21年に発足し、本学も発足時から加盟している。

このフォーラムは、実践的な FD プログラムの共同開発・共同実施を通じて、私学の教育の質の保証をすることを大きな目的としている。プログラムのうち、本学においても、今年度から「ビデオ・オン・デマンド講義（VOD）」の受講促進を目指し、学内への普及を開始した。講義は、授業設計や教授・学習理論、教育評価論、高等教育政策及び大学管理運営など、幅広く準備されている。また、今後の SD の義務化に向けて、事務職員の利用も視野に

入れ、教職員の学習教材と位置づけ、次年度以降も普及を進める。

5．名城大学教育年報第12号発刊

- 発 刊 日：平成30年３月
- 発行部数：750部
- 概　　要：

本学における教育活動の研究・実践活動を共有・蓄積し、広く教育の質の向上に資することを目的として、教育実践報告の募集、教育功労賞受賞者及びFDフォーラム・FD学習会講師による特別寄稿を依頼した。

全教員及び各部局に配布し、他大学にも送付する（本学ホームページ上にも公開）。

教育年報の種別・内容等は次のとおりである。

	定義
教育実践報告	教育実践を対象とした取組で、本学及び他の大学の学部・研究科・センター・部署の参考になるような報告
特別寄稿　※	（１）教育功労賞受賞者による特別寄稿 （２）FDフォーラム、FD学習会講師による特別寄稿
特集記事　※	（１）アクティブ・ラーニング （２）学部・研究科における特色ある教養教育 （３）学部・学科横断的な教育取組
教育実践報告の投稿資格	名城大学の教職員（教員･事務職員）。本大学の教育に携わる他大学等の教育職員（非常勤講師）の投稿も可。退職者については退職後３年以内を目安とする。

※これらの定義は現時点で想定している事例であり、必要に応じて追加する。

第12号では、教育実践報告については内容の確認を経て、８報告を掲載。教育功労賞受賞者による特別寄稿１件、FDフォーラム・FD学習会講師による特別寄稿各１件及び特集記事３件を掲載した。

6．平成29年度FD活動報告書発刊

- 発 刊 日：平成30年３月
- 発行部数：250部
- 概　　要：

平成29年度の本学におけるFD活動をまとめたもので、大学教育開発センター委員会の活動報告や第19回FDフォーラムの報告を掲載した。本学の各部局に配布し、他大学にも送付する（本学ホームページ上にも公開）。

７．教育功労賞表彰

• 概　　要：

大学教育開発センター委員会では、教職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育の質の向上に資することを目的とし、各学部及び研究科等において、教育活動及び教育改善に大きく貢献した専任教員またはグループ（事務職員を含む）に教育功労賞を授与することとしている。今年度は、計２件の申請があり、大学教育開発センター委員会による審査の結果、いずれも相応しい内容であることから、表彰すると共に本報告書に活動内容を記載し、周知を図ることとした。

平成29年度教育功労賞取組一覧

氏名・グループ名	所属学部等	単独・グループ	表彰対象となった活動・テーマ
雑賀　憲彦	都市情報学部	単独	実践的企業演習
英語教育委員会・ 英語コアカリキュラム 担当教員	外国語学部	グループ	統一したカリキュラムの相乗効果

8．学外セミナー・研究集会等への派遣

【大学教育開発センターの予算執行分のみ掲載】

No.	開催日	企画名称	主催機関	派遣人数
1	平成29年6月3日	2017年度全国私立大学FD連携フォーラム総会・パネルディスカッション	全国私立大学FD連携フォーラム	1名
2	6月10日～11日	大学教育学会第39回大会（広島大学）	一般社団法人 大学教育学会	1名
3	6月24日	第1回工大サミット	愛知工業大学、大阪工業大学、芝浦工業大学、広島工業大学、福岡工業大学	1名
4	7月20日	実践行動学セミナー	一般社団法人 実践行動学研究所	1名
5	8月18日	大学生研究フォーラム2017	公益財団法人 電通育英会	1名
6	8月23日～24日	第7回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム	大学コンソーシアム八王子	2名
7	9月6日～7日	初年次教育学会第10回大会	初年次教育学会	1名
8	10月14日	大学院における社会人の学び直し「INIADで何ができるか」	東洋大学	1名
9	10月18日～20日	平成29年度（通算第55回）大学教務部課長相当者研修会	一般財団法人 私学研修福祉学会	2名
10	10月27日	第3回IR実務担当者連絡会	大学評価コンソーシアム	1名
11	10月31日	平成29年度 教育改革事務部門管理者会議	公益社団法人 私立大学情報教育協会	1名
12	12月10日	第3回ヨコハマFDフォーラム「学生調査の現状と課題―学生の声を基に調査結果の活用について考える―」	横浜4大学共同主催 （神奈川大学・関東学院大学・横浜市立大学・横浜国立大学）	1名
13	平成30年1月20日	2017年度中京大学FDシンポジウム「アクティブ・ラーニングとは何か―理論と事例から学ぶ―」	中京大学 教育推進センター	2名
14	2月22日	第46回中部大学FD講演会「内部質保証の実質化に向けて―第3期認証評価の要点―」	中部大学 大学教育研究センター	1名
15	2月26日	大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学 AP合同フォーラム「第3期認証評価に向けて：学生の成長に寄与する内部質保証システムの構築」	大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学	1名
16	3月10日	共創ワークショップ「学生調査から大学教育の課題を解決する」	ベネッセ教育総合研究所	1名

４．平成29年度
正課外教育活動一覧

平成29年度正課外教育活動一覧

1．入学前教育

（1）概要

本学の推薦入試等合格後、学習習慣を維持するとともに、入学後に大学での学習を円滑に開始するための一助とすることを目的とした教育プログラム。

主な内容として、①推薦合格者入学前オリエンテーション（入学する学部の教員等との交流の機会を持ち、今後の学習の厳しさを伝えるとともに、入学後の姿をイメージさせることで高校生から大学生への転換を図る）、② MEC プログラム（自宅学習＋スクーリング）で構成される。

≪ MEC プログラム開講科目≫【表の見方】◎・・・学部推奨　○・・・開講　―・・・未開講

MEC 開講科目		経営学部	外国語学部	人間学部	都市情報学部	理工学部	農学部	薬学部
科目名	主な学習内容							
Reading Ⅰ（初級）	平易な中文・長文読解 英検準２級～２級レベル	◎	◎	◎	◎	◎	◎	―
Reading Ⅱ（中級）	中文・長文読解など 英検２級レベル	◎	◎	◎	◎	◎	◎	―
英語の基礎	高校で学ぶ英文法基礎 英検３級～準２級レベル	◎	―	◎	◎	◎	◎	―
日本語表現	大学で必要となる 「読む・書く」の基本	◎	◎	◎	◎	◎	―	―
数学（文系）	数Ⅰ・A、数Ⅱ・Bまで 四則計算、統計など	◎	―	◎	◎	―	―	―
数学（理系）＜基礎＞	三角関数、微積など 数Ⅰ・Ⅱが不得意な人	―	―	―	―	◎	○	―
数学（理系）＜応用＞	三角関数、微積など 基礎力を高めたい人	―	―	―	―	◎	○	―
数学（薬）	数Ⅱ、数Ⅲ 関数の極限、微積など	―	―	―	―	―	―	◎ 未履修者中心
物理（理系）＜基礎＞	力学・運動方程式など 物理基礎が未履修・不得意な人	―	―	―	―	◎	○	―
物理（理系）＜応用＞	力学・運動方程式など 基礎力を高めたい人	―	―	―	―	◎	○	―
物理（薬）	力学・運動方程式など	―	―	―	―	―	―	◎
化学	電子配置、化学結合など	―	―	―	―	◎	◎	―
生物	細胞、遺伝子、呼吸など	―	―	―	―	―	◎	◎ 未履修者中心

※１　上記から２科目選択。

※２　法学部・経済学部は、MEC プログラムは未開講（オリエンテーションのみの実施）。

（2）参加者数及び実施日程

①推薦合格者入学前オリエンテーション：642名（平成29年１月８日実施）

② MEC プログラム：578名

（スクーリング期間：平成29年３月８日～３月10日、３月13日～３月15日のいずれか一方に出席）

（3）参加者アンケート結果（一部抜粋）

①推薦合格者入学前オリエンテーション

【オリエンテーションの満足度】

経営学部：98.0%　経済学部：99.0%　理工学部：94.4%　農学部：97.8%

薬学部：100%　都市情報学部：100%　人間学部：100%　外国語学部：100%

【自由記述】

- 入学前に先生方や先輩など、いろんな人と交流することができた。
- 大学の雰囲気を少しでも実感できた気がした。すごく楽しかった。
- MEC プログラムについて知ることができたし、大学生活の流れも理解することができたから。
- 大学入学までのモチベーションが上がって、頑張っていきたいと思った。
- 入学前からやるべきことをアドバイスしていただけ、入学までの期間の間にするべきことがしっかりわかった。

② MEC プログラム（自宅学習）

【自宅学習への満足度】 85.4%

【採点・コメント対応】 95.5%

【学力（理解度）の向上】 84.9%

【自由記述】

- 毎日勉強する習慣がついた。
- 怠けそうな時期に自宅学習があったから机に向かえた。
- しっかりと高校の復習ができた。
- 自分がどのくらい理解できているのか確認することができた。
- 添削コメントが丁寧でやりがいがあった。

③ MEC プログラム（スクーリング）

【スクーリングへの満足度】 96.5%

【学力（理解度）の向上】 91.8%

【大学での学びに自信が持てたか】 68.7%

【楽しく学べたか】 90.7%

【この科目が好きになったか】 79.3%

【この科目をもっと勉強したいと思うようになったか】 92.5%

【自由記述】

- 毎日勉強する習慣をつけることができた。
- 復習する習慣を維持することができた。
- 自分の苦手分野の再発見ができたから。
- 基礎的な部分から再確認ができた。
- 高校で習った事をとても効率よく復習をする事ができた。
- 日本語表現でのプレゼン作りで自分たちで話し合いなど、主体的に学習できた。

2．名城サプリメント教育

（1）概要

高等学校段階において未履修、もしくは受験科目の関係で学習が不十分な教科・科目のうち、本学の専門教育の履修の上で特に重要な諸単元について補習を行うことによって、正課における学修の充実を図る教育プログラム。

≪開講科目≫

科目名称	開講期・曜日・時間（キャンパス）		実施回数
数学（基礎）	前期	金曜日　16：30～19：30（天白キャンパス）	8 回
		火曜日　16：30～19：30（ナゴヤドーム前キャンパス）	8 回
	後期	金曜日　16：30～19：30（天白キャンパス）	13回
		火曜日　16：30～19：30（ナゴヤドーム前キャンパス）	14回
数学（演習）	前期	月・水曜日　18：30～21：30（天白キャンパス）	16回
	後期	月・水曜日　18：30～21：30（天白キャンパス）	24回
薬学部向け数学	前期	月曜日　16：30～18：00（八事キャンパス）	10回
化学	前期	月・金曜日　17：00～19：00（天白キャンパス）	16回
	後期	月・金曜日　18：10～20：10（天白キャンパス）	25回
生物	前期	火・木曜日　17：00～19：00（天白キャンパス）	16回
	後期	火・木曜日　18：10～20：10（天白キャンパス）	26回
薬学部向け物理	前期	水・木曜日　16：30～18：00（八事キャンパス）	10回
日本語表現	前期	木曜日　16：30～18：00（天白キャンパス）	8 回
		金曜日　13：00～14：00（ナゴヤドーム前キャンパス）	8 回
	後期	木曜日　16：30～18：00（天白キャンパス）	12回
		金曜日　13：00～14：00（ナゴヤドーム前キャンパス）	13回

≪実施期間≫

前期：平成29年４月10日～６月29日

後期：平成29年９月19日～12月22日

（2）利用者数（延べ数）

1016名

（3）受講者の感想

【数学基礎】

• 私は今まで塾に入ったことがなかったですが、一対一で教えてもらえる名城サプリから得ら

れるものは、塾や家庭教師、またはそれ以上に感じます。最近はサプリの日が楽しみになっています。

- 分からない所がきける機会なので、今後も行ってほしい。
- 極限公式が理解できたときはゾクゾクした。
- 同じ高校の友達が教えてくれたことがこの名城サプリを知ったきっかけです。私は工業高校出身で数学Ⅲを履修していなかったので、微分・積分が全く解らなかったが、先生が基本的なところから教えてくださったので、理解できました。
- 微分、不定積分、定積分の基礎は理解できたので応用問題も解けるようにしたい。
- 名城大学入学時にもらったパンフレットの中にあった名城サプリの広告を見て知った。自分１人でやるときとは比べものにならないほど、効率よく勉強できます。
- タワー８Ｆの自習室の中の掲示板を見て知りました。表面的にしか理解していなかったので深く理解することができ、新たな事を学べたのがとても楽しかったです。

【数学演習】

- 解けなかった問題が「なぜこうなるのか」という点をおさえ、解けるようになった。
- オイラーの公式の説明をしていただき、ありがとうございました。
- 積分の基本的なことがわかった。
- 行列について学習をもっと進めたい。

【化学】

- 苦手な人にとってはこれくらい丁寧だとありがたい。
- 原子と元素の違いがわかりやすかった。
- 苦手なモルの計算を分かりやすく教えてもらえてとても助かった。
- 異性体は非常に苦手だったのですが、実際に立体の模型を使って教えていただいたため、理解できました。ありがとうございました。

【日本語表現】

- 日本語についてまだまだ知らないことがたくさんあることを実感した。
- １、２年の間に「雑談力」を高めることのできる生活を送るようにする。
- 如何に自分がアカデミックジャパニーズを曖昧に使用しているかを思い知らされた。
- 敬語や言葉遣いに自信がないのでこれからしっかり使い分けできる大人になりたい。
- 引用の仕方も理解できたので、レポートを書くときには困らないと思った。
- 入学してから多くのレポートを書いてきたが、サブタイトルをつけたことは無かったため、いいレポートの基準を知ることができてよかった。
- 研究発表のテーマについて考えたが案がでなかったため、普段からニュースなどを見て関心を持つことが重要だと思った。
- これまでサブタイトルを意識してつけたことがなかったので、これからつけてみようと思う。

3．学習サポートルーム

（1）概要

学習の意欲や方法に関して特に問題を抱え、積極的かつ効果的な形で正課の学習に参加できていない学生を対象に、直面する諸問題の解決をアシストすることを通して、学生自身が自立した学習の意欲・方法を身につけ、充実した学生生活が送れるようにサポートする相談窓口。

≪開室時間帯≫

天白キャンパス	前期	火曜日９：10～17：00、水曜日14：50～18：00、 木曜日12：10～19：40、金曜日10：50～18：00
	後期	火曜日９：10～17：00、水曜日11：40～18：00、 木曜日10：50～19：40、金曜日10：50～18：00
ナゴヤドーム前 キャンパス	前期	火曜日16：30～19：30、木曜日14：00～17：00、 金曜日15：00～16：00
	後期	火曜日16：30～19：30、木曜日14：00～17：00、 金曜日14：00～15：00

（2）利用者数（延べ数）

天白キャンパス	前期（平成29年５月２日～７月18日）	36名
	後期（平成29年９月19日～12月22日）	133名
ナゴヤドーム前 キャンパス	前期（平成29年４月11日～７月４日）	25名
	後期（平成29年９月21日～12月21日）	34名

（3）相談内容

- 授業で課されたレポートの書き方について（情報整理の仕方、参考文献の使い方）
- 英語・簿記・自習や学習相談
- 卒業論文の指導及び大学院入試指導
- 微積分の問題、数Ⅲについての質問
- べき級数展開、マクローリン展開について
- 就職のための TOEIC 学習にはどのような勉強をすればよいか
- 留学志望動機の構成について
- 科学英語の英文音読テストの相談

（4）2017年度オープンキャンパスにおける学習サポートルーム企画について

学習サポートルームの場所や内容の周知（高校生・保護者、協力する在学生を対象）を図ることを目的として、ナゴヤドーム前キャンパス（7/22, 23）及び天白キャンパス（7/29, 30）で実施されたオープンキャンパスにおいて、学習サポートルームを活用したイベントを開催した。

企画内容及び参加者数については、以下の通りである。

日程	会場	企画内容	参加者数　内訳	合計
7月22日（土）	ナゴヤドーム前キャンパス	1日の学習計画を立ててみよう	①10：00　8名 ②11：00　4名 ③13：00　6名 ④14：00　4名	22名
7月23日（日）		印象に残る自己PRミニ講座	①10：00　10名 ②11：00　14名 ③13：00　7名 ④14：00　5名	36名
7月29日（土）	天白キャンパス	印象に残る自己PRミニ講座	①10：00　12名 ②11：00　9名 ③13：00　10名 ④14：00　10名	41名
7月30日（日）		1日の学習計画を立ててみよう	①10：00　2名 ②11：00　5名 ③13：00　5名 ④14：00　6名	18名

５．平成29年度
各学部・研究科等における
FD 取組を推進する組織の活動報告

各学部・研究科等における FD 取組を推進する組織一覧

学部	推進組織名	推進組織構成メンバー
法学部	FD 委員会	法学部長、協議員、大学教育開発センター委員（教務委員、学生委員の兼任を含む）
法学研究科	FD 部会	修士課程部会構成員全員
経営学部	GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会	経営学部長、経営学部協議員、キャリア委員、教務委員、FD 委員、担当委員
経営学研究科	教育制度改革委員会	経営学部長、経営学部協議員、経営学科長、国際経営学科長、主任教授、FD 委員、教務委員
経済学部	経済学部 FD 委員会	経済学部長、経済学科長、教務委員、経済学科委員 産業社会学科長、教務委員、産業社会学科委員 FD 委員
経済学研究科	経済学研究科 FD 委員会	研究科長、主任教授、研究科委員
理工学部	教育改善委員会	委員長（学部長指名）、学科委員（11名）、教養教育委員（１名）、物理教室委員（１名）、理工学部教務委員長、理工学部 JABEE 推進委員長、大学教育開発センター委員会委員（理工学部２名）、理工学部事務職員（２名）、必要に応じて委員長が指名する委員（若干名）
理工学研究科	教育改善委員会 （大学院教育 WG）	委員長（研究科長指名）、専攻科委員（11名）、教養教育委員（１名）、物理教室委員（１名）、理工学部教務委員長、理工学部 JABEE 推進委員長、大学教育開発センター委員会委員（理工学部２名）、理工学部事務職員（２名）、必要に応じて委員長が指名する委員（若干名）
農学部	農学部 FD 委員会	農学部 FD 委員を中心とする農学部関係教職員 （生物資源学科、応用生物化学科、生物環境科学科の各学科会議及び農場教員会議を分科会と位置づける）
農学研究科	農学研究科 FD 委員会	農学部戦略委員会の大学院担当委員を中心とした農学研究科関係教職員
薬学部	薬学部 FD 委員会	FD 委員長　大津史子、協議員、教務委員長、学生委員長、就職委員長、国試・CBT 対策委員長、教育開発センター長 教務係事務職員１名
薬学研究科	大学院薬学研究科 FD 委員会	薬学研究科主任教授、FD 委員２名、大学院担当事務職員１名。委員長は薬学研究科主任教授を充てる。
都市情報学部	都市情報学部 FD 委員会	FD 委員長、FD 委員、担当事務職員１名
都市情報学研究科	大学院学務委員会	大学院主任教授、大学院学務委員、担当事務職員１名
人間学部	人間学部 FD 委員会	FD 委員５名、学務委員長、教務事務職員１名
人間学研究科	人間学研究科 FD 委員会	FD 委員２名、主任教授、教務事務職員１名
外国語学部	外国語学部 FD 委員会	FD 委員会委員長、FD 委員会委員
総合学術研究科	総合学術研究科教育検討部会	◎田中義人　教授、○伊藤康児　教授、高倍昭洋　教授、原田健一　教授、志村ゆず　准教授、景山伯春　准教授
法務研究科	法務研究科 FD 委員会	委員会は、研究科委員会で選出された委員で組織する。
教職センター	教職センターFD 推進委員会	曽山 和彦（教授・教職センター長） 谷口 正明（准教授・大学教育開発センター委員会委員）

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　法学部　　）
推進組織名（　　FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

「学生の現況にかかる情報、ならびに授業運営の知識と経験の共有化」という活動目標のもと、法学部においてはとりわけ初年次教育に関連する活動と新任教員の教育能力向上にかかる活動に取り組んできた。以下、現時点までの活動を簡単に挙げておきたい。

１）３回にわたる初年次教育研究会の開催

法学部では、質の高い初年次教育のあり方を集中的に検討するための研究会（初年次教育研究会）を２年前から定期的に開催しており、成果を挙げつつある。今年度については、初年次生の文章作成能力の現状分析とその結果の共有、ならびにそれをいかに授業にフィードバックしていくべきか、その方策を検討することに力点を置き、活動を行った。また、それを新カリキュラムである１年生前期のゼミナール（「基礎演習Ⅰ」）や１年生の自動登録科目である「法学入門」「政治学入門」といかにリンクさせていくかの検討も合わせて行った。初年次教育全般の質の向上にむけて、確かな手がかりを得ることができたと考えている。

２）小論文講評会の開催

「学びのコミュニティ創出支援事業」と連動させる形で、初年次生を対象にした小論文課題の実施とその講評会を７月と11月の２回にわたり開催した。講評会においては、講義形式での講評を行うだけでなく、学生相互で文章力の錬成に取り組むことができるよう、作成された文章の評価ならびに評論をグループで検討させるという、アクティブ･ラーニングの手法も導入した。【←①学生の主体的な学び（アクティブ・ラーニングの推進）に関する取組】

３）新任教員座談会の実施

10月に新任教員を対象とした座談会を実施した。新任教員ならではの悩みについて情報を交換するとともに、ベテラン教員の実践例を紹介することによって、授業運営のノウハウのいくつかを新任教員と共有することができた。また、新任教員だからこそ気づくことができる法学部の問題点を指摘してもらうことにより、授業運営にかかるいくつかの課題を浮かび上がらせることもできた。

４）フィールドワーク実習の実施

フィールドワーク実習として、前期は海外研修（アメリカ、台湾）や裁判傍聴（名古屋地裁・高裁）、県庁見学を事前･事後学習も含む形で実施した。後期においても同じ企図にもとづくフィールドワーク実習が行われた。【←①学生の主体的な学び（アクティブ・ラーニングの推進）に関

する取組、②多様な学修経験に関する取組】

5）各種セミナー、シンポジウムの取り組み

学部独自の取り組みとしては、日本とは異なる文化圏における法のあり方を考える法文化セミナー（6月21日、28日／11月16日、30日の計4回実施）やアメリカ法セミナー（6月2日、3日）を開催した。また、愛知県選挙管理委員会事務局を招いた特別講義「日本における選挙制度と選挙を巡る最近の状況」を実施した。いずれも、学生の多様な学修経験の担保に寄与したと考えている。【←②多様な学修経験に関する取組、③その他学部独自の取組】

2．今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

教員間の授業運営にかかる意識と知識の共有はかなりの程度において進んできているが、そのフィードバックがまだ十分とは言えないところがある。次年度はそのフィードバックにかかる具体的な方策について検討を加えていきたい。

また、次年度は新カリキュラム導入から3年目を迎えることもあり、その成果と課題をまとめつつ、教員の授業運営にかかる意識と知識の共有をさらに深めるための活動を企図している。

とはいえ、ここ数年における取り組みが成果を挙げつつあることもあり、基本的には大きく体制を変化させることなく、これまでの成果をさらに発展させる方向での活動を行いたい。

3．活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年7月20日	初年次生の文章作成能力向上について（初年次教育研究会）	〔教員〕近藤学部長・伊川協議員・仁井田FD委員・足立・伊藤・植木・北見・笹岡・代田・野上・野口・萩野・長谷川・前田・松本・矢嶋・柳沢（雄）・山口・渡邊 〔職員〕岡田・角田
2	平成29年9月21日	「法学入門」ならびに「基礎演習Ⅰ」の授業運営について（初年次教育研究会）	〔教員〕近藤学部長・伊川協議員・仁井田FD委員・北見・笹岡・代田・杉浦・野上・野口・前田・松本・矢嶋・柳・柳澤（武）・柳沢（雄）・山田・山本（浩）・渡邊 〔職員〕舘
3	平成29年10月5日	新任教員の授業運営について（新任教員座談会）	〔教員〕伊川協議員・仁井田FD委員・足立・笹岡・代田・杉浦・山口・山本（浩）
4	平成30年2月28日	初年次生の文章作成能力と導入科目との成績連関から考える初年次教育のあり方について（初年次教育研究会）	法学部所属全教員・職員が対象
5	平成30年3月1日	初年次教育の質向上にむけての情報共有と意見交換（教授会）	法学部所属全教員

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　法学研究科　　）
推進組織名（　　FD 部会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

FD 部会においては、博士論文の質の向上を目指すべく、博士課程の担当教員によって、博士論文の指導のあり方、とりわけ現行の予備審査制度の改善点について意見を交換する会議を開催した。また、前年度と同様、修士論文の質の向上を目指すべく、修士論文提出者を抱えるそれぞれの指導教員によって、修士論文作成にあたっての指導方針、指導するにあたっての注意点、今後へむけた提言を示していただく。その上で、修士論文の指導について広く意見を交換する会議を開催する予定である。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

法学研究科に在籍する大学院生が少なく、大学院生を指導している教員の数がかなり限られてしまっているため、まとまった形での FD 活動が行いにくいという現状がある。それゆえに、論文指導にかかる情報と意識の共有が不十分であり、その改善を図るための諸方策を検討していくことが課題となっている。また、前年度からの課題である、長期履修者に対する指導のあり方についても引き続き検討を加えていく必要がある。

また、法学研究科においてはいくつかの制度変更も検討されているため、それに合わせた指導のあり方についても、今後は議論を重ねていく予定である。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成30年２月16日	博士論文の指導について	法学研究科全教員
2	平成30年３月１日	修士論文の指導について	法学研究科全教員

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経営学部　　）
推進組織名（ GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

①学生の主体的な学びに関する取組

・８ゼミで延べ14回の企業訪問調査を実施した。

・前期に FSP 講座を８社の協力により、８ゼミで実施した。

・「キャリア特論」を開設し、夏休み期間に企業実習を３日間実施、11名の学生が参加した。

・移動ワゴンによる被災地復興のチャリティー販売（10月のプレ販売、大学祭）を実施した。

②多様な学修経験に関する取組

・夏休み期間中にアメリカで学生７名の参加により、「国際フィールドワーク」を実施した。

・交換留学として、平成29年９月から２名の学生を中国、台湾の大学へ派遣した。

・台湾への交換留学生が、現地企業でインターンシップを実施した（帰国後「海外インターンシップ」として単位認定を予定）。

・夏期海外語学研修に参加した学生７名について、「海外語学実習」（２単位）を単位認定した。

③その他学部独自の取組

・新入生歓迎会を４月15～16日に岐阜県郡上市で２年生を主とする実行委員が企画、運営した。

・特定非営利活動法人 MILLIANCE と６月８日に連携基本協定を締結した。

・輝く女性講演会を９月、10月にそれぞれ１回、12月に２回の計４回実施した。

・簿記１級合格を目指しての講座をエクステンションセンターとの連携により支援した。

・経営学部２年生を対象として、学修成果可視化の外部調査（PROG テスト）を10月に実施、12月に結果を学生にフィードバックした。

・将来の寄付講座等の開設に向けて、１月に愛知県社会保険労務士会と連携協定を締結することを決定した。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

名城大学および経営学部が目指す「生涯学びを楽しむ」「学びのコミュニティを創り広げる」ための PDCA サイクルを推進する組織として、本年度より経営学部 FD 委員会を従来から設置されてきた GP 等教育支援プロジェクト委員会と一体化し、鋭意、FD 活動を進めている。

学部長・協議員・教務委員長・キャリア委員・FD 委員・事務長をメンバーとして、毎月１回の開催を目安に招集し、その都度、GP/FD 活動の年度計画の PDCA 活動を行い、教授会において全構成員で教育改善のための議論をしている。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月20日	MILLIANCE との連携基本協定案、輝く女性講演会、次年度 FSP 講座	瀬川、田代、橋場、堀川、田澤、相川、五十畑、水野
2	平成29年５月18日	学修成果可視化の外部調査実施、輝く女性講演会	田中、瀬川、田代、東田、橋場、田澤、五十畑
3	平成29年６月29日	PROG テストの実施方法・実施時期、FSP 講座と基礎ゼミのあり方	田中、瀬川、田代、東田、橋場、堀川、相川、田澤、五十畑
4	平成29年９月14日	PROG テストの実施、第１回輝く女性講演会、国際フィールドワーク	田中、瀬川、田代、東田、橋場、相川、田澤、五十畑、水野
5	平成29年10月12日	第２回輝く女性講演会、次年度 FSP 講座	東田、橋場、田澤、五十畑、水野
6	平成29年11月30日	第３回・第４回輝く女性講演会、PROG テストの結果、次年度 FSP 講座	田中、瀬川、田代、東田、橋場、相川、田澤、五十畑、水野
7	平成29年12月21日	愛知県社会保険労務士会との協定締結、次年度学びのコミュニティ等予算申請	田中、瀬川、田代、東田、橋場、相川、田澤、五十畑、水野
8	平成30年１月18日	次年度 FSP 講座、次年度学びのコミュニティ等予算申請	田中、瀬川、田代、東田、橋場、相川、田澤、五十畑、水野

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経営学研究科　　）
推進組織名（　　教育制度改革委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

①学生の主体的な学びに関する取組

・７月および12月に修士論文事前報告会を実施。

・企業からの講師による特別講義の実施（集中講義）。

②多様な学修経験に関する取組

・９名の大学院生の参加により、９月に中国（北京）で企業フィールドワークを実施。

③その他研究科独自の取組

・平成29年度より、博士後期課程における新カリキュラム導入（単位化）。

・大学院海外指定校との学術研究活動のさらなる交流の活性化、拡大の検討。

・愛知県社会保険労務士会等と社会人学生の確保および研究指導体制の検討。

・特任助手の活用。

・株式会社テクノスマイルと産学連携事業（アジア経営者向けトップマネジメントセミナーの実施）の実施で合意。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

今年度より、学部と研究科の連動性を高めることをひとつの目的に教育制度改革委員会を GP 等教育支援プロジェクト委員会・経営学部 FD 委員会に統合し、新たな展開を試みる。また、入学定員確保に向けて、海外協定校、愛知県社会保険労務士会等との連携強化の他、中部地区５大学院単位互換制度の運用に取り組む。さらに修士課程におけるカリキュラム改正（スリム化）の検討を開始する。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月13日	海外大学院訪問報告（ミャンマー、タイ、ベトナム）	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大﨑、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、長尾、橋場、東田、前田、宮崎、柳田、山本
2	平成29年４月27日	平成29年度９月修了予定者修士論文テーマ発表会について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大﨑、大西、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、長尾、橋場、東田、前田、宮崎、柳田、山本

回	日　程	議　題	出席者
3	平成29年９月16日	教職課程に係る再課程認定申請の確認について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、長尾、橋場、東田、前田、宮崎、柳田、山本
4	平成29年10月12日	平成30年度修士課程時間割編成について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大﨑、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、長尾、橋場、東田、堀川、宮崎、柳田、山本
5	平成29年10月26日	平成30年度修士課程時間割編成について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大﨑、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、長尾、橋場、東田、堀川、宮崎、柳田
6	平成29年11月30日	修士論文題目一覧および事前報告会について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、長尾、橋場、東田、堀川、宮崎、柳田
7	平成30年１月11日	修士論文題目一覧について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大﨑、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、橋場、東田、宮崎、柳田
8	平成30年１月20日	修士論文審査日程、株式会社テクノスマイルとの産学連携について	田中、相川、五十畑、伊藤、今井、大﨑、大西、岸川、澤田慎、澤田貴、謝、瀬川、高山、田澤、田代、鳥居、橋場、東田、堀川、宮崎、柳田

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経済学部　　）
推進組織名（　　経済学部 FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

平成29年度経済学部 FD 活動目標

「各教員が個人的に培ってきた教育に関するノウハウや経験を、学部内の教員全員で共有し、学部教育の改善・充実をはかる。特に今年度は、学生の主体的学びの育成について重点的に取り組む」(平成28年度からの継続)

具体的取組内容（平成28年度からの継続）

1．従来から行っている活動の FD としての捉え直し

従来から進めている以下のような取り組みを捉え直し、その活動記録を作成する。

・新入生セミナー、デイハイク、レポートフェスティバル、社会 / 国際フィールドワーク等。これに加え、特色ある専門ゼミ活動の事例報告とその共有、専門ゼミ募集活動などを加える。

・GPA の取り組み。引き続き検討。GPA を使った成績不良学生などへの指導を行う等。

・カリキュラム編成の際の議論

・学部 FD 懇談会の開催

2．学部教育に関する諸問題を教員同士で話し合う。FD 委員会で実施している T ＆ L カフェの方法を踏襲する（まず少人数で指定されたトピックスについてディスカッションを行い、最後に各グループの代表が参加者全員に対して議論の結果をごく簡単に報告する。）

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

上記の活動目標の徹底化を図る。具体的には新入生セミナー、デイハイク、レポートフェステイバル、社会／国際フィールドワーク等々の経済学部独自の取り組みを通じて、「学生の主体的学び」、「多様な学習経験に関する取組」等々の一層の充実を図ってゆきたい。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年７月13日（木）	平成29年度の FD 委員会の活動目標、活動予定、FD 懇談会等について	学部長（山本）、学科長（松尾、岸川）、学科委員（谷村、杉本）、教務委員（折原、新井）、浅岡
2	平成29年11月30日（木）	平成29年度前期の活動報告・後期活動予定およびアクティブラーニングの検討について	学部長（山本）、学科長（松尾、岸川）、学科委員（谷村、杉本）、教務委員（折原、新井）、浅岡
3	平成29年12月18日（月）～22日（金）	「地区懇談会から考える経済学部教育」をテーマにメール会議を実施	学部長（山本）、協議員（渋井）、学科長（松尾、岸川）、谷村、杉本、伊藤（健）、伊藤（志）、勝浦、佐土井、杉山、鈴木（英）、野口、斎藤、名和、新井、岸野、李、西山（賢）、山田、澤田、蓑輪、大瀧、川森、西山（徹）
4	平成30年１月25日（木）	卒業時アンケートの検討	学部長（山本）、学科長（松尾、岸川）、学科委員（谷村、杉本）、教務委員（折原）、浅岡

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経済学研究科　　）
推進組織名（　経済学研究科 FD 委員会　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

平成29年度経済学研究科 FD 活動目標

「各教員が個人的に培ってきた教育に関するノウハウや経験を、大学院内の教員全員で共有し、大学院教育の改善・充実をはかる。特に今年度は、学生の主体的学びの育成について重点的に取り組む」(平成28年度からの継続)

具体的内容（平成28年度からの継続）

1．従来から行っている活動の FD としての捉え直し

従来から進めている以下のような取り組みを FD として捉え直し、その活動記録を作成する。

・オリエンテーション、大学院生研究発表会、教員と大学院生交流会、大学院教育改善プロジェクト。授業改善アンケートについての制度設計を行う。大学院生のフィールド・ワーク研究に際して、指導教授以外の他の教員のアドバイスも受けられるようにしたらどうか。（リサーチ・デザイン）

2．研究科 FD 懇談会の開催

大学院教育に関する諸問題を教員同士で話し合う。FD 委員会で実施している T&L カフェ方式の方法を踏襲する（まず少人数で指定されたトピックスについてディスカッションを行い、最後に各グループの代表者が参加者全員に対して議論の結果をごく簡単に報告する）。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

大学院生が非常に少ない中で、授業改善アンケートをどのように実施すべきかが引き続き今後の課題であると認識している。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年７月13日（木）	平成29年度大学院 FD 委員会の活動目標、活動予定、FD 懇談会等について	研究科長（山本）、主任教授（鈴木英夫）、教務委員（折原、新井）、杉本、浅岡
2	平成29年11月30日（木）	平成29年度前期活動報告及び後期活動予定	研究科長（山本）、主任教授（鈴木英夫）、教務委員（折原、新井）、杉本、浅岡

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経済学部・経済学研究科　　）
推進組織名（　　経済学部 FD 委員会・経済学研究科 FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

経済学部・経済学研究科では今年度の FD 活動目標を昨年度と同様に「各教員が個人的に培ってきた教育に関するノウハウや経験を、学部内の教員全員で共有し、学部教育の改善・充実をはかる。特に今年度は、学生の主体的学びの育成について重点的に取り組む」とした。経済学部 FD 委員会と経済学研究科 FD 委員会がこの目標を推進する主体的組織として活動を進めている。

学生の主体的学びの育成に資するものとしていくつかの取り組みを続けている。まず、「学びのコミュニティ創出支援事業」として今年度は「モスクワ大学ビジネススクール、韓国中央大学との国際 WEB 会議共同研修による課題解決型プロジェクト」、また「専門ゼミをベースとし、体験型プログラムを通して課題解決能力を育成する取り組み」として①「再生可能エネルギー普及とエネルギー自治：飯田市の事例を題材として」、②「多民族国家マレーシアにおける自動車産業の現状と課題」、③「ミャンマー工業団地における日本人管理者とミャンマー人従業員の意識調査」、④「台湾におけるヤマト運輸の宅配便事業～わが国への示唆～」の４つのプロジェクトが実施された。さらに、「グローバル社会へ向けた映像メッセージの制作・発信プロジェクト」においては、より良い市民社会の形成を目指す公益団体や、国際機関が主催する「フォト・ビデオコンテスト」への応募を視野に、問題構造の討議、画像・映像作品の制作を続けている。

フィールドワークや語学研修等の多様な学修経験に関する取組は、「社会フィールドワーク」、「国際フィールドワーク」、専門ゼミなど授業の中で、従来より継続的に行ってきた。今年度は「社会フィールドワーク」として、「愛知空襲と愛知の産業構造」、「動物と経済の関係を考える」、「「ものづくり・流通・販売」人材の「プロ」を目指すために―アパレルメーカーを目指す人材の育成―」、「長者町ににぎわいをつくるフィールドワーク」、「名古屋市の上下水道事業」の５プログラムが実施され、資料調査、ヒアリング、アンケート調査等々学生の授業への積極的な参加を促す取り組みを続けている。また「国際フィールドワーク」としては、昨今の治安の悪化により、以前のようにヨーロッパやアメリカなどの研修は中断せざるを得ない状態が続いており、今年は台湾とシンガポールでの研修のみが実施された。この研修を通して各国の経済・歴史・文化などについて学ぶとともに、台湾においては、名城大学と協定を結んでいる３大学と共通課題で英語（中国語）によるプレゼンテーションも実施された。

他の取り組みとしては、名城大学との協定校であるモスクワ大学からビジネススクールの学生15名を招くとともに、大学院・学部からの参加希望者を募り交流会を行った。英語でのプレゼンテーションや討論、トヨタ工場の見学などが実施された。

例年の取り組みとしては、新入生セミナー、デイハイク、大学院生研究発表会、第15回経済学部ゼミナール・レポートフェスティバルを実施した。新入生セミナーではスムーズなスタートができるように、例年履修指導、時間割作成指導を重点的に行っている。終了後には、各教員から改善が必要な点についての意見を集約して次年度の準備につなげている。

今年度はテーマを設定してフリー・ディスカッション形式で行う FD 懇談会を、学部と研究科合わせて 6 回（今後の開催予定を含む）実施した。基本的に教授会・研究科委員会の前後に開催することとし、多くの構成員が参加できるようにしている。今年度は前年度に引き続き授業改善アンケートの Web 化に伴って回答率の低下が顕著になってきており、その改善について検討した。大学院については学生数が少ない状況の中でどのような改善方法が可能か検討した。また例年10月に実施されている地区懇談会の結果をもとに、メール会議を実施した。多数の有意義な意見が寄せられ、今後の FD 活動に活かしていきたい。

新たな課題としては、アクティブラーニングや卒業時アンケートの結果についての検討と意見交換を行った。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

FD 活動の方向性としては、基本的には例年通りの取り組み内容を継続して実施していく。各委員会、新入生セミナー、ゼミナール・レポートフェスティバルなどの学部行事の実行委員会・担当者と連携し、FD 懇談会などを通して報告や意見交換を行う機会を積極的に設けてゆきたい。それにより課題や改善が必要な点を学部・研究科として共有することをさらに進めていきたい。また、それぞれの授業における特徴的な取り組みについても学ぶ機会を設け、継続的に授業改善につなげていきたい。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　理工学部　　）
推進組織名（　　教育改善委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

平成29年度においては、学部の教育に必要な教育改善の推進と支援を活動方針とし、基礎演習科目の履修促進、数学相談室・物理相談室の開設など基礎学力向上を目標とする取り組みを引き続き進めると同時に、学生指導支援のシステム化、教員の学生指導能力向上に関わる教育フォーラム開催などの具体的な活動に取り組んできた。

基礎学力向上の取り組みは特に近年充実が図られてきた。毎年度本学部では基礎学力が低い学生向けに数学・物理学・化学・英語の基礎演習科目を置くとともに、数学・英語に関しては更に発展的な内容を勉強できるよう基礎演習（アドバンストコース）科目も開講されている。本委員会では新入生オリエンテーションにおいて、数学基礎知識習熟度自己診断テストを実施し、基礎演習科目の履修を促している。更に数学相談室、物理相談室が開設され、学生からの質問に答える体制が整えられており、その運営状況は本委員会で報告されている。また、数学教育に関しては、新カリキュラム導入時に再試験受験に向けた数学の補習制度が導入されている。そのほか附属高校特別推薦候補者の円滑な学修活動開始を目的とした入学前指導の企画を進め、加えてMEC プログラムへの対応、リメディアル教育への対応も引き続き実施している。

特に、本年度「全学対応教育学生指導支援 Web システムの開発」なる取組名称にて「教育の質向上プロジェクト」に採択され、学生の学修行動を探る一方策として「学修行動管理ソフトPASTEL」の機能拡張を行い、学生の単位取得状況、興味・関心などの把握を行いながら、個々の指導ができる仕組みの構築を全学的に展開する目的にて再検討を試みた。

また、理工学研究科再編により２専攻が発足したことも踏まえ、一昨年度より学科ごとに、成績上位層を更に引き上げ、進学率の向上を含む大学院への円滑な接続に繋がる取り組みを MS-26 推進事業に関連した事項としては、様々な企画にて継続している。これらの企画は学生の主体的な学びの推進に繋がっている。

さらに、「教育をサポートする特別支援教育」と題して、理工学教育推進フォーラムを開催した。同フォーラムは３部構成にて開催し、第１部では学生の多様な学修経験に結びつけることも考慮し、「学びあいを通してのキャリア形成～キャリア形成支援現場から見た FD～」をテーマに学外講師に依頼し講演いただき、学生のキャリア教育についての議論を行った。第２部では、「発達障害を持つ学生の現状について」をテーマに、学内講師に依頼し講演いただき、発達障害に関する基礎的な内容、支援、理工学部の現状について情報共有し、発達障害を持つ学生を含む学部教育の在り方についての議論を行った。さらに第３部にて上記教育の質向上プロジェクトの中間報告として、教育学生指導支援 WEB システムの全学対応に向け、利便性や今後の開発スケジュールなどを紹介しながら、現状報告を行った。全体にわたり、質疑応答において、活発な議論が展開され、成果を上げることができたと思われる。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

基礎学力向上の取り組みは今後も充実するよう、必要であれば改善しながら実施する。更に、学生の勉強意欲、発想力、研究力を向上するための企画を検討する。全学対応教育学生指導支援WEBシステムの開発に関しては、大学システムにどのように組み込むことができるのかをより具体的に検討していく必要がある。理工学教育推進フォーラムでは、参加教員からの質問を通じて活発な議論が展開され、ある程度の成果を上げることができたと思われるが、理工学部全教員に対する参加教員人数は決して多いとはいえない。今後、どのようにして参加教員数を増やしていくかという課題が残る。フォーラムにおける資料の全教員への配布、ビデオ等にて後日内容紹介するなど対策を検討する予定である。フォーラムの目的は単に開催するだけでなく、新しい発想を生み出し、実践に移すことに重要性がある。本委員会において、引き続き実践に繋がる企画となるよう更に検討する方向で考えている。

3．活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月13日	数学相談室・物理相談室の利用状況報告、H28年度後期統一試験（数学・物理・英語）の結果報告、新年度委員への申し送り、JSAAP希望学科募集	各学科新旧教育改善委員等（21名:齊藤（公)、加藤（芳)、土田、山田（宗)、村田（英)、六田、坂東、池本、大島、鈴木（昌)、西村、芦澤、市川、新井、松田（和)、大久保、中村（栄)、土屋、宇佐美（勝)、小高、石川)、理工学部事務員（２名：川村（恭)、伊藤（領)）
2	平成29年５月１日	理工学教育推進フォーラムの企画	WG構成員（５名:六田、山田（宗)、坂東、西村、新井)、理工学部事務員（２名：川村（恭)、伊藤（領)）
3	平成29年５月２日	理工学教育推進フォーラムの企画	WG構成員（５名:六田、山田（宗)、坂東、西村、新井)、理工学部事務員（２名：川村（恭)、伊藤（領)）
4	平成29年５月18日	附属高校特別推薦候補者入学前指導、前期数学相談室開設期間、教育の質向上プロジェクト	各学科教育改善委員等（14名：齊藤（公)、土田、山田（宗)、村田（英)、六田、坂東、西村、市川、新井、谷口、松田（和)、土屋、小高、垣鍔)、理工学部事務員（２名：川村（恭)、伊藤（領)）
5	平成29年５月24日	理工学教育推進フォーラム講師選出	WG構成員（５名:六田、山田（宗)、坂東、西村、新井)、理工学部事務員（２名：川村（恭)、伊藤（領)）
6	平成29年７月６日	理工学教育推進フォーラムの確認	各学科教育改善委員等（12名：齊藤（公)、土田、山田（宗)、村田（英)、坂東、大島、西村、市川、新井、谷口、小高、垣鍔)、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊)）

回	日　程	議　題	出席者
7	平成29年９月14日	理工学教育推進フォーラム「教育をサポートする特別支援教育」開催	理工学部教員（30名：江尻、齊藤（公）、土田、許斐、冨田、三町、内村、向井、柳田、山田（宗）、旭、亀谷、川澄、村田、六田、大脇、坂、坂東、藤山、アブラハ、大島、塚田、加鳥、西村、小高、谷口、広瀬、松田（和）、長澤、中村（栄））、理工学部事務員（４名:青木、堀口、吉田、鈴木（尊））
8	平成29年10月19日	附属高校特別推薦候補者入学前指導に係る学生の選出、平成29年度前期数学相談室利用状況報告、平成29年度前期統一試験の結果報告、数学基礎知識習熟度自己判断テストの検討等	各学科教育改善委員等（15名：齊藤（公）、土田、山田（宗）、村田（英）、六田、坂東、大島、西村、市川、新井、谷口、土屋、中村（栄）、小高、垣鍔）、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊））
9	平成29年11月30日	平成29年度後期数学相談室の開設案内、附属高校特別推薦候補者入学前指導事前打ち合わせ、数学基礎知識習熟度自己診断テストの検討（継続）、教育改善委員会における MS-26 推進事業への新規申請についての確認　等	各学科教育改善委員等（13名：齊藤（公）、垣鍔、土田、山田（宗）、村田（英）、六田、坂東、大島、西村、新井、松田（和）、土屋、中村（栄））、理工学部事務員（２名:堀口、鈴木（尊））
10	平成29年12月９日	附属高校特別推薦候補者入学前指導実施	各学科教育改善委員等（３名：齊藤（公）、小高、六田）、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊））
11	平成30年１月18日	附属高校特別推薦候補者入学前指導実施報告、学びのコミュニティ創出支援事業申請（案）の確認、新入生オリエンテーションでの配布物の確認、平成30年度数学相談室及び数学科目の補習日程の確認　等	各学科教育改善委員等（14名：齊藤（公）、小高、垣鍔、土田、山田（宗）、村田（英）、六田、坂東、大島、西村、新井、谷口、松田（和）、土屋）、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊））

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　理工学研究科　　）
推進組織名（　　教育改善委員会（大学院教育 WG）　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

文部科学省の教育振興基本計画における高等教育の改革に伴い、大学院についても教育・研究の充実が求められている。認証評価の審査結果を踏まえ、本研究科では平成28年度から大学院教育改善委員会を新たに設置し、大学院に係る FD 活動を学部と切り離し個別で実施する検討に入っている。さらに、平成29年度から新しく応用化学専攻とメカトロニクス工学専攻の２専攻が加わり、本研究科は全11専攻を有する研究科として新たな体制を発足した。大学院における専攻が細分化され、学生の多様な要望に対応できるようになった。

本研究科の教育理念に準拠し、創造性・国際性豊かな技術者・研究者を養成するために必要な教育改善を行うことを活動方針とし、本年度は、各専攻における専門力、発想力、研究力等の向上を目標とする取り組みを検討すると同時に、横断的教育や上記若手技術者・研究者養成のための教育研究体制などの実践に向けたフォーラム開催の具体的な活動に取り組んできた。大学院において研究するためには、何よりもまず学生自身に主体性がなくてはならない。本研究科では、現在既に学生の主体的な学びに充分応え得る教育体制を整えているが、上記の試みは、これらの上に立ち、更に、大学院における多様な学修経験、教育･研究プロジェクトなどの検討を通して、より良い教育・研究体制を目指すものである。

特に、本年度「学びのコミュニティ創出支援事業」に「大学院における横断的教育と実践的な FD フォーラム」が採用され、フォーラムを本委員会主催にて、２部構成として開催した。第１部では、「enPiT の評価活動から考える実践教育」をテーマとして、名古屋大学大学院情報学研究科の山本雅基特任教授に講演依頼し、同大学が他大学と連携して取り組んでいる「成長分野を支える情報技術人材の育成拠点形成（enPiT）」について詳細な説明をいただいた。併せて、質疑応答を通じ、社会での実践力を養成するための社会人教育の必要性及びその方法について議論を行った。第２部では、「東北大学における数学連携の取組み事例」をテーマとして、東北大学大学院情報科学研究科の尾畑伸明教授に講演依頼し､同大学における数学分野での教育を中心に、大学院における他分野との横断的な研究プロジェクトおよび若手研究者育成などへの還元教育の取り組みを紹介いただいた。併せて、質疑応答を通じ、数学分野と他分野との共同研究、交流について議論を行った。両講演ともに本研究科の各専攻において教育･研究に関する企画･プロジェクトなどにも展開され得る内容であり、懇親会における交流も通じて、成果を上げることができたと思われる。

また、本研究科において英語教育は、学際的情報を全世界に発信するという観点から大変重要な位置を占めている。本研究科入学試験外国語科目での TOEIC 成績採択､本研究科共通科目『科学技術英語』の開講、国外大学教授による集中講義の設置などにより、国際的に活動できる知識･能力をもつ研究者・技術者養成のため、学部から大学院教育へと円滑に導く体制づくりを継続し

ている。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

大学院理工学研究科教育改善委員会を中心活動組織とし、各専攻と連絡を密にしながらFDの取組を推進する。大学院における横断的教育としての集中講義については、教員に過度の負担がかからないように設定する必要がある。例として、授業科目ではなく専攻横断的な研究プロジェクトとし、教員間の研究だけでなく、プロジェクトのもとで大学院生にも還元し、学生が主体的に研究テーマを決めることができる研究体制を構築することも検討に値する。

大学院FDフォーラムについては、本年度、情報・数学を中心に企画を行った。来年度はそのほかの分野にてテーマを設定し、企画・実践する。大学院教育は研究無くしては成立しない。FD活動をより広く捉え、上記のように研究プロジェクトからの還元教育も含め、講演依頼を検討する。そのため、「学びのコミュニティ創出支援事業」に「大学院における横断的教育と実践的なFDフォーラム」の継続申請を行った。

英語教育については、学生への教育効果について現行の入試体制および教育体制を精査・検討し、必要に応じて随時修正を進めていく。

3．活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年4月13日	大学院教育WG設置	各学科新旧教育改善委員等（21名:齊藤（公)、加藤（芳)、土田、山田（宗)、村田（英)、六田、坂東、池本、大島、鈴木（昌)、西村、芦澤、市川、新井、松田（和)、大久保、中村（栄)、土屋、宇佐美（勝)、小髙、石川)、理工学部事務員（2名：川村（恭)、伊藤（領)）
2	平成29年5月1日	大学院における横断的教育と実践的なFDフォーラムの企画	WG構成員（5名:六田、山田（宗)、坂東、西村、新井)、理工学部事務員（2名：川村（恭)、伊藤（領)）
3	平成29年5月2日	大学院における横断的教育と実践的なFDフォーラムの企画	WG構成員（5名:六田、山田（宗)、坂東、西村、新井)、理工学部事務員（2名：川村（恭)、伊藤（領)）
4	平成29年5月18日	大学院における横断的教育と実践的なFDフォーラム	各学科教育改善委員等（14名：齊藤（公)、土田、山田（宗)、村田（英)、六田、坂東、西村、市川、新井、谷口、松田（和)、土屋、小髙、垣鍔)、理工学部事務員（2名：川村（恭)、伊藤（領)）
5	平成29年5月24日	大学院FDフォーラムの講師候補選出	WG構成員（5名:六田、山田（宗)、坂東、西村、新井)、理工学部事務員（2名：川村（恭)、伊藤（領)）

回	日　程	議　題	出席者
6	平成29年７月６日	大学院 FD フォーラムの確認	各学科教育改善委員等（12名：齊藤（公）、土田、山田（宗）、村田（英）、坂東、大島、西村、市川、新井、谷口、小髙、垣鍔）、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊））
7	平成29年10月19日	大学院 FD フォーラムの実施概要の確認	各学科教育改善委員等（15名：齊藤（公）、土田、山田（宗）、村田（英）、六田、坂東、大島、西村、市川、新井、谷口、土屋、中村（栄）、小髙、垣鍔）、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊））
8	平成29年11月30日	大学院における横断的教育と実践的な FD フォーラム　開催	理工学部教員（16名：齊藤（公）、土田、三町、内村、柳田、山田（宗）、吉川（雅）、六田、坂東、大島、加鳥、西村、垣鍔、松田（和）、土屋、中村（栄））、職員（２名：佐藤、浦田）、理工学部事務員（２名：堀口、鈴木（尊））

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　農学部　　）
推進組織名（　　農学部 FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

農学部は学科・附属組織（農場）ごとに課題を設け取り組んできた。具体的には下記活動記録に記述の通り、生物資源学科では事実を正確に伝え、かつ豊かな表現力を育む手法の探索、応用生物化学科では各講義・実験の内容紹介と意見交換を通じた教員間の連携強化と教育効果向上、生物環境科学科では学科の取組みを含む「生物多様性」の意義を広く一般に理解してもらうための教育活動の強化、附属農場では農学に関わる動植物への求知心の創起法の開発を直近の課題としているところである。

本年度は、大別して（１）３Ｐの精査、（２）「履修系統図」「ポートフォリオ」への取組を進めてきた。さらに、昨年度に引き続き、「附属農場における学生の主体的学修環境の構築（学びのコミュニティ）」と生物資源学科の実験科目の材料を学生が農場実習で育てる共同カリキュラムに取り組み、農場の教育環境改善を実施中である。

農学部 FD 委員会直轄ではないが、顕著な成果として、MS-26の教育ミッションを勘案し、生物資源学科では実働を担う専門委員会を立ち上げ、体験型プログラムとして正しい農業生産規範（Good Agricultural Practice; GAP）のカリキュラムへの導入が軌道に乗りつつある等、アクティブラーニングをベースにした教育プログラム実施に精力を傾注しているところである。

また、年度末（２月10日の農学部の卒業研究発表会）にて４年生に「名城大学卒業時アンケート」を実施し、学生の学修成果や大学生活全体に対する満足度、成長の実感度合いを数値化、可視化していく。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

入試区分や入学時の成績、在学中の GPA ベースでの成績、キャリア形成支援に至る学生個別のポートフォリオを作成することで、より学修行動に限定せず、学生そのものの属性と動向を紐付け調査し、教育効果を高める方法について検討する必要がある。そのため、入試委員会、学務委員会、キャリア委員会との連携が強く要請される。

今後も学科単位での検討体制は変わりなく、従来からの一貫性と継続性を強く意識した対応のあり方を模索する。また、個別の学科に限定せず、学科横断的に検討すべき、ならびに学部全体で取り組むべき、ひいては大学院教育ともリンケージさせた対応を提言する、という立場から、農学部 FD 委員会で積極的に情報交換を行うこととする。さらに、後述の表中［29］第17回農学部教授会での議題（学部､学科の人材養成目的および３つのポリシーの確認）を随時扱うことで、事務職員も含めた学部構成員の中での意識付けを図ることが重要である。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月３日（月）	農場教員会議 学びのコミュニティ創出支援事業について	礒井、森田（隆）、森田（裕）、片山、田中
2	平成29年４月６日（木）	第１回　生物資源学科会議 学修ポートフォリオについて	鈴木（茂）、山岸、道山、寺田、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
3	平成29年４月18日（火）	第２回　生物資源学科会議 農学研究科の３Ｐならびに新カリキュラムについて	山岸、道山、寺田、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
4	平成29年４月21日（金）	農場教員会議 学びのコミュニティ創出支援事業について 障がいを持つ学生への配慮について	礒井、森田（隆）、中尾、森田（裕）、片山、田中
5	平成29年４月27日（木）	第２回　応用生物化学科会議 大学院カリキュラム改正について 応用生物化学概説アンケート	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、長澤、大場、前林、松儀、山口（秀）
		第１回　生物環境科学科会議 大学院カリキュラムの改編について 改組後の特別演習の取り扱いについて 学部 FD 活動　初年次の学習指導の在り方について	汪、長田、日野、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、田村、丸山、橋本
6	平成29年５月11日（木）	第３回　応用生物化学科会議 大学院カリキュラム改正案における修士および博士後期課程の新しい３Ｐ案（短縮版）と、カリキュラム改正の主旨に関する文章について	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、長澤、大場、前林、松儀、山口（秀）
		第２回　生物環境科学科会議 障がいなどを理由とする修学支援について 大学院新カリキュラムについて	汪、長田、日野、新妻、大浦、村野、船隈、近藤、田村、丸山、橋本
7	平成29年５月15日（月）	第４回　生物資源学科会議 大学院カリキュラム改正について 学修行動調査の実施について	磯前、山岸、道山、寺田、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
8	平成29年５月19日（金）	農場教員会議 学びのコミュニティ創出支援事業について	礒井、森田（隆）、中尾、林（義）、森田（裕）、片山、田中

回	日　程	議　題	出席者
9	平成29年５月25日（木）	第５回　生物資源学科会議 「学位授与方針対応表」「履修系統図」「ポートフォリオ」の自己点検について	鈴木（茂）、山岸、道山、寺田、森上、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
		第４回　応用生物化学科会議 今年度実施の学修行動調査への参加について	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、長澤、松儀、山口（秀）、濱本
		第３回　生物環境科学科会議 「学位授与方針対応表」「履修系統図」「ポートフォリオ」について 学習成果可視化の外部調査実施について	汪、長田、日野、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、丸山、橋本
10	平成29年６月８日（木）	第５回　応用生物化学科会議 学位授与方針対応表、授業科目履修系統図、ポートフォリオの修正版（案）について	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、大場、前林、松儀、山口（秀）、濱本
11	平成29年６月22日（木）	第５回　生物環境科学科会議 樹木医・樹木医補の資格取得について	汪、長田、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、田村、丸山、橋本
12	平成29年７月６日（木）	第７回　生物資源学科会議 学修ポートフォリオについて確認 障がい学生支援ガイドラインについて	鈴木（茂）、山岸、磯前、道山、寺田、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
13	平成29年７月20日（木）	第６回　生物環境科学科会議 樹木医・樹木医補の資格取得について 障がいなどを理由とする修学支援について	汪、長田、日野、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、田村、丸山、橋本
14	平成29年９月４日（月）	農場教員会議 メンタルヘルス研修について	礒井、森田（隆）、中尾、林（義）、森田（裕）、片山、田中
15	平成29年９月28日（木）	第10回　生物資源学科会議 （第１回生物資源学科　FD活動） 退学学生に関する情報共有と意見交換	鈴木（茂）、山岸、寺田、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、塚越、平野
16	平成29年10月２日（月）	第１回農場FD活動 障がい学生の支援について	礒井、森田（隆）、中尾、林（義）、森田（裕）、片山、田中
17	平成29年10月５日（木）	第10回　応用生物化学科会議 学部GPAと入試方式（含　出身高校）との関係を示した資料について	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、長澤、大場、前林、松儀、山口（秀）、濱本
		第７回　生物環境科学科会議 大学院新カリキュラムに対応した便覧原稿について	長田、日野、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、丸山、橋本

回	日　程	議　題	出席者
18	平成29年10月19日（木）	第８回　生物環境科学科会議 カリキュラム改組に関する学科の方針について 公開講座の準備状況について	汪、長田、日野、新妻、磯井、船隈、近藤、田村、丸山、橋本
19	平成29年10月25日（水）	農学部附属農場 メンタルヘルス研修について	全教職員（ファームスタッフも含む）
20	平成29年10月26日（木）	第12回　生物資源学科会議 （第２回生物資源学科　FD 活動） 学科 FD 活動（戦略会議から） 学生の入学方式と GPA との関係 GAP 関連科目の正規科目への格上げについて	鈴木（茂）、山岸、道山、寺田、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、塚越、平野
21	平成29年11月６日（月）	農場教員会議 学びのコミュニティ創出支援事業について	礒井、森田（隆）、中尾、林（義）、森田（裕）、片山、田中
22	平成29年11月16日（木）	第11回　生物環境科学科会議 MEC オリエンテーション協力学生について 公開講座日のタイムテーブルと役割分担について	汪、長田、日野、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、田村、丸山、橋本
23	平成29年11月30日（木）	第15回　生物資源学科会議 授業改善アンケートについて	鈴木（茂）、山岸、寺田、森上、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
		第12回　生物環境科学科会議 公開講座の反省点と来年度の担当研究室の決定について 公開講座前後に開催する１年生のポスター発表について	汪、長田、日野、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、丸山、橋本
24	平成29年12月４日（月）	農場教員会議 農場における農学部の研究環境の構築と農場運営について 学びのコミュニティ創出支援事業について	礒井、森田（隆）、中尾、林（義）、森田（裕）、片山、田中
25	平成29年12月14日（木）	第16回　生物資源学科会議 学びのコミュニティ創出支援事業「生物資源学実験と農場実習の連携教育」について	鈴木（茂）、山岸、磯前、寺田、森上、津呂、鈴木（康）、荒川、平児、上船、塚越、平野
26	平成29年12月14日（木）	第14回　応用生物化学科会議 平成30年度　大学院特別講義の開講について 学系再編に伴う DP の文言修正について	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、長澤、大場、前林、松儀、山口（秀）、濱本
27	平成29年12月21日（木）	第６回 FD 学習会 学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニング	［山岸］、津呂、中尾、平児 （［］はパネラー）

回	日　程	議　題	出席者
28	平成30年１月９日（火）	農場教員会議 生物資源学科の農場見学について 学びのコミュニティ創出支援事業について 農場実習テキスト作成について	礒井、森田（隆）、中尾、林（義）、森田（裕）、片山、田中
29	平成30年１月25日（木）	第17回　農学部教授会 学部、学科の人材養成目的および３つのポリシーの確認	礒井、磯前、氏田、大浦、大場、小原、加藤、木岡、鈴木（茂）、津呂、寺田、新妻、林（利）、日野、平野、船隈、松儀、森上、山岸、山口（秀）、荒川、上船、奥村、長田、近藤、鈴木（康）、塚越、中尾、橋本、濱本、平児、前林、湊、村野、森田（隆）、森田（裕）、安原、志水、長澤
		第16回　応用生物化学科会議 授業改善について 無機化学Ⅰ・Ⅱの非常勤講師について	加藤、志水、氏田、奥村、湊、林（利）、長澤、大場、前林、松儀、濱本
30	平成30年２月12日（月）	第16回　生物環境科学科会議 公開講座について	汪、長田、日野、新妻、大浦、磯井、村野、船隈、近藤、田村、丸山、橋本

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　農学研究科　　）
推進組織名（　　農学研究科 FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

目標：平成31年度実施の新カリキュラム実施の準備

活動内容：

①昨年度、大学院生全員が受講する大学院特別演習に、研究成果プレゼンテーションの院生間相互評価システムを導入した。この取組について昨年度末に院生によるアンケートを行ったところ、高く評価するものが多かった。そこで今年度は、院生アンケートに付された意見をもとに、この取組を深化させる試みを行っている。演習後に提出するレポートは、発表内容の理解度や疑問点を明らかにする様式に改め、特任助手の協力により、集まったコメントは発表者にすべて開示した。年度末に、院生から今年度方式についての意見を求めたところ、自分のプレゼンテーション技術および研究内容を見直すのに役にたったとして、非常に高く評価する意見が多く、次年度もこの方式を継続することにした。

②社会（企業）と大学の研究等の活動の接点を理解させるために、農学分野の代表的な会社である味の素株式会社のグローバルコミニュケーション部による講義「味の素グループの事業による社会課題の解決 ～持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向かって～」を12月21日にキャリアセンターの協力を得て行った。

③学則変更に向けて、大学院農学研究科の人材養成目的、３つのポリシーおよび必修科目の選定および各科目の単位数について議論の上書類を作成した。（第６回定例大学協議会承認）
また、教職課程（理科専修免許）の開設に向けた書類作成に取り組んだ。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

大学院教育・研究は学部教育と切り離せない部分も多いので、学部の各学科と密に連絡をとるために、戦略委員会の委員の一部メンバー（学科長を含む）がカリキュラム改正委員会を形成して、今後の大学院教育のあり方を検討している。

科学者・技術者倫理教育、知的財産権等教育、（海外）プレゼンテーション能力に関わる教育の在り方、博士後期課程のコースワーク科目の充実、修士および博士学位認定に関わる手続きなどに関して議論し、実施に向けた書類作成等を早急に進めることが必要となっている。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年５月１日	１）大学院農学研究科の人材養成目的と３つのポリシー改定作業 ２）カリキュラムの必修・選択の別および単位数について	森上・寺田・平野・氏田・林・汪・礒井
2	平成29年５月18日	カリキュラム改正に向けた研究科委員会提出用最終案作成	森上・寺田・平野・氏田・林・日野・汪・礒井・飯田
3	平成30年２月26日	新Ｍ１のH31年度開始の新カリキュラムとの接続について	小原・森上・平野・磯井・林（利）・汪・福井・岡田

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　薬学部　　）
推進組織名（　　薬学部 FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

① **学生の主体的な学び（アクティブ・ラーニングの推進）に関する取組**

② **多様な学修経験に関する取組**

①②を通して、学生の主体的な多様な学びをサポートし、可視化する取り組みを行った。
詳細は、B.①②に示す。

③ **その他学部独自の取組**

1）FD 委員会活動目標

FD 活動の定義：薬学部の教育理念、目標に到達するために、教職員組織で取り組む教育改善をサポートする。

A．実質的な授業改善
①授業改善アンケートによる学生の学びの問題点の抽出
②学びの問題点に対する教育改善方法の検討・提案

B．学生の主体的な学びの促進
①学生フォーラムのサポート
②学びの成果の可視化

C．教育活動の可視化と IR の実施
①学生の学びの可視化の手段としての履修系統図ポートフォリオの構築
② IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

2）FD 委員会活動内容

A．実質的な授業改善

①授業改善アンケートによる学生の学びの問題点の抽出

②学びの問題点に対する教育改善方法の検討・提案

a．授業改善アンケートの実施及び学生の学びの問題点の抽出

	前期		後期	
%	2017	2016	2017	2016
全体	**82.1**	**83.7**	**76.5**	**78.8**
1年	97.5	94.7	95	93.9
2年	76.2	81.5	74.1	77.2
3年	66.3	75	68.5	66
4年	84.5	89.7	68.5	78.1

本年度の授業改善アンケートの回答状況は左記の通りであった。回答科目数の多い２，３年生の回答が悪い状況は、昨年と同様であった。回答時期や最後の授業での回答などの方策を検討する必要がある。

フィードバックは、例年の通り、学生には、自己評価部分について、科目毎に履修系統図ポートフォリオからのフィードバックを行った。教員に対するフィードバックは、①授業アンケート全体像、②授業アンケート自由記載、③授業アンケート各項目の平均点のレーダーチャート、④授業アンケート学生自己評価項目系列グラフ、⑤当該科目成績と満足度の関連：上位25%、下位25%、中位の３群にわけた満足度グラフ、⑥当該科目の定期試験の素点と各指標の関連（・基礎知識と成績分布、・勉強時間と成績分布、・授業集中と成績分布、・学生の理解感、目標達成感と成績分布）、⑦各系列科目の各指標のグラフ（昨年度対照）とした。

授業改善アンケート結果を基に、授業形態別、領域別に自己評価の観点から分析を行ったところ、授業形態では、演習科目について、学習時間や理解感、満足度が高い傾向があったが、昨年に比べると低下傾向であった。また、昨年度と比して、通常科目群では学習時間などが増加しているものが多かった。

b．学習スタイル調査と２年生の動向

本年度も１年生の学生を対象に、学習スタイル調査を行った。昨年度と同様、深い学習スタイルと化学系、生物系で成績との関連が見られた。さらに、今年度は、２年生の追跡調査を行い、学習スタイルが浅い方向へと変化した学生とその後の学習成績との関連について、検討をすすめている。

c．アクティブ度調査と満足度、理解度、成長実感

アクティブ度調査と授業改善アンケートについて、分析を行った。昨年度よりアクティブ度は低下傾向であった。

d．PROG 調査結果

４年生全員に対し、PROG テストを実施した。PROG テストの結果では、昨年度に引き続き今年度も、リテラシーは、他の私立医歯薬系（３，４年）、国立大学理系（３年）と比べて非常に高かった。コンピテンシーは、私立医歯薬系（３，４年）と比べて、非常に低い状況であった。GPA との関連は、リテラシー、コンピテンシー共になかったが、リテラシーについては、PBL を行っている科目の成績と相関が見られた。しかし、コンピテンシーには全く関連がなかった。コンピテンシーについては、いわゆる社会との関わりで発揮される能力であり、他大学他学部との比較においては就職活動などの影響も大きいと考えられ、医歯薬系と比較しても低い状態は２年連続であった。コンピテンシーに含まれるいくつかの項目との関連、また、実習から戻ってきてからの状況を把握する必要がある。

e．これらの結果から考えられる具体的な対策と今後の方針

これらの結果を踏まえ、各系列での系列会議を推進し、カリキュラムマップのつながりを意識した授業展開を推進する必要がある。また、今年度の検討において、真に求める能力を問う課題や問題作りの重要性がクローズアップされてきた。そこで、世界的な学修成果の共通理解を確立する取り組みであるチューニングプロジェクトから、工学分野での取り組みと問題作成について、３月23日（金曜日）に、鈴木教和先生（名古屋大学工学部准教授）の講演を行う予定としている。引き続き、ディプロマポリシーの自己評価と成績及

び授業改善アンケートの結果について、学習スタイル調査の２年生への実施を行う。

B．学生の主体的な学びの促進

①学生フォーラムのサポート

②学びの成果の可視化

①学生フォーラムのサポート

4 /22に学生が主体となり､第７回学生フォーラムを開催した｡このサポートを行った。参加者は、443人、発表者は口頭発表14人、ポスター発表36人であった。今年度は、モデル学生発表など、学生の主体的な企画運営により、学年を越えた交流も見られた。

②学びの成果の可視化

１年生を対象に、深い学びと浅い学びのアンケートを行い、学習スタイルを確認し、後期の指導教員との面談に利用した。２年生を対象に、昨年度から実施している学修成果の評価ルーブリックの自己評価結果をレーダーチャートにし、指導教員との面談に利用した。この面談では、１年次の学習成績についてもレーダーチャートにし、自己評価と照らし合わせ、１年次の学習の振り返りに役立たせた。４年生を対象に、PROG テストを実施した。６年生については、模試及び卒業試験の推移をレーダーチャートにし、成長を可視化した。

C．教育活動の可視化と IR の実施

①学生の学びの可視化の手段としての履修系統図ポートフォリオの構築

② IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

a．履修系統図ポートフォリオの構築と運用

履修系統図ポートフォリオの構築に関する MS-26による助成は４年間の期間を終了した。基本的なポートフォリオの仕組みと、改善を行い、学修成果の蓄積、可視化、さらに、IR を行うための基盤を構築した。運用についても、引き続き改善を行う。

b．アウトカム基盤型教育におけるディプロマポリシーのルーブリック評価

履修系統図ポートフォリオを利用して１，２，３年生を対象に自己評価を現在、実施中である。

c．IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

いくつかの RQ をたてて、IR の実施に着手した。今年度は、散発的な検討に終わり、系統的な検討までには至らなかったが、いくつか経時的に確認することによって、教育改善に繋がる知見が得られた。さらに教育改善のための分析を計画している。

２．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

A．実質的な授業改善

①授業改善アンケートによる学生の学びの問題点の抽出

次年度も今年度と同様に履修系統図ポートフォリオの利用により､学生の学びのサポート、

可視化を行うと共に、授業改善アンケートを実施する。特に、次年度は、継続的な RQ のもと IR を実施し、定期的な検討会を実施し、その結果から具体的な対策を提案し、実施する。

②学びの問題点に対する教育改善方法の検討・提案

次年度も今年度と同様に、FD 講演会の開催と教員への研修機会の提供を行う。

B．学生の主体的な学びの促進

①学生フォーラムのサポート

②学びの成果の可視化

次年度も今年度と同様に、学生フォーラム実行委員会のサポートを中心として、活動を行う。また、各種学修成果、授業改善アンケート、ディプロマポリシーの評価などについて、可視化し、フィードバックを行う。6 年生に対しては、今年度と同様に、国試対策委員会との協働による 6 年生の学びの記録の作成を行う。

C．教育活動の可視化と IR の実施　（教育の質保証プロジェクト）

①学生の学びの可視化：履修系統図ポートフォリオの構築

② IR 基盤データベースの構築による IR の実施と教育改善の提案

FD 委員会を中心に、各委員会と協働し、教育活動の可視化と問題点の把握、改善に向けた提案が行えるように、IR を推進する。定型的なリサーチクエスチョンの検討をすすめ実施する。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年６月１日	1．PROG の今年度の実施について	メール会議
2	平成29年７月12日	1．平成29年度前期授業改善アンケートについて 2．PROG 実施予定について 3．オンデマンド講義 4．授業改善チップス 5．IR について	大津委員長（議長）、丹羽、井藤、飯田、田口
3	平成29年８月30日	1．学位授与方針対応表の更新について 2．学位授与方針対応表を用いた教育課程の自己点検について	大津委員長（議長）、丹羽、山田、梅田、井藤、飯田、田口
4	平成29年９月12日	1．前期授業改善アンケートのフィードバックについて	メール会議
5	平成29年10月３日	1．ポートフォリオ新機能について 2．前期アンケートと IR に基づくフィードバックについて（途中経過） 3．１年生スタイル調査について	大津委員長（議長）、丹羽、山田、梅田、井藤、飯田、田口
6	平成29年12月１日	1．後期授業アンケートについて 2．PROG テストについて 3．FD フォーラム企画について 4．１年生学習スタイル調査について 5．IR 実施中間報告について 6．その他 ポートフォリオを利用した教務業務支援の共同経費申請について	大津委員長（議長）、丹羽、山田、梅田、井藤、飯田、田口
7	平成30年２月７日	1．後期授業アンケート結果について 2．PROG テスト結果について 3．FD フォーラム企画について 4．学生フォーラムについて 5．IR 実施報告 6．その他	大津委員長（議長）、丹羽、山田、井藤、飯田、田口

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　薬学研究科　　）
推進組織名（ 大学院薬学研究科 FD 委員会 ）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

1）大学院薬学研究科 FD 委員会の活動方針と目標

薬学研究科における教育の質の向上を図るため、薬学研究科 FD 委員会が中心となって FD 活動を推進する。この活動を通じて研究科全教員が実効性の高い授業改善を進めるとともに、所属学生の研究活動が活性化されるよう教育遂行能力や指導力の向上を図る。

2）平成29年度の大学院薬学研究科 FD 委員会の活動内容

以下について活動を行った。（行っている。）

- 教員・学生に対する授業改善アンケートの実施と評価のフィードバック
- 教員・学生に対する特殊研究評価アンケートの実施と評価のフィードバック
- 副指導教員との面談の実施

3）FD の取り組みを推進する具体的な活動実績

Ⅰ．授業改善アンケートを活用した今後の授業改善ついて

平成29年度「特論」科目（講義）に関するアンケートを前期・後期の終了時にそれぞれ実施した（後期は今後の予定）。アンケート結果を担当教員に配布し、次年度のシラバスや授業内容・方法の改善へ向けた情報としての利用を促した。

Ⅱ．特殊研究評価アンケートついて

３月３日（土）に実施する特殊研究成果発表会の後に特殊研究評価アンケート調査を予定しており、結果を教員・学生双方にフィードバックする予定である。

Ⅲ．副指導教員との面談について

昨年度に引き続き、副指導教員との面談機会を設け、主指導教員とは異なる多様な助言が得られるような環境づくりを推進した。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

（1）授業改善へ向けたアンケートの実施

次年度も今年度と同様に大学院講義に対するアンケートを実施する。学生・教員双方からの要望や改善点を大学院運営委員会で報告・共有化し、講義が学生にとっての継続的な学びの場となるよう講義内容や実施方法を改善していく。また、必要に応じて、大学院講義の在り方について、学部 FD 委員会と協同し、FD ワークショップの実施を検討する。

（２）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案、提供

FD 講演会の開催と教員への研修機会の提供は、今後の検討課題である。学部との共催も視野に入れ検討したい。

（３）特論（大学院講義）の開講時期の変更

現在、毎年開講している全５専修分野の特論を、次年度から３専修分野と２専修分野に分けて隔年開講とし、取得年次を単年から複数年に変更し、実施する。学生にとっては、各講義に２学年の学生が受講することで学年を越えた交流や学び合いの機会が増えることや、業務都合による単位取得機会を逸する不安が解消する（特に社会人学生の場合）といった好影響が期待できる。一方、教員にとっては、受講学生数が倍増することで講義が活性化することや、講義内容の更新の動機づけになるなどの波及効果が期待できる。

３．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年８月31日（木）	平成29年度　前期授業改善アンケートについて	全学生 平松正行、飯田耕太郎、井藤千裕、大津史子、小田彰史、金田典雄、亀井浩行、丹羽敏幸、北垣伸治、神野透人、田口忠緒、永松　正、灘井雅行、能勢充彦、原　脩、早川伸樹、山田修平、湯川和典、脇田康志、伊東亜紀雄、今西　進、加藤美紀、栗本英治、黒野俊介、坂井健男、高谷芳明、田辺公一、村田富保
2	平成29年９月～10月	副指導教員との面談	全学生 平松正行、岡本浩一、金田典雄、北垣伸治、栗本英治、永松　正、灘井雅行、丹羽敏幸、野田幸裕、早川伸樹、山田修平、湯川和典、加藤美紀、半谷眞七子、間宮隆吉
3	平成30年２月15日（木）	平成29年度　後期授業アンケートについて	全学生 平松正行、飯田耕太郎、井藤千裕、岡本誉士典、小田彰史、金田典雄、亀井浩行、北垣伸治、神野透人、田口忠緒、築山郁人、永松　正、灘井雅行、丹羽敏幸、野田幸裕、長谷川洋一、原　脩、早川伸樹、山田修平、湯川和典、脇田康志、伊東亜紀雄、今西　進、打矢惠一、加藤美紀、栗本英治、黒野俊介、小森由美子、坂井健男、田辺公一、豊田行康、半谷眞七子、マーク・リバック

回	日　程	議　題	出席者
4	平成30年３月３日（土）	平成29年度　特殊研究評価アンケートについて	全学生 平松正行、飯田耕太郎、井藤千裕、岡本誉士典、小田彰史、金田典雄、亀井浩行、北垣伸治、神野透人、田口忠緒、築山郁人、永松　正、灘井雅行、丹羽敏幸、野田幸裕、長谷川洋一、原　脩、早川伸樹、山田修平、湯川和典、脇田康志、伊東亜紀雄、今西　進、打矢惠一、加藤美紀、栗本英治、黒野俊介、小森由美子、坂井健男、田辺公一、豊田行康、半谷眞七子、マーク・リバック

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　都市情報学部　　）
推進組織名（　都市情報学部 FD 委員会　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

学部においては、正課授業である「教養演習Ⅰ（キャリア形成論）」と「学習力調査」の報告会を教授会前に１回実施し、新入生或いは履修学生の状況と経年変化の報告に加え、今後の展開などの情報を共有した。また、本学部学生の修学指導強化の検討に着手、学生の修学状況の現状報告とともに指導基準・方法等を教務委員会および教授会内での議論・意見交換を経て平成27年度より制度化した。

学部内推進組織と位置付けられた学部 FD 委員会を中心とした取り組みとして、新入生を対象に「都市情報学概論Ⅰ」の講義内において「社会人基礎力」について説明のうえ診断テストを行い、学生の履修意欲の向上に役立てている。２年次以上の学生についても、継続的に自身の社会人基礎力の成長度合いを確認することを目的として、ゼミナール等にて診断テストを実施、集計結果については教授会にて学年間・年度別・経年比較による在学生の傾向についての報告、情報提供を行った。

授業改善アンケートについては、専任・非常勤教員を問わず、学部として対象科目を拡大（２科目以上）して実施、フィードバックされた集計結果より各教員が改善に繋げていく取り組みを行っている他、各ゼミナールにおいては、卒業論文発表会・中間発表会を実施し、研究の質向上やプレゼンテーション方法の充実に繋げる取り組みを行っている。

その他、在学生の状況・様子、講義の受講状況の報告に加えて、教員間での講義運営方法等について必要に応じて情報交換を行った。

また、推薦入学試験合格者に対する入学前オリエンテーションでは、都市情報学部における学びと学生生活について、担当教員による説明に加え、各学年の学生から自身の学生生活を紹介する企画を行い、入学後のイメージを膨らませ、スムーズに大学生活へ移行できるよう事前指導を行った。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

今後についても、「授業検討会」を定期的に開催することを目指す。

また、学部内関連委員会との連携の下、学部 FD 委員会を中心とした系統的な取り組みの検討・実施を考えている。具体的には、学生満足度調査の実施対象科目拡大の検討、講義・ゼミナール運営の工夫・改善点についての意見交換、学生の受講状況等について情報共有を通して、組織的な取り組み改善に繋げていく場としたい。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月13日（FD 委員会）	社会人基礎力診断テストの実施について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
2	平成29年４月27日（教授会）	教授会報告－社会人基礎力診断テストについて	学部教授会構成員
3	平成29年５月19日（FD 委員会）	社会人基礎力診断結果（２年次）について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
4	平成29年５月23日（FD 委員会）	平成29年度前期授業改善アンケート実施科目について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
5	平成29年５月25日（教授会）	平成29年度前期授業改善アンケート実施科目について 教授会報告－社会人基礎力診断結果（２年次）について	学部教授会構成員
6	平成29年６月21日（FD 委員会）	平成29年度前期授業改善アンケートについて 社会人基礎力診断結果（３・４年次）について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
7	平成29年６月22日（教授会）	平成29年度前期授業改善アンケートについて 教授会報告－社会人基礎力診断結果（３・４年次）について	学部教授会構成員
8	平成29年７月27日（FD 委員会）	授業改善アンケートの集計・分析について 平成30年度推薦合格者入学前教育について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
9	平成29年７月27日（教授会）	平成30年度推薦合格者入学前教育について	学部教授会構成員
10	平成29年９月28日（教授会）	「学習力調査」結果および「教養演習Ⅰ（キャリア形成論）」実施報告会	学部教授会構成員
11	平成29年９月28日（FD 委員会）	平成30年度推薦合格者入学前教育について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
12	平成29年10月26日（FD 委員会）	FD 取組を推進する組織および活動報告（中間）について 平成30年度推薦合格者入学前教育について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
13	平成29年11月16日（FD 委員会）	平成29年度後期授業改善アンケート実施科目について 平成30年度推薦合格者入学前教育について	学部 FD 委員（亀井教授、小池教授、杉浦（真）教授、若林教授）
14	平成29年11月16日（教授会）	平成29年度後期授業改善アンケートについて	学部教授会構成員
15	平成29年11月16日（教授会終了後）	FD 勉強会	学部教授会構成員

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　都市情報学研究科　　）
推進組織名（　　大学院学務委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

都市情報学研究科においては、大学院生に専門知識や問題解決力の向上とともに、社会人基礎力のスキルアップが必要と考え、大学院学務委員会を中心に検討を行い、平成25年度より教員および大学院生に以下の「社会人基礎力育成プログラム」への参加、修士論文や博士論文の成果向上に反映させる活動を開始した。また、成績評価･論文審査･研究進捗の評価確認をする一方、「指導方法が効果的であったか、適切であったか、改善の余地はないか」など、FD の取り組みとして社会人基礎力調査を毎年行っている。平成29年度においても同様な FD に継続的に取り組み、大学院生の研究推進および発表活動の活性化に繋げている。

1）社会人基礎力に必要な「基礎学力」や「専門知識」などの『技術的能力』に加え､「コミュニケーション能力」や「バイタリティー」､「積極性」､「協調性」などの『行動能力』を意識させるため、社会人基礎力調査を年２回程度行う。

2）大学院入学後、遅くとも半年以内に研究テーマおよび研究計画書を主査教員の指導で作成するとともに、副査を含めた研究に関するディスカッションの機会を学生自ら計画し、実施する。

3）公開講座に大学院生の参加を推奨し､パネルディスカッションに質疑に積極的に参加する。

4）大学祭や公開講座での学部学生や学外参加者に対する研究発表を推奨する。

5）各年度末に行われる研究報告会（中間発表および審査発表）に、すべての大学院生および教員の参加を促し、学生相互で研究報告内容の評価をする。

6）すべての大学院教員に教室内での座学に留まらず、少なくとも半年に１回以上の学外での体験学習や外部講師とのディスカッションの機会の設定を推奨する。

その他、月１回の学部教務委員会、大学院学務委員会において、学生の受講状況や講義の状況等について継続的な議論を行っている。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

今後も大学院生には、社会人基礎力のスキルアップのための「社会人基礎力育成プログラム」への参加を推奨し、修士論文や博士論文の成果向上の定期的な検証を継続的に行う。

また、学部 FD 委員会との連携の下、組織的な取り組み改善に繋げていく場としたい。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年７月20日 （大学院学務委員会）	社会人基礎力のスキルアップを目指した現場課題解決型教育実践プログラムについて	大学院学務委員 （大野教授、赤木教授、柄谷教授、昇教授、森杉教授）
2	平成29年10月19日 （大学院学務委員会）	FD 取組を推進する組織の活動報告（中間）について	大学院学務委員 （大野教授、赤木教授、柄谷教授、昇教授、森杉教授）
3	平成30年２月19日 （大学院学務委員会）	FD 取組を推進する組織の活動報告について	大学院学務委員 （大野教授、赤木教授、柄谷教授、昇教授、森杉教授）

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　人間学部　　）
推進組織名（　　人間学部 FD 委員会　　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

人間学部 FD 委員会は、FD 委員６名、学務委員長（学務系）１名、学務委員長（教務系）１名、および教務事務職員１名によって構成される。人間学部の教員団の教育・研究を含めた資質・能力向上を活動目標として FD 活動に取り組んでいる。平成29年度には以下に取り組んだ。

・人間学部 FD 委員会の開催
・前期 新任教員を交えた授業に関する意見交換会の開催
・後期 学修成果の可視化を目的とした外部調査（ジェイ・サープ）の結果を踏まえての人間学部 FD フォーラム（研究科との共催）の開催

人間学部教授会では、第１回から第８回までの大学教育開発センター委員会での FD に関連する事項が報告され、本学の FD 活動についての情報共有が図られた。

５月に開催した FD 委員会（学部と研究科合同）では、前期・後期における FD 活動の計画および進め方に関して協議を行った。そして、７月27日に平成29年４月に本学に着任した新任教員１名を交えて、名城大学の授業について気軽に語り合い、授業における工夫等を交換・共有し、授業づくりに活かす機会とすることを趣旨とした意見交換会を開催した。FD 委員と新任教員に加えて参加を希望する教員および事務職員の計20名が参加した。まずは新任教員から担当授業の紹介がなされた後、意見交換が行われた。この中で、昨年度に開催した人間学部 FD フォーラムでのテーマであった「文献講読 A」に関しても様々な意見が出され、今後の授業づくりの参考となった。さらには、「学生の学習態度・授業マナー」「施設・学習環境」「教授法」に関しても意見交換がなされ、今後の課題が共有された。

人間学部 FD 委員会から提案された学修成果の可視化を目的とした外部調査（ジェイ･サープ）の実施が６月８日における教授会にて承認された。本調査は、３年次開講の必修科目である「基幹ゼミナール」の前期の授業においてまず実施され、引き続き後期にも実施された。

１月における FD 委員会（学部と研究科合同）では、後期の FD 活動についての検討および、ジェイ・サープの調査結果についての報告がなされた。そして、３月１日に人間学部と人間学研究科による「学部および研究科における学生の学修の現状と課題」に関する合同 FD フォーラムが開催された。本フォーラムでは、「ジェイ・サープ」および参考資料としての学務センターによる「学生アンケート」の調査結果を踏まえて、主として「学生の授業時間外での勉強や宿題」をめぐる現状や課題について共有が図られ、その上で今後の学生の能動的な学びをどのように促進していくかについて意見交換が行われた。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

人間学部の学生の４年間における学びを支援するための、教育内容および教育環境のさらなる改善に取り組むために、学生の授業満足度を高めるための教育改善に向けた検証と分析に取り組む予定である。そのために、次年度にはこれまでに引き続き以下のFD活動を予定している。

・FD委員会の開催
・FD情報の共有化のための活動
・学部および研究科における学生の学修の現状と課題に関する合同FDフォーラムの開催

尚、「フィールドワークや語学研修等の多様な学修経験に関する取り組み」については、人間学部の専門教育部門に「語学研修」「海外研修」「海外フィールドワーク」「フィールドワーク」等が該当する体験科目として、また、学生の主体的な学びを促進するための「現代に生きる」が基軸科目としてあるため、それらの改善に向けた取り組みについてFDの観点から検討することを今後の課題とする。

3．活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年５月19日	・2017年度FD活動について ・学修成果可視化の外部調査実施について（FD委員会）	人間学部・人間学研究科FD委員
2	平成29年５月25日	・ジェイ・サープの実施について ・前期授業改善アンケートの実施について（第４回教授会）	安藤、一ノ谷、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、笠井、神谷、水尾、船田、宮嶋、和田、荒原、ウェストビィ、加茂、櫻井、塩﨑、志村、西村、畑中、原田、加藤昌弘、ビーチ 陪席：山田、鈴木
3	平成29年６月８日	ジェイ・サープの実施について （第５回教授会）	安藤、一ノ谷、伊藤俊一、岡戸、笠井、神谷、船田、宮嶋、和田、荒原、加茂、櫻井、塩﨑、志村、ウェストビィ、西村、畑中、加藤昌弘、原田、ビーチ 陪席：山田、鈴木
4	平成29年７月27日	新任教員を交えた授業に関する意見交換会	安藤、一ノ谷、伊藤康児、岡戸、笠井、神谷、加茂、船田、宮嶋、和田、荒原、櫻井、塩﨑、志村、畑中、加藤昌弘、原田 陪席：山田、鈴木、加藤千咲子
5	平成30年１月11日	後期 人間学部・研究科FDフォーラムの開催について（FD委員会）	人間学部・人間学研究科FD委員
6	平成30年３月１日	ジェイ・サープ調査の結果報告 （第20回教授会）	安藤、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、笠井、神谷、加茂、船田、水尾、宮嶋、和田、ウェストビィ、櫻井、志村、西村、畑中、加藤昌弘、ビーチ、鈴木、加藤千咲子
7	平成30年３月１日	人間学部・人間学研究科共催FDフォーラム	安藤、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、笠井、神谷、加茂、船田、宮嶋、和田、櫻井、西村、畑中、加藤昌弘、鈴木、加藤千咲子

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　人間学研究科　　）
推進組織名（　人間学研究科 FD 委員会　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

人間学研究科の FD 活動は、研究科主任教授、委員２名（内１名は学部 FD 委員長を兼務）および研究科担当の教務事務職員１名の４名からなる FD 委員会を中心に実施されている。

本年度の活動は、第一に、従来と同様、研究科における授業、研究指導、研究施設等の諸条件に関して、院生を対象にアンケートないしインタビューを実施し、今後の教育・研究の改善方針を明らかにすることであった。第二に、より魅力的な研究科にするために、研究科運営委員会と連携して、本研究科教授団の充実を図ることであった。第三に、アカデミックハラスメントに対する構成員の意識を高めることであった。

授業科目に関するアンケートないしインタビューに関しては、昨年度の質問内容等を委員会で再検討し、一部を修正した上で、１年生に対しては、前期はインタビュー方式で、後期はアンケート方式で実施した。２年生に対しては、アンケート方式によって実施した。前後期ともに院生の全般的な満足度は高かった。なお、研究環境に関する院生の要望を受けて、院生の自習室の研究環境の改善を図った（院生自習室の目線レベルの目隠し対策や院生自習室設置のプリンターの更新）。また、期末に課されるレポート課題に関して該当担当者に対処を求めて具体的な改善につなげた。

教授団の充実に関しては、３名の教員に新たに大学院教育に関わってもらうように準備を進めるとともに、新たな授業科目を設けカリキュラムの充実を図った。このような施策により、大学院入学志願者を増やすことにもつながると期待できる。院生の自発的な学びを促すための方策を議論するために学部 FD 委員会と合同で FD フォーラムを実施した。

アカデミックハラスメントの防止に関しては、学部教授会のなかでアカデミックハラスメント防止 DVD を視聴し啓蒙を行った。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

本研究科における FD 活動については、従来のように院生を対象にした授業・研究環境に関するアンケートを継続・発展させると同時に、本研究科への進学者数を増やすために、魅力ある研究科組織を目指すことである。

また、人間学研究科は、人間学部と連携して FD 活動に取り組んでいるが、この連携を重視しつつも研究科独自の FD 活動について今後検討していきたい。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年５月19日	第１回 FD 委員会（平成29年度人間学部・人間学研究科 FD 活動予定について）	岡戸、神谷、笠井、加茂、西村、塩﨑、志村、加藤昌弘、鈴木
2	平成29年６月22日	研究科委員会（院生アンケート・インタビュー内容の検討）	宮嶋、神谷、安藤、一ノ谷、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、加茂、塩﨑、船田、水尾、西村、櫻井 陪席：山田、加藤千咲子
3	平成29年７月13日	修士１年生５名に講義や研究環境に関する面談を個別に実施	神谷 陪席：加藤千咲子
4	平成29年９月７日	研究科委員会（院生アンケート・インタビューの結果報告と質疑）	宮嶋、神谷、安藤、伊藤康児、岡戸、加茂、塩﨑、船田、櫻井 陪席：山田、加藤千咲子
5	平成29年９月28日	アカデミックハラスメント防止 DVD の視聴（学部教授会と合同）	安藤、一ノ谷、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、笠井、神谷、加茂、船田、水尾、宮嶋、和田、荒原、ウェストビィ、櫻井、塩﨑、志村、西村、畑中、加藤昌弘、原田、ビーチ 陪席：山田、鈴木
6	平成30年１月11日	研究科委員会 （院生アンケート内容の検討）	人間学部・人間学研究科 FD 委員
7	平成30年２月10日	研究科委員会 （院生アンケートの結果報告と質疑）	宮嶋、神谷、安藤、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、加茂、水尾、塩﨑、西村、櫻井 陪席：山田、加藤千咲子
8	平成30年３月１日	FD フォーラム （学部 FD 委員会後合同実施）	安藤、伊藤康児、伊藤俊一、岡戸、笠井、神谷、加茂、船田、宮嶋、和田、櫻井、西村、畑中、加藤昌弘、鈴木、加藤千咲子

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　外国語学部　　）
推進組織名（　外国語学部 FD 委員会　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

①学生の主体的な学び（アクティブ・ラーニングの推進）に関する取組

1.1 名城大学外国語学部第 3 回　教育シンポジウム

平成29年 6 月15日に教育活動発表会を行い、外国語学部の教員 6 名がアクティブ・ラーニングに関する発表をした。

プレゼンテーションの主題：

- On Micro and Macroscale Evolutionary and Revolutionary Teaching Methods and Strategies（発表者：James Rogers）
- 大人数クラスの教養科目の運営について（発表者：岩井眞實）
- Authentic Audio and Video in the Writing Class（発表者：Mark Rebuck）
- 姿勢と思考の指向性　―日本人の特徴―（発表者：冨岡徹）
- Doing Surveys in the Classroom with Google Forms（発表者：Nick Boyes）
- Focus on Vocabulary Skills for Beginners（発表者：Keita Kodama）

発表後に、Q&A が行われた。

1.2 名城大学外国語学部第 4 回　教育シンポジウム

平成30年 1 月17日にアクティブ・ラーニングの活動について実践報告を行い、外国語学部の教員 8 名が参加した。英語コア科目の授業のやり方とアイデア等を交換した。

1.3 CLIL 研修会

平成30年 1 月22～26日にクィーンズランド大学の Ceara McManus 先生による CLIL Workshop が実施された。外国語学部の教員が14名、グローバル・プラザのスタッフが 2 名、農学部の非常勤講師 1 名（合計17名）が参加した。英語科目ではない授業を、アクティブ・ラーニングの原則に基づいて英語を通じて教える方法を研究した。

②多様な学修経験に関する取組

2.1 英語科目のコーディネーション

英語スキル科目（コミュニケーション、リーディング、ライティング、ディスカッション）を担当する教員が集まり、授業におけるアクティブ・ラーニングの方法を話し合った。とりわけ共同してアクティブ・ラーニングを推進する教材や評価方法を作成した。

2.2 授業改善アンケート

名城大学大学教育開発センター委員会で指定された科目について、授業改善アンケートを行った。

③その他学部独自の取組

3.1 教員相互の授業参観（Peer Observation）

平成29年６月１日～30日に外国語学部全教員が、自分の担当以外の授業２つを参観した。その後、互いに評価し合った上でアドバイスを送り、また、アイデアを交換した。

3.2 教員ハンドブック

教員の知識や技能を高めるように Teacher Handbook を作成した。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

次年度に向けた外国語学部 FD 委員会及び FD 活動の課題は下記の通りである。

- 英語スキル科目のコーディネーションを続けること。
- 教員相互に授業参観をして、アイデアを交換すること。
- 平成30年度の教育シンポジウムの発表者を募集すること。
- 教員の知識や技能を高めるための Teacher Handbook を作成すること。
- 平成30年度に CLIL を導入する先生に支援する方法を検討すること。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月27日	1. 外国語学部 FD 委員会の目的 2. 平成29年度前期の授業参観 3. 平成29年度前期の Teaching Symposium	外国語学部 FD 委員会全員 （ウィキン･岩井･マッケンディ・堅田・呉）
2	平成29年７月６日	1. Teaching Symposium と Peer Observation の改善 2. 平成29年度後期の FD 活動 3. CLIL ワークショップ	外国語学部 FD 委員会全員 （ウィキン･岩井･マッケンディ・堅田・呉）
3	平成29年10月12日	1. 平成29年度教育功労賞候補者推薦 2.「Teaching Symposium: Focus on English Skill Subjects」の開催日 3. FD 取組を推進する組織の活動報告	外国語学部 FD 委員会委員 （ウィキン･岩井･マッケンディ・堅田）
4	平成30年１月11日	1. CLIL 研修会 2. 2018年度 Teacher Handbook の作成 3. 次年度の FD 活動	外国語学部 FD 委員会委員 （ウィキン・岩井・堅田・呉）

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　総合学術研究科　　）
推進組織名（ 総合学術研究科教育検討部会 ）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

1）活動目標

総合学術研究科の教育改善のために、入学から卒業までの学生の学びや成長を一貫して把握しながら構成員全体が議論・実践できるようサポートする。

2）活動内容

総合学術研究科の構成員により、以下の活動を推進してきた。

①学生の主体的な学び（アクティブ・ラーニングの推進）に関する取組

・「総合学術特論1,2」の開講

学際的な探求活動を通じ、受講生が発表と討論の技能を高めることを目的として開講された。

・「H29年度総合コアプログラム」の開催（春季：４月15日、秋季：９月16日）

全教員・全大学院生が参加し、教員、修了生、及び外部講師による研究発表を行うことで、本研究科のミッション「自然と人間の共生」について幅広い視野で学び、考える機会とした。

②多様な学修経験に関する取組

・「海洋実習」の実施（８月29日）

本研究科大学院生に対して実施された。三河湾において船舶による海洋観測を行った後、愛知県水産試験場にて最新の海洋環境に関連する研究を学んだ。

③その他学部独自の取組

・特になし

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

教育改善に向けて構成員全員が議論･実践できるよう、教育検討部会を中心に検討を継続する。より積極的に議論の場を設けることが今後の課題である。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年４月25日	MS-26戦略プランおよび H29年度総合学術研究科事業計画書について（メール審議）	田中　義人、伊藤　康児 高倍　昭洋、原田　健一 景山　伯春、志村　ゆず
2	平成29年５月18日	H29年度論文指導委員会報告書の確認	田中　義人、伊藤　康児 高倍　昭洋、原田　健一 景山　伯春、志村　ゆず
3	平成29年５月24日	H29年度秋季総合コアプログラムにおける講演テーマと外部講師の検討（メール審議）	田中　義人、伊藤　康児 高倍　昭洋、原田　健一 景山　伯春、志村　ゆず
4	平成29年10月10日	H29年度総合学術研究科事業計画書（中間）の自己評価について（メール審議）	田中　義人、伊藤　康児 高倍　昭洋、原田　健一 景山　伯春、志村　ゆず
5	平成29年10月12日	H29年度前期の FD 活動に関する取組みの確認	田中　義人、伊藤　康児 高倍　昭洋、原田　健一 景山　伯春、志村　ゆず
6	平成29年12月24日	私立大学情報教育協会主催「分野連携アクティブラーニング対話集会理工学グループ」への参加	総合学術研究科 教育検討部会長田中　義人
7	平成30年１月18日	総合学術特論の内容について	田中　義人、伊藤　康児 高倍　昭洋、原田　健一 景山　伯春、志村　ゆず

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　法務研究科　　）
推進組織名（　法務研究科 FD 委員会　）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

（1）次のことを行った。

・(学生に対して)「授業等への意見・要望」の申出機会の設定

・(学生に対して)「授業改善アンケート」の実施

・(教員相互間での)「授業参観」の実施

・(各教員による)「授業実施報告書」の提出

（2）上記事項を実施するにあたり、研究科委員会に諮り、実施の連絡・周知を図り、実施後は、その結果をまとめて、研究科委員会に報告し、協議を経て、承認を受けている。

（3）アクティブラーニングは、ロースクール制度に既に内包されている（現実に生起する法的諸問題を事例案件として具体的に取り上げ、各演習内で法的解決策を討議していく）とも考えられるところだが、幾つかの例を挙げると、(a) 演習科目の多さ、(b) 演習において、検討課題への報告書の提出とその内容をめぐる、実務家を含む教員と学生との双方向的・多方向的討議、加えて (c) 基本学理を教授する要論科目においても教員・学生間の双方向的・多方向的議論を意図し実践しており、また (d) 小テスト等により学生が自己の理解度を図ることができるようにしている。

なお、「双方向･多方向」の講義･演習について、上記（1）の「授業改善アンケート」や「授業実施報告書」において、確認を行っている。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けた FD 取組推進組織及び FD 活動の課題等）

（1）次期（平成29年度の状況）の大学基準協会による認証評価は、受けないこととなった。しかし、認証評価を受けないことが教育の質の低下を招くことのないよう、引き続き教育水準の維持・向上を図る FD 活動を行うことが課題である。

（2）法務研究科は学生募集停止に至ったため、3年課程（未修者コース）での最後の入学生が2年生後期を迎える本年度以降においてはとくに、やがて到来する閉鎖の時期を見据えつつ、上記の通り教育水準の維持を図りながら、学生を無事に課程修了へと導いていく FD 活動が求められている。

3．活動記録（FD 取組推進組織において、FD 活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年4月8日	FD 委員会において、これまでの課題や本年度の取り組み、委員相互の役割分担について協議し、確認した。	村田委員長 河北委員 二本柳委員

回	日　程	議　題	出席者
2	平成29年４月22日	研究科委員会において、「学生からの前期授業等への意見・要望について」申出の機会を設定することを説明した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、梅津、仮屋、菊地、庄村、宮島、村田、吉野、河北、二本柳
3	平成29年５月27日	研究科委員会において、「学生からの前期授業等への意見・要望の結果について」報告を行い、更に「平成29年度前期授業参観の実施について」依頼した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、碓氷、梅津、菊地、庄村、村田、吉野、河北、二本柳
4	平成29年６月24日	研究科委員会において、「平成29年度前期授業参観の実施状況について」報告を行い、更に「平成29年度前期の学生による授業改善アンケートの実施について」依頼した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、碓氷、梅津、仮屋、菊地、庄村、宮島、村田、吉野、河北、二本柳
5	平成29年７月22日	研究科委員会において、「平成29年度前期授業実施報告書の作成について」依頼した。	中島主任教授、伊藤（新）、碓氷、梅津、仮屋、菊地、庄村、宮島、村田、吉野、河北、二本柳
6	平成29年８月26日	研究科委員会において、「平成29年度前期授業改善アンケート結果について」説明した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、碓氷、梅津、仮屋、菊地、庄村、宮島、村田、吉野、河北、二本柳
7	平成29年９月９日	研究科委員会において、「平成29年度前期授業実施報告書について」概要を説明した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、梅津、仮屋、宮島、村田、吉野、二本柳
8	平成29年10月14日	研究科委員会において、「学生からの後期授業に対する要望等について」申出の機会を設定することを説明した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、碓氷、仮屋、宮島、村田、吉野、二本柳
9	平成29年11月11日	研究科委員会において、「学生からの後期授業に対する要望等の結果について」報告を行い、更に「平成29年度後期授業参観の実施について」依頼した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、碓氷、梅津、仮屋、庄村、村田、吉野、河北、二本柳
10	平成29年11月11日	FD 委員会において、これまでの取り組み、委員相互の役割分担について確認した。	村田委員長 河北委員 二本柳委員
11	平成29年12月16日	研究科委員会において、「平成29年度後期授業参観の実施状況について」報告を行い、更に「平成29年度後期授業改善アンケートの実施について」依頼した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、碓氷、梅津、菊地、庄村、宮島、村田、吉野、河北、二本柳
12	平成29年12月16日	FD 委員会において、教育広報専門委員会で依頼された事項について、委員間で協議した。	村田委員長 河北委員 二本柳委員

回	日　程	議　題	出席者
13	平成30年１月13日	研究科委員会において、「平成29年度後期授業実施報告書の作成について」依頼した。	中島主任教授、伊藤（新）、碓氷、仮屋、菊地、庄村、村田、吉野、河北、二本柳
14	平成30年２月17日	研究科委員会において、「平成29年度後期授業改善アンケート結果について」説明した。	日比野研究科長、中島主任教授、伊藤（新）、伊藤（博）、碓氷、梅津、菊地、庄村、宮島、村田、吉野、河北、二本柳

当法務研究科では、第１回目のFD委員会を上記の通り４月８日に開催し、その後も随時、FD関連事項について電話やメール、授業の合間を見計らって研究室等で協議するなどによって、絶えず委員間で連絡を取り合っている。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　教職センター　　）
推進組織名（ 教職センターFD 推進委員会 ）

1．平成29年度の活動報告（今年度の活動方針、目標、活動内容、実績等）

今年度の活動方針は次のとおりである。

教職センター専任教員が担当する教職に関する科目の授業内容・方法の改善

この方針のもと、活動目標は次のとおりである。

教員志望学生の実践的指導力の向上及び教員採用試験合格者の確保を目標に、教職に関する科目の授業改善に向けた活動を企画し、運営する。

活動内容（独自の取り組み）は次の二つである。

①教職センターFD 活動

②研究内容や教育内容の発表・交流

実績に関わることは以下の三点である。

①教職センターでは、教職センター会議内でシラバスの見直しなどの授業改善に関わることを検討してきたが、平成28年度からは教職センターFD 活動と称して、教職センター会議後に行うこととしている。

教職センターFD 活動では、一回につき一人の教職センター専任教員が、各自の授業実践や教職課程に関する今後の動向などについての報告を行い、その報告をもとに意見交換を行っている。教育職員免許法が改正され、さらに学習指導要領の改訂へと向かっている現在、その動向を知ることによって、自身が担当する授業の今後の在り方のみならず、教職課程全体に関わる在り方を考え合う場となっている。本年度は 8 回の活動を行った。

②教職センターFD 推進委員会では、研究内容や教育内容の発表・交流活動として、教職センター懇談会による教職課程授業担当者（兼担教員、非常勤講師、教員採用試験勉強会担当講師等）への発信、交流及び情報交換、『教職センター紀要』の公刊による研究成果のまとめと発表、『教職センター年報』の公刊による FD 活動のまとめと公表を挙げている。『教職センター紀要』第15巻では 6 本の研究論文･実践報告を掲載することができた。『教職センター年報2017』は現在印刷中である。

③現役学生の採用試験合格者数は30名（うち私立学校合格者 2 名）である（2018/ 2 / 9 現在）。公立学校現役合格者数は、教職センター開設以来最高とされた昨年、一昨年の26名を超える28名である。

2．今後の課題、方向性（次年度に向けたFD取組推進組織及びFD活動の課題等）

①教職課程科目における適切なアクティブ・ラーニングの導入

普段の授業から、受講者の学習意欲を向上させ、教員を志望する学生の主体的な学びを促進することが望まれている。ただし、アクティブ・ラーニングを導入するにあたり、既存の授業よりも学習効果が上がる場合にのみ導入するべきであり、形式的に導入すれば良いわけではない。学生の主体的で深い学びを促進するような授業展開・授業形態となるよう工夫すべきである。

②教職センターFD活動の活動時間の見直し

これまでのFD活動においては、どの報告も授業改善、教職課程の在り方の検討に結びつき、意見交換も活発であった。現在、教職センター会議後にFD活動を行っているが、必要性に応じて、会議前に1時間程度の時間を確保して行うほうが、より有意義な意見交換がなされると考えられる。

3．活動記録（FD取組推進組織において、FD活動について議論した会議の開催日程・議題）

回	日　程	議　題	出席者
1	平成29年6月27日	平成29年度教職センターFD活動の方針の確認	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
2	平成29年7月25日	・免許法、免許法施行規則一部改正に係る「教職に関する事項」について ・平成29年度教職センターFD活動の組織体制、目標等について	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
3	平成29年7月25日	『教職センター紀要』、『年報』作成スケジュールについて	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
4	平成29年10月10日	『年報　2017』の構成・作成担当者および原稿締め切りについて	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
5	平成30年1月16日	今後の教職センターFD活動の日程の確認	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
6	平成30年2月13日	平成29年度活動内容に基づく活動報告、活動記録の確認	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口

教職センターFD活動

回	日　程	発表者	題　目	出席者
1	平成29年7月11日（火） 16：00～16：15 質疑：16：15～16：25	曽山　和彦　教授	人間関係づくりと授業改善の連動	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
2	平成29年9月12日（火） 16：15～16：30 質疑：16：30～17：00	野々山　清　教授	理系学部における理科教員養成―理科指導法1の内容と学生の指導に関して―	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口

回	日　程	発表者	題　目	出席者
3	平成29年11月14日（火） 16：15～16：40 質疑：16：40～16：50	平山　勉　准教授	最近の教員養成の動向と課題	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
4	平成29年12月12日（火） 15：30～15：40 質疑：15：40～15：50	片山　信吾　教授	授業改善に向けて自分の授業を振り返ってみた	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
5	平成30年１月16日（火） 16：25～16：36 質疑：16：36～16：46	竹内　英人　教授	これからの数学教育	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
6	平成30年１月30日（火） 16：05～16：20 質疑：16：20～16：45	谷口　正明　准教授	物理教育とFD	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
7	平成30年２月13日（火） 16：18～16：33 質疑：16：33～16：48	嶋口　裕基　准教授	教育原論・教育課程論の授業改善に向けて	曽山，野々山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口
8	平成30年３月６日（火） 15：25～15：39 質疑：15：39～15：59	木村　美奈子　准教授	『生徒・進路指導論』におけるアクティブ・ラーニング導入の成果について	曽山，片山，竹内，平山，木村，谷口，嶋口

6．トピックス

第19回 FD フォーラム実施報告

平成29年11月９日（木）、天白キャンパス共通講義棟南 S301教室において、第19回 FD フォーラム『「大学教養」で何を学ぶか』を開催しました。

第１部では、名古屋大学大学院人文学研究科の日比 嘉高 准教授を迎え、「大学教養で何を学ぶのか」をテーマに基調講演が行われました。AI 時代以後、大学を取り巻く環境や学生に求められる能力が変化している中で、「大学に何ができるのか」、「大学教養で何を学ぶのか」という点について、リテラシー能力の補完と高度化を中心とした教養教育の課題についての講演がありました。

第２部では、経済学部の渋井 康弘 教授、薬学部の原田 健一 教授、人間学部の加茂 省三 教授から、各学部開講の「基軸科目」についての紹介と、パネルディスカッションが行われました。３名の先生からは、各学部が開講する「基軸科目」の目的や特徴、効果についての紹介があり、本学が展開する特色ある教養教育科目についてのねらいを共有するとともに、授業運営についての意見交換の機会となりました。

第19回　FD フォーラム　所属別参加状況

	所属人数（※1）	FD フォーラム		
		参加人数	参加率	前回参加人数
教育職員				
学長・副学長	5	2	40.0%	4
法学部	38	2	5.3%	2
経営学部	31	3	9.7%	7
経済学部	29	22	75.9%	10
理工学部	173	6	3.5%	13
農学部	46	6	13.0%	15
薬学部	64	1	1.6%	8
都市情報学部	27	3	11.1%	0
人間学部	22	8	36.4%	5
外国語学部	25	2	8.0%	5
法務研究科	14	2	14.3%	0
教職センター	8	1	12.5%	2
総合学術研究科	14	0	0.0%	0
小計１	496	58	11.7%	71
事務職員				
監査室	2	2	100.0%	0
秘書室	3	1	33.3%	0
学長室	2	2	100.0%	−
経営本部	9	2	22.2%	0
総合政策部	6	1	16.7%	1
愛知総合工科高等学校専攻科	3	0	0.0%	−
総務部	16	1	6.3%	4
渉外部	8	1	12.5%	1
財政部	14	4	28.6%	4
施設部	11	0	0.0%	0
社会連携センター	1	0	0.0%	−
入学センター	15	2	13.3%	3
学務センター	30	4	13.3%	4
教職センター	5	0	0.0%	1
保健センター	4	0	0.0%	0
障がい学生支援センター	1	0	0.0%	−
大学教育開発センター	6	5	83.3%	6
学術研究支援センター	14	1	7.1%	0
キャリアセンター	16	0	0.0%	2
国際化推進センター	7	0	0.0%	0
情報センター	6	0	0.0%	0
附属図書館	7	1	14.3%	3
法学部	7	1	14.3%	0
経営学部	7	0	0.0%	0
経済学部	7	3	42.9%	1
理工学部	18	1	5.6%	2
農学部	8	2	25.0%	0
薬学部	10	1	10.0%	1
都市情報学部	2	1	50.0%	0
人間学部	2	1	50.0%	2
外国語学部	2	0	0.0%	−
ナゴヤドーム前キャンパス事務室	13	0	0.0%	0
附属高校	10	0	0.0%	0
小計２	272	37	13.6%	35
合計	768	95	12.4%	106

その他	参加人数	前回参加人数
学部生・大学院生	2	0
非常勤講師（※２）	1	1
学外者	7	28
その他	0	0
合計	10	29

※1　平成29年度所属人数（教員…助手を含む。特任教授は含まない。／事務職員…業務職・契約職員を含む。派遣職員は含まない。）
※2　研究員含む

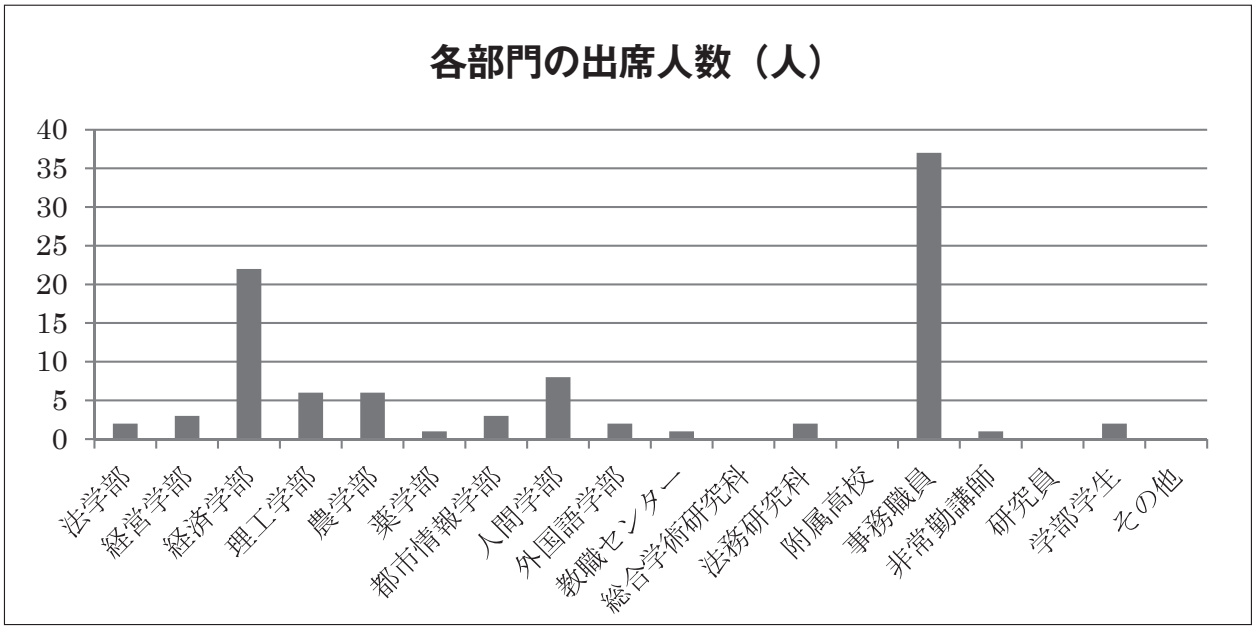
第19回 FD フォーラム
参加者アンケート集計結果

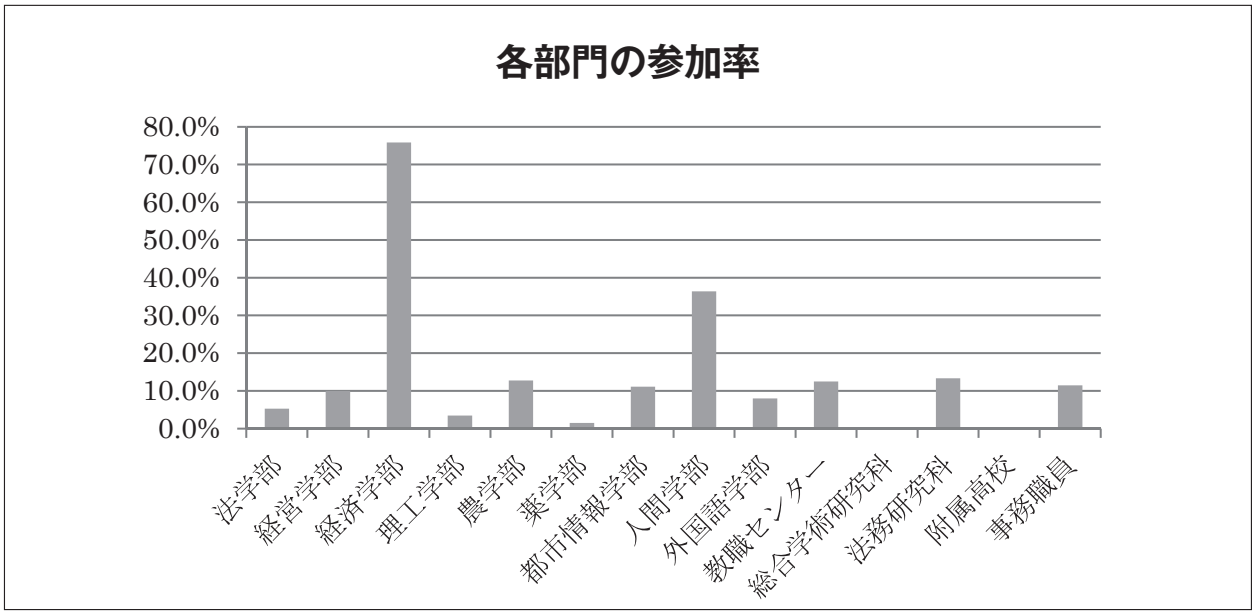
1．参加者のデータ

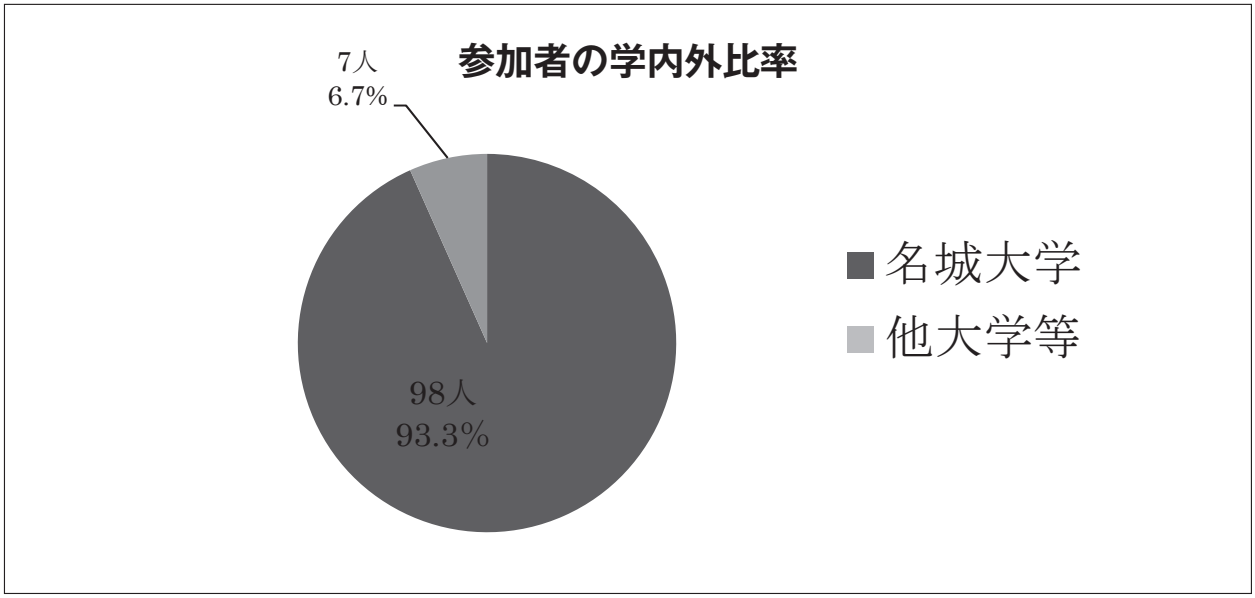
① 参加者の属性（表）

所属等		平成29年度			（参考）平成28年度		
		出席者（人）	在籍者（人）	学内参加率（%）	出席者（人）	在籍者（人）	学内参加率（%）
名城大学	学長・副学長	2	5	40.0	4	5	80.0
	法学部	2	38	5.3	2	40	5.0
	経営学部	3	31	9.7	7	33	21.2
	経済学部	22	29	75.9	10	30	33.3
	理工学部	6	173	3.5	13	175	7.4
	農学部	6	46	13.0	15	52	28.8
	薬学部	1	64	1.6	8	70	11.4
	都市情報学部	3	27	11.1	0	26	0.0
	人間学部	8	22	36.4	5	20	25.0
	外国語学部	2	25	8.0	5	22	22.7
	教職センター	1	8	12.5	2	7	28.6
	法務研究科	2	14	14.3	0	15	0.0
	総合学術研究科	0	14	0.0	0	14	0.0
	事務職員	37	272	13.6	36	312	11.5
	非常勤講師	1	－	－	1	－	－
	学部学生	2	－	－	0	－	－
	その他	0	－	－	0	－	－
他大学等	教育職員	2	－	－	11	－	－
	事務職員	4	－	－	14	－	－
	その他	1	－	－	0	－	－
計		105（学内：98名）	768	12.8%	133（学内：108名）	821	13.2%

② 参加者の属性（グラフ）


各部門の出席人数（人）
40
35
30
25
20
15
10
5
0
法学部
経営学部
経済学部
理工学部
農学部
薬学部
都市情報学部
人間学部
外国語学部
教職センター
総合学術研究科
法務研究科
附属高校
事務職員
非常勤講師
研究員
学部学生
その他


各部門の参加率
80.0%
70.0%
60.0%
50.0%
40.0%
30.0%
20.0%
10.0%
0.0%
法学部
経営学部
経済学部
理工学部
農学部
薬学部
都市情報学部
人間学部
外国語学部
教職センター
総合学術研究科
法務研究科
附属高校
事務職員


参加者の学内外比率
7人
6.7%
98人
93.3%
名城大学
他大学等

2．アンケートデータ

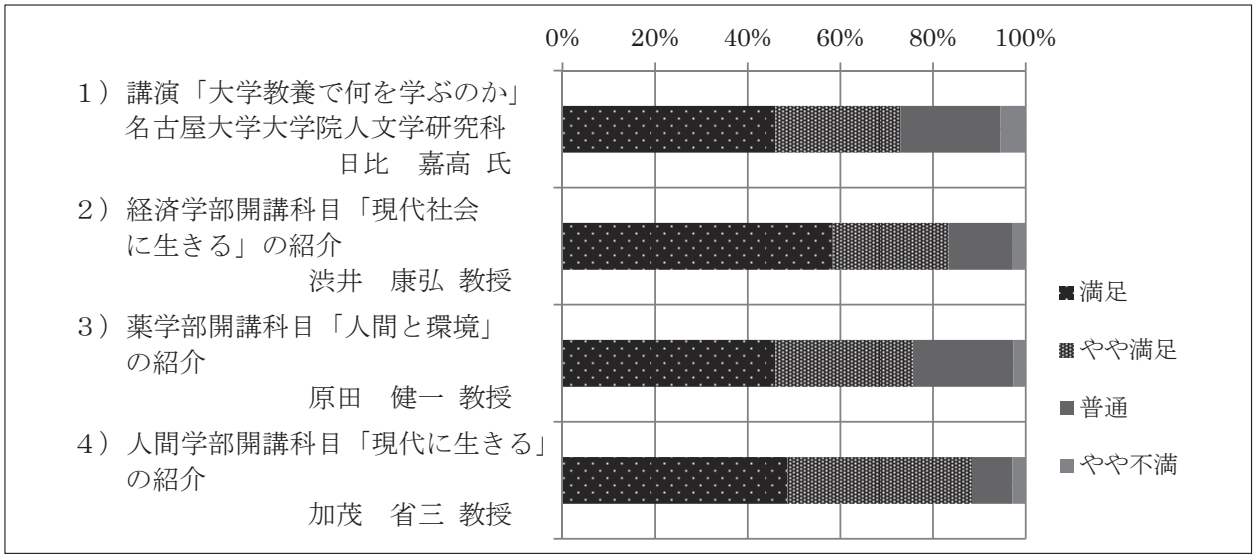
① アンケート回答者の属性（表）

所属等		回答者数（人）
名城大学	専任教員	19
	非常勤講師	1
	職員	13
	大学院生	0
	学部学生	0
	その他	0
他大学	教員	2
	職員	3
高等学校	教員	0
	職員	0
その他		0
未回答等		1
計		39

② 各プログラムの満足度（表）

プログラム名	各項目の回答者数（人）					
	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	計
1）講演「大学教養で何を学ぶのか」 名古屋大学大学院人文学研究科 日比　嘉高 氏	17	10	8	2	0	37
2）経済学部開講科目「現代社会に生きる」の紹介 渋井　康弘 教授	21	9	5	1	0	36
3）薬学部開講科目「人間と環境」の紹介 原田　健一 教授	17	11	8	1	0	37
4）人間学部開講科目「現代に生きる」の紹介 加茂　省三 教授	17	14	3	1	0	35

③ 各プログラムの満足度（グラフ）



3．今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて（自由記述・抜粋）

・教育には時間がかかるということ。
・大学に何ができるかについて、知識の種まきしかできないがこれが重要であるという点。
・それぞれの学部の取組→教養教育につながる。最初に教養教育がありきではない。
・情報と情報を結びつけ、新たな情報を作り出す能力の欠如（そのような学生が多い）→中学生の読解力の欠如に起因か？
・不確定な未来に対応できる能力を養う教育→確かに不可能、問題設定にそのことに対応する教育である必要あり。（これは可能）
・「人」の育成から「能力」の開発へ（教育者の意識としてもてばよい）→教養でも専門でも可。（分けられるものではないだろう）
・「鍵となる３つの遂行能力」→ツールを相互作用的に使える能力を身につける→アクティブラーニングで。
・主体的な思考。
・今までにない学び。（違和感を与える）
・ICT は学生にとっていいのでは？興味を持って取り組めそうな流れがある。
・学生の基礎学力の低下に対する応対。（補習授業など）
・「生きる力」を身に付けさせるための方法→個々の大学の教養教育に対する教育方針の大切さがよく分かりました。
・日比先生の話で、大学教育に求められるものが「人」の育成から各種「能力」に移ったという視点が興味深かった。各学部の基軸科目の講義方法をご教示頂き大変参考になりました。
・短時間での報告でしたが、内容が充実しており良かったと思います。
・人間学部の学部横断的講師陣の導入は素晴らしいと思う。
・大学での教養教育というものは、単なる社会人になるための「教養」ではない事がよく判った。専門科目へ移行するために必要な知識・論理力及び説得力を養い、卒業後のスキルアップには必修である事を感じた。
・教養とは時間が掛かること。
・名城大学全体として、基軸科目を学部に設定することを共通にするのであれば、明確に示してほしい。
・３学部の基軸科目は、それぞれの特徴を持っていてとてもいいと思った。カリ改正を検討する際に、教員が意識してくれたらと思う。
・実学重視、AI の技術向上の中で大学としてできることは、完全な人間（完成品）ではなく、例えば知識を知恵にし、それをどう活かすのかや、成長（能力向上）方法を示すこと。AI ではできないが人間にはできることがあり、その能力を向上させることも必要。
・日比先生→「文脈知」：人間教育で大切だと思います。
・「国家、市場からの自律」の件、先生のご意見も納得です。→しかし、教育基本法との関連。（３．原田先生の薬学部のお話には出ませんでしたが）

・国家的使命、グローバル社会における責務、日本の大学院で培う教養等はどのようなものかといったことも課題かと思いました。ただし、批判的思考の表現によって、「自律」の意味を深く考えさせていただきました。
・人間学部のとりくみ -「ICT ありきではないが」とはおっしゃっていましたが学びの過程としての意義、意欲のない学生の意欲の支持と教養 -Cultivation（自らを耕す）の意義等で有益かと感じました。　選択肢→理由を考える→論理的思考力のベースの３話も勉強になりました。
・「教育は時間がかかる（渋井先生）他」の長期的視点に感銘しました。
・論理的思考ができ、文章を書く力を身につけさせる授業形態。
・自校教育の実施とその効果。
・グループ討論はコミュニケーション能力醸成に不可欠？
・ICT の有効活用。
・講演タイトルの「大学教養で何を学ぶのか」を考える上で、その前段として「大学そのものがそもそもどのような存在・立場であり、何ができるのか」という視点からの整理をなされたことが、本日のテーマの本質論を考える上で、重要なポイントであると感じました。
・日比先生の講演で「経済界と大学とで、目指すものが本当に違うのか」という問いの立て方が興味深かったです。
・グループ討論を通した授業実践が大変参考となりました。
・自分の頭で考え、自分の言葉で表現すること。

４．学部の教育改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどがあればお聞かせください。（自由記述・抜粋）

・レポートを書かせる事が論理的思考を養う。また、これについて特に添削が必要ないというところ。
・「学生が自ら学ぶ」「大学の学びは、答え（正解）がない」。
・「人」の育成から「能力」の開発：教養、専門の区別なく実施すべき。
・大学は「種まき機関」という考え。（大学教育が企業の価値観の中に組みこまれないように）
・文章力の上達：短い時間に自分の考えを論理的に書かせる→複数回の実施→徐々に論理的に文章構成ができる。
・具体的な授業方法が聴けて良かった。
・自分の考えをまとめる力の養成（経済学部）→レポートの書かせ方の工夫。
・「自ら学ぶ」態度を修得させる工夫→人数の多さに工夫が必要。
・多人数の学生によるアクティブラーニングの行い方の工夫（人間学部）
学部にある既存の資源に依存せざるを得ないので、今後検討したい。
・経済学部による新入生のエクスカーションは本学部でも導入できたらなと思う。
・頭で考えさせることは当然のことである。考え方は同じでした。
・ICT の活用は有効と思うが、技術的支援は必要である。気軽に相談できる窓口を提案いた

だけたらと思う。

・社会人基礎力調査の実施、教授会における結果分析の共有とディスカッション。

・学生数240名でグループ討論を行うのは大変だと感じた。小グループの討論結果を全体の討論へと拡大させる手法の開発が必要であると感じた。

・大学教育と企業の要求する教育との方向性が共通部分でもあるかもしれないとの指摘は考えさせられました。大学は企業、行政の要請を受け教育改革を進めていますが、大学から社会、企業への提案があっても良いと思います。大学からの発信が細かい情報ばかりで弱いのではないでしょうか。教養科目を各学部に任せ、全学的にはコアカリキュラムで担保する方式は自大学に帰って紹介したいと思います。ありがとうございました。

・基軸科目の取組。

5．FD フォーラムやその他の企画で扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたらご記入ください。（自由記述・抜粋）

・運営として、４件の素晴らしい報告の後、フロアから質問が無かったときに、司会なり指定討論役的な方が用意されていると良いと思いました。毎年、勉強になります。

・大学としての学生の安全環境整備、学生実験室等への環境安全対策（資金面援助）

→この様な充実が学生個人の「能力」、「意識」の開発につながる。

・教育優先の大学が研究優先の大学か。（研究環境の充実は、学生教育に貢献するか？）

・障害をもった学生の進路を見据えた学習支援。

・基軸科目を担当する教員は極端に負担が大きいと思いますが、各学部はどのように負担を分担しているのか、事例を知りたい。

・本日のフォーラムに参加して、「アクティブ・ラーニング」の方法を取り入れられた様に感じたので、「アクティブ・ラーニング」の企画をしてほしい。

・各学部の共通話題となりうる教養科目。教養科目を担当しない先生方にとっては、少し専門外であるという意識もあってか、あまり興味を持っていただけないこともある。しかしながら、学部のカリキュラムには必ず必要となってくることもあるため、定期的にこのようなテーマを扱った企画を実施していただけると、大学としてある程度教養科目に関する認識を共有できるのではないかと期待する。

・在任校で FD の企画を担当しているので貴学の FD フォーラムに参加させていただき、今後の取組に参考にさせていただきます。

第１９回ＦＤフォーラムアンケート　平成２９年１１月９日（木）

本日は第１９回 FD フォーラムにご参加いただきありがとうございました。
今後のフォーラムの企画をはじめ、FD 活動の取り組みにおいて参考になるご意見をいただきたいと思いますので、本アンケートにご回答くださいますようご協力をお願いいたします。いただきましたアンケートのご意見は、今後の取り組みの参考にさせていただきます。ご記入後は入口にて回収箱を用意していますので、退出の際にお入れください。

１．あなたについてお聞かせください。（該当するものに〇をつけてください）

【名城大学】 1.専任教員　2.非常勤講師　3.職員　4.大学院生　5.学部学生　6.その他（　　）
【他 大 学】 7.教員　　8.職員
【高等学校】 9.教員　　10.職員
【そ の 他】 11.その他（　　）

２．本日の企画内容についてお聞かせください。

プログラム名	該当するものに〇を付けてください。				
１．講演「大学教養で何を学ぶのか」 名古屋大学大学院人文学研究科 日比　嘉高 氏	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
２．経済学部開講科目「現代社会に生きる」の紹介 渋井　康弘 教授	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
３．薬学部開講科目「人間と環境」の紹介 原田　健一 教授	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
４．人間学部開講科目「現代に生きる」の紹介 加茂　省三 教授	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満

３．今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて、具体的にお聞かせください。

（　　）

４．　学部の教育改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどがあればお聞かせください。

（　　）

５．　ＦＤフォーラムやその他の企画で扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたら下記にご記入ください。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

名城大学　大学教育開発センター委員会

当日配布資料

1

2

今日の話の流れ

1. はじめに
文系学部不要論、AI脅威論

2. 大学の「教養」はどう語られているか

3. 大学教養で何を学ぶのか

2

3

4

社会のニーズ？

「私は、教育改革を進めています。学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています」

安倍晋三首相のOECD閣僚理事会における基調演説、2014年5月6日

5

5

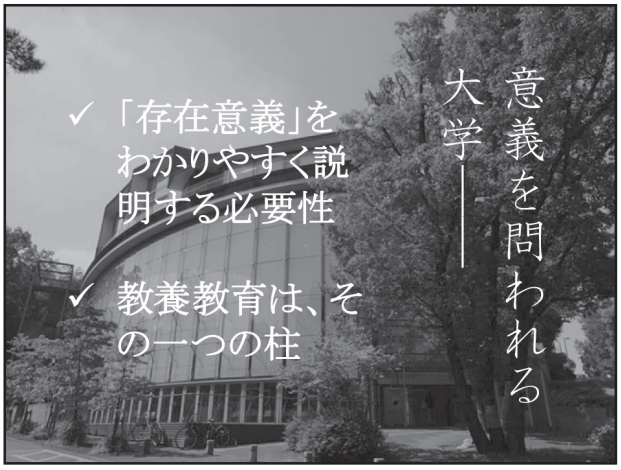
無償化と引き替えに？

授業料免除や給付型奨学金の拡充の対象となる学生の進学先について「産業界から人材を受け入れるなど実社会で評価されている大学に限定すべきだ」

「茂木担当相 無償化「大学を限定」 対象基準を検討」『毎日新聞』2017年10月28日

6

6



7

ＡＩの脅威？

日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に

○
アートディレクター
獣医師
ミュージシャン
メイクアップアーティスト
など

×
一般事務員
受付係
自動車組立工
保険事務員
など

野村総合研究所2015年12月2日

8

読めない生徒達

「中学や高校の教科書や、東京新聞などに掲載された記事など数百の題材をもとに問題を作り、コンピューターで無作為に出題 … 中学三年生の約１５%は、主語が分からないなど、文章理解の第一段階もできていなかった。約半数が、推論や二つの文章の異同などを十分に理解していなかった 」

「中3の15%、短文も理解困難　教科書や新聞で読解力調査」『東京新聞』2017年9月23日 朝刊

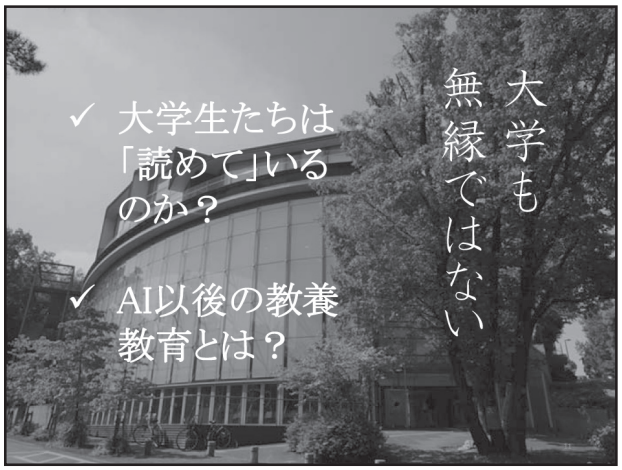
9

ＡＩ開発よりも重要なこと

「正直言って、東ロボくん（AI）の性能を上げるよりも中高生の読解力を向上させるほうが国民としては直近の課題だ」
新井紀子（国立情報学研究所）

「「AIの性能を上げている場合ではない」―東ロボくん開発者が危機感を募らせる、AIに勝てない中高生の読解力」ITmediaニュース、2016年12月21日

10



11

12

高等教育関連の審議会答申に見る変化

一般教育の目的

1946-1975『三八答申』『四六答申』
諸学の総合理解、社会人として生きるための**人間観・価値観**の形成

1976- 以後
各種の**能力**の育成

参考　吉田文『大学と教養教育――戦後日本における模索』岩波書店、2013年2月

13

大学外からの意見
企業の人事採用担当

- チャレンジ精神
- チームワーク力
- コミュニケーション能力
- リーダーシップ力
- 主体的行動力
- グローバル素養

溝上慎文「教養教育に裏付けられた、「専門性」「行動特性」の育成と証明」『カレッジマネジメント』リクルート、196、2016年より

14

大学外からの意見
経団連

これからの時代に求められる素質・能力
- ✓課題設定、主体的解
- ✓論理性
- ✓外国語
- ✓リベラル・アーツ
- ✓他者との協働
- ✓情報活用能力

「『今後の教育改革に関する基本的考え方』－第3期教育振興基本計画の策定に向けて－」日本経済団体連合会　2016年4月19日

15

大学外からの意見
文部科学省高等教育局

- 将来は職業の在り方も様変わりしている可能性
- いまだ答えのない課題…先の予想が困難
- 今のままでよいのかということに、大学は真摯に向き合い
- 具体的には、各大学において、学生に身に付けさせるべき資質・能力を明確にし…

「新時代を見据えた国立大学改革」文部科学省高等教育局　2015年9月18日

16

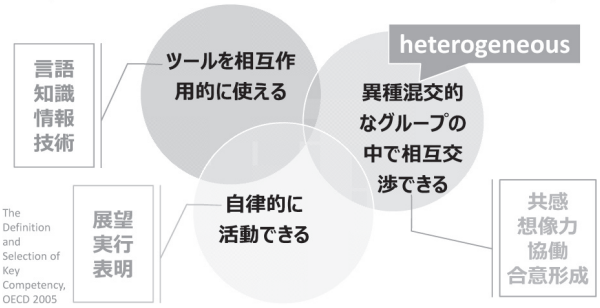
大学外からの意見
文部科学省高等教育局

これまでの人文社会科学系の教育研究については、… 学生に<u>社会を生き抜く力</u>を身につけさせる教育が不十分（学修時間の短さ、**<u>リベラルアーツ教育が不十分</u>**）なのではないか…

「新時代を見据えた国立大学改革」文部科学省高等教育局　2015年9月18日

17

Key Competencies
鍵となる３つの遂行能力（OECD）



The Definition and Selection of Key Competency, OECD 2005

18

「人」から「能力」へ――しかし「能力」涵養を実施する困難

吉田文『大学と教養教育』前掲、223頁より

1．どうやってやるのか？

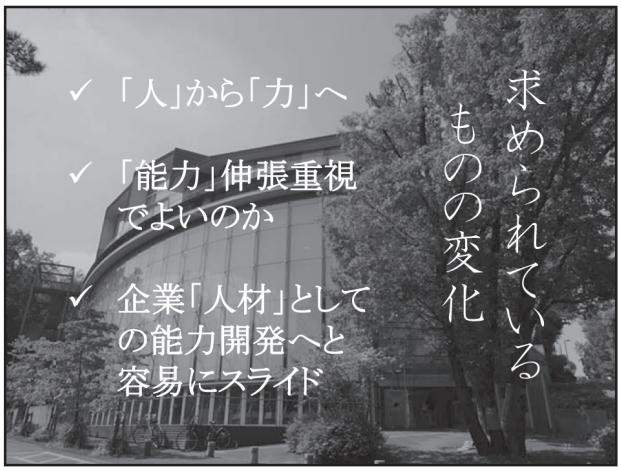
内容は？　方法は？　評価は？

2．教養教育でやる必要があるのか？

専門教育でもできるのでは？

→ 教養部・教養教育の解体

19



20

21

大学に何ができるのか

教育機関としての大学の価値、特性

1. 研究機関であり「図書館」
   人類の知的先端と、過去の高み深みに触れる
2. 時間的限定性と持続性
   所属期間は短いが、獲得能力・知識は持続
3. 国家、市場からの自律

23

22

「大学教養」で何を学ぶのか

- 興味関心の深化・拡大 **[知識]**
- 知的な創造を行うための能力・行動特性（コンピテンシー）の獲得 **[行動様式]**
- リテラシーの補完と高度化 **[読み書き能力]**
- 自己成長能力の伸張

24

23

人文社会系の課題としては

- リテラシーの補完と高度化
  1. 正確な読解
  2. **〈文脈知〉**
  3. 異なる文脈をまたぐ意志・情報の疎通
  4. 情報の収集、整理、評価
  5. 公共的な言論空間への批判的参与

AI以後

heterogeneous

自立、表明

25

24

1

「現代社会に生きる」の
構成とねらい

2

（1）二本の柱：生きること、働くこと

（2）6つのパート：各2～4講
①地域と共に生きる（渋井）：
福沢桃介の木曽川開発と中部の電力（デイハイク）。木曽谷の住民との衝突。

②命を育て、命を食べて生きる（杉本）：
農業、技術、環境、生命。

3

③グローバル化する社会で働く （佐土井）：
国境を越えて、多様なものが混ざりつつ共存。

④不安定化する雇用（蓑輪）：
働くものの権利・義務。ブラック企業・ブラックバイト・ブラック奨学金から身を守る。

4

⑤数理で経済を読み解く（川森）：
経済学で用いる数学の基礎。社会が必要とする数学的思考。

⑥宗教が世界を動かす（池上）：
グローバル化時代に必要な宗教の常識。多様な宗教の共存。

5

（3）目標：
自分の頭で考え、
自分の言葉で自説を語る。

＊産社の学生の文章はハイレベル
…理由？
→文章を書き続ければ、誰でも論理的に自説を語れるようになる！

6

（4）名城生は名城大学卒業生として、
現代社会を生きる

→名城大学史と先輩たち（大脇副本部長）
…最終講義

7

名城生は名城大学卒業生として
現代社会を生きる

- 知って欲しい私たちの大学
  OBから見た名城大学史
  創立者の言葉・立学の精神
- 卒業生191，508名の社会での活躍
  幅広くあらゆる分野に進出
- 現代社会に生きる
  自己が管理する時間をダイナミックに手中に
  現代社会で生きること、働くこと
  ～人の生涯の意義は天職を完うするにあり～

7

8

この授業を通して

- 学生に
  「自信と本学で学ぶ誇り、安心感」を感じて欲しい。
  「卒業生の社会での活躍が大学を支える」を伝えることは「学生が大学の主役であり、学生の力によって大学は作られていく。」とのメッセージを発することにほかならない。
- 学生から
  「大学の歴史や現在に至る立派な先生方の業績に触れることで、大学に対してより誇りがもてるようになった。」
  「大学で何ができるのか、何をなすべきか、という指針が見えてきた。」
- 自分自身は
  「自校教育を実施できる大学は幸せ」との報告（大学コンソーシアム京都）もあるが、その一端を担わせていただけることは正に自分にとって望外の喜びである。

8

9

「現代社会に生きる」の構成とねらい

（1）二本柱：生きること、働くこと
（2）6つのパート：各2～4講
①地域と共に生きる（渋井）
②命を育て、命を食べて生きる（杉本）
③グローバル化する社会で働く（佐土井）
④不安定化する雇用（蓑輪）
⑤数理で経済を読み解く（川森）
⑥宗教が世界を動かす（池上）
（3）目標：自分の頭で考え、自分の言葉で自説を語る
→文章を書き続ければ、誰でも論理的に自説を語れる！

（4）名城生は名城大学卒業生として、現代社会を生きる
・知って欲しい私たちの大学
・卒業生191，508名の活躍
・現代社会に生きる
～人の生涯の意義は天職を完うするにあり～
・この授業を通して
「自信と本学で学ぶ誇り、安心感を感じて欲しい。」
「自校教育を実施できる大学は幸せ。」

1

「大学教養」で何を学ぶか

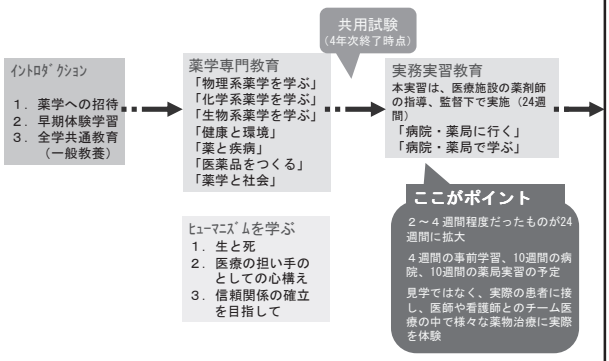
話題提供②

薬学部開講科目「人間と環境」の紹介

名城大学薬学部
原田　健一

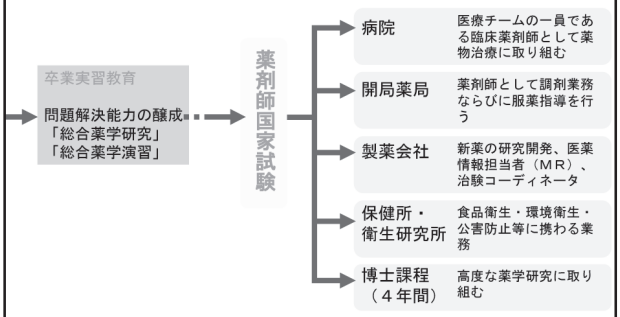
2

薬学部６年間の流れ（１）



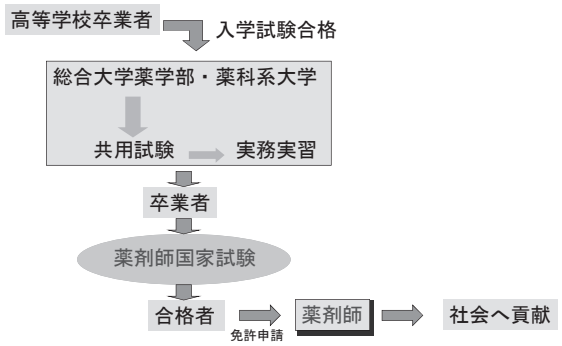
3

薬学部６年間の流れ（２）



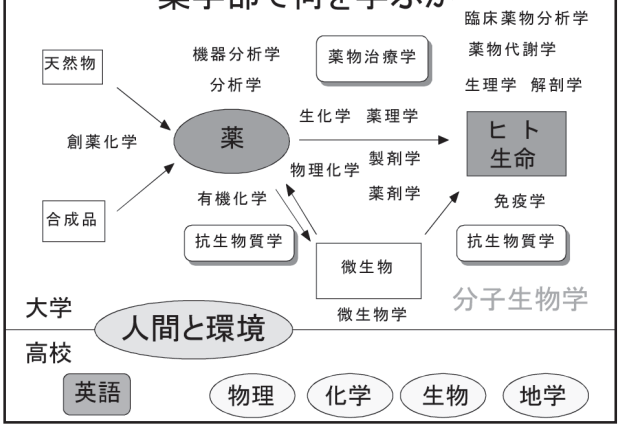
4

薬剤師への道



5

薬学部で何を学ぶか



6

人　間　と　環　境

担当者氏名　　原田健一（環境科学研究室）

講義の目的：
高校で習得した理科を発展する形で化学、物理そして生物の基礎的な考え方を習い、人間と環境に関するいろいろな問題に対して理解を深める。

教科書：改訂実感する化学　上巻　地球感動編
改訂実感する化学　下巻　生活感動編

ポイント：身の回りで起きていることを自分の頭で考える
（論理的思考ができること）
シラバスをしっかり読むこと

7

講義の進め方

◎ 8名で1グループを作る
　発表者は担当教員が指示
◎ 前週に簡単な予告を行う
◎ 1週目：担当教員による問題提起（30分）
　その後各グループで討論して方針を決める
◎ 2週目：発表準備（10分）
　発表（各テーマにつき2グループ、10分）
　発表後20分の質問
　担当教員の総括（10分）
◎ 8回目の講義で中間のまとめを行う
◎ 15回目は最終まとめ
◎ 発表はもちろん質問することも評価の対象

8

9

第1回のテーマ

4月12日　元素（物質）の形成と地球の誕生
4月19日　発表および議論

元素（物質）の形成
　宇宙の誕生
　元素はどのように作られたか
　超新星爆発と核融合反応
　原子とは（上巻、35ページ、下巻、13ページ）
　周期表（上巻、34ページ）

10

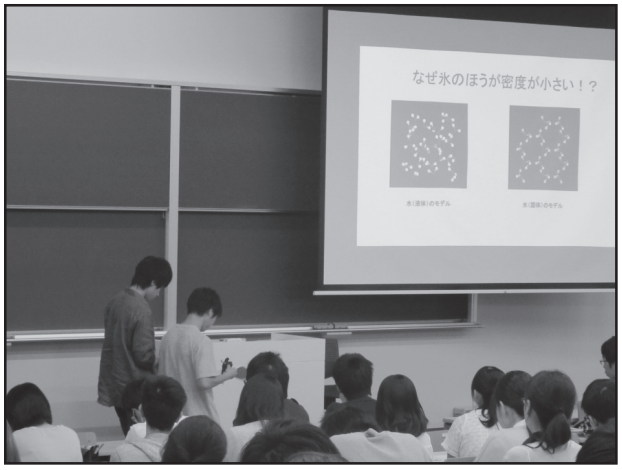
第1回のテーマ

4月12日　元素（物質）の形成と地球の誕生
4月19日　発表および議論

地球の誕生
　地球はいかに誕生したか
地球46億年の歴史
　現在の地球環境を考える際に重要な出来事
　　大気の形成、海の誕生、酸素の発生、
　　生命の誕生、超大陸

11

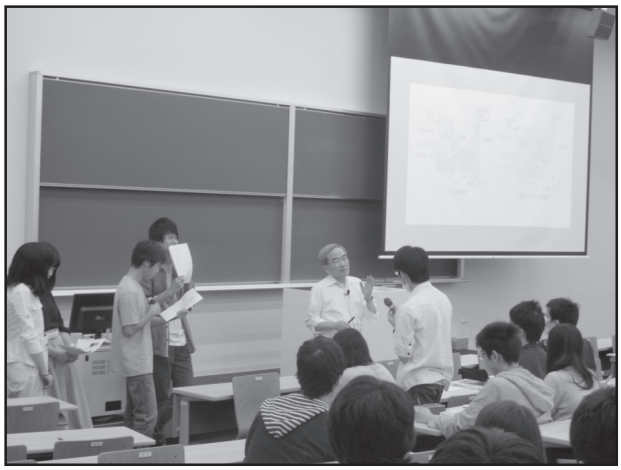
12



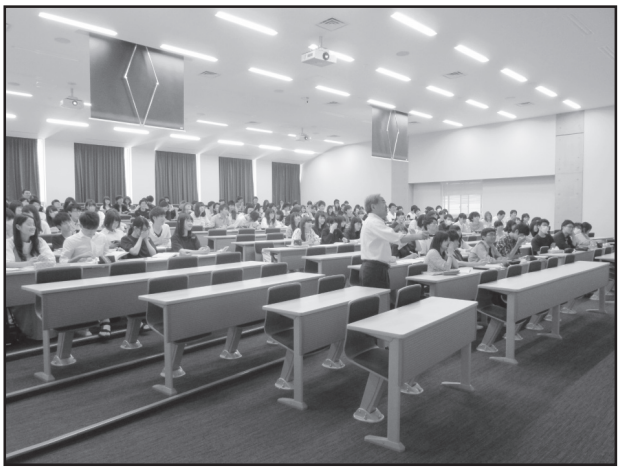
13

14

15



16

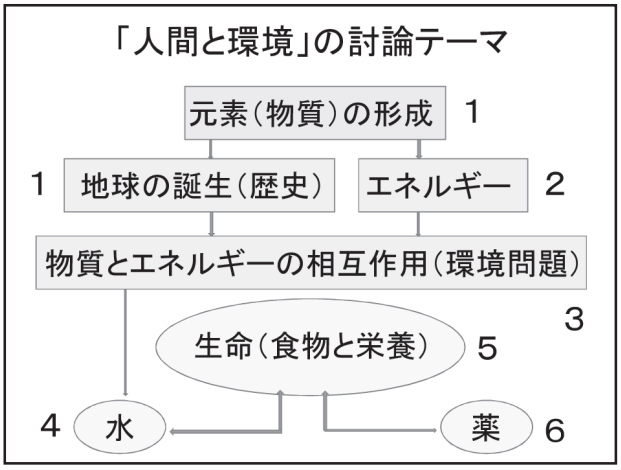


17

人間と環境ー講義計画

1） 4月05日　イントロダクションー科学的な考え方ー
2） 4月12日　元素（物質）の形成と地球の誕生
3） 4月19日　議論および発表
4） 4月26日　エネルギー（太陽エネルギーと化石燃料、原子力）
5） 5月10日　議論および発表
6） 5月17日　地球温暖化とオゾン層破壊
7） 5月24日　議論および発表
8） 5月31日　中間まとめ
9） 6月07日　水を考える―その不思議な性質ー
10） 6月14日　議論および発表
11） 6月21日　生命ー栄養を考えるー
12） 6月28日　議論および発表
13） 7月05日　薬ーアスピリンとペニシリンー
14） 7月12日　議論および発表
15） 7月19日　総まとめー環境と生命における恒常性ー

18

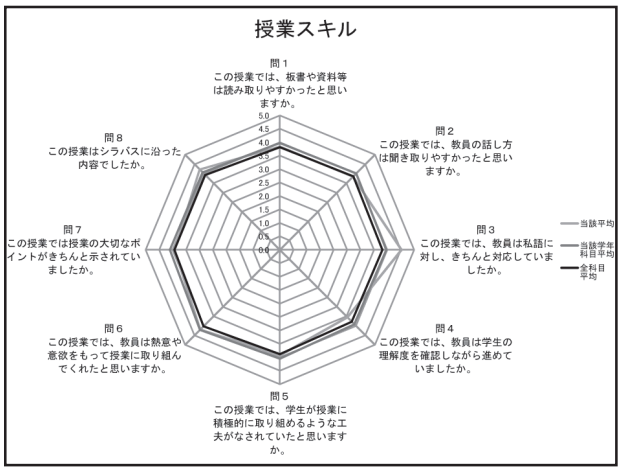


19

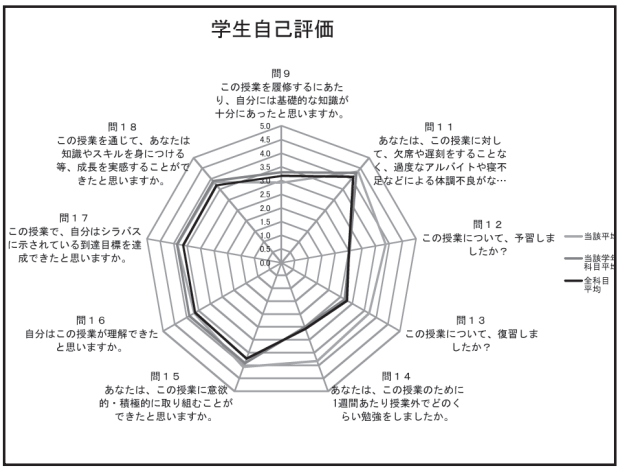
レポート提出

4月12日　元素（物質）の形成地球の誕生
4月19日　議論および発表
↓
レポート作成－1－
↓
4月26日　エネルギー（太陽エネルギーと化石燃料、原子力）
レポート－1－提出（1部/一人）
5月10日　議論および発表
↓
レポート作成－2－/
↓
5月17日　地球温暖化とオゾン層破壊
レポート－2－提出（1部/一人）
5月24日　議論および発表
以下同様

20



21



22

化学、72, No. 10, 11 (2017)

カガクへの視点

学生の意識改革を促す

大学初年次からの学術体験

増田　建

23

薬学部　基軸科目　「人間と環境」

「教えを授ける」→→→「自ら学ぶ」
「大学で学ぶとは」　「学生の意識改革」
「論理的思考」

「人間と環境」はこれらのための刺激となっているか？

イントロダクション
1．薬学への招待
2．早期体験学習
3．全学共通教育（一般教養）

薬学専門教育
「物理系薬学を学ぶ」
「化学系薬学を学ぶ」
「生物系薬学を学ぶ」
「健康と環境」
「薬と疾病」
「医薬品をつくる」
「薬学と社会」

実務実習教育
本実習は、医療施設の薬剤師の指導、監督下で実施（24週間）
「病院・薬局に行く」
「病院・薬局で学ぶ」

1

人間学部開講科目
「現代に生きる」

名城大学　人間学部　加茂省三

2

「現代に生きる」概要

- 対象学年　1年次
- 開講時限・曜日　前期木曜2限
- 履修者数　240名（2017年） DS101教室
- 担当教員（2017年）
  ドーム前　人間学部5名　都市情報学部2名
  天白　経済学部１名　理工学部2名　農学部1名

3

「現代に生きる」経緯

- 教養教育：「民主的市民としての基本事項を培う」
  （「教養教育連携推進委員会」）
- 社会の諸問題に関する専門知との接触　**弁別・吸収**
  それらを踏まえた現状認識と問題解決の模索　**判断**
  問題解決の基本方針に関する合意形成　**合意形成**
- 新しい導入科目の新設
- トライアル（2014年度）を経て2015年度より開講

4

「現代に生きる」特徴

- ①ユニット制の導入：
  15回の授業を、テーマの関連性から3つのユニットに分け、
  ユニットごとに完結する形で運用
- ②学生の能動的学修を促す多様な授業形態：
  講義（学際的学部横断的）、グループ討論、
  課題調査、全体討論、教員からのフィードバック
- ③評価方法：グループレポート、個人レポート
- **④ＩＣＴの導入と活用**

5

「現代に生きる」ユニット制

- 1回　ガイダンス
- ユニット１：人口動態の過去と未来
  2–4回　講義と討論
  5回　全体討論
- ユニット２：自然環境の中で生きる人間
  6–8回　講義と討論
  9回　グループ課題調査
  10回　全体討論
- ユニット３：食料・エネルギーの需給見通しと将来の課題
  11–13回　講義と討論
  14回　グループ課題調査
  15回　全体討論

6

「現代に生きる」授業

- ①　講義と討論：　講義　→　討論課題提示　→
  学生グループ討論　→　討論結果発表　→
  教員からのコメント：　後日グループレポート提出
- ②　課題調査：　課題提示　→　学生グループ単位
  での課題調査（図書館等の教室外でも可）→
  教室での成果発表：　後日グループレポート提出
- ③　全体討論：　教員よりグループレポートへのフィードバック
  →　ユニットのまとめレポート課題の提示と討論　→
  教員と学生との全体討論：　後日まとめレポート（個人）提出

7

グループ討論

- １グループ（班）　6名
  40班
- 討論課題の例（2017年）
  子どもを持つか持たないか、また何人持つかは、夫婦が判断する事ですが、戦後、日本社会では「生活の向上」、「経済的豊さ」、「経済的発展」などを重視し、国が子どもの数を抑制する政策がとられてきました。夫婦にとって、国が子ども数を操作することは、必要なのでしょうか？（国が個人の選択に関与する必要があるのか？）
  A.必要である　B.必要ない　その理由は？

8

「現代に生きる」ICT

- iPadの導入（2015年～）（大学教育開発センター「教育の質保証」）
- ICT導入ありきではない
- 討論結果発表：口頭での発言
  発言に躊躇するグループへの結果発表の機会提供
  学生間の**「共有」のためのツール**
  1班に1台のiPad

9

- 教室スクリーンへの投影（班の討論結果）
- レポート作成支援
  iPad画面を学生のメールアドレスへ送信（希望者）討論結果を踏まえたグループレポート作成
- 教員へのフィードバック
  討論結果のiPad画面を講義担当教員へ送信
  討論結果からレポート作成への過程把握につながる
- グループ課題調査時の調査ツール
  教室外での調査（授業時間内）に携帯（図書館等）
  名城WiFiを利用してのネットでの情報収集・調査

10

「現代に生きる」ホームページ（2017）

（大学教育開発センター「教育の質向上」）

•授業内外での学生の能動的学修を促進

①意欲の高い学生に発展的な学修へとつながる、方法論や資料の提供
②意欲の低い学生に能動的学修への参加を促す仕組み（グループレポートにフリーライドさせない）
③学生の学修過程や学修成果の公表

授業専用ホームページ（プラットフォームとして）

11

「現代に生きる」トークの活用

- 掲示板**「現代に生きる」トーク**（ＨＰ内　学内限定）
  学生間、学生・教員間の授業後の能動的学修支援
  各班に一つの掲示板
  学生：認証により自動的に自分の班の掲示板へ
  掲示板へのアクセス（スマホ、ＰＣで可）
- 学生間の活用
  iPad討論結果　→「現代に生きる」トークにアップ
  グループレポート作成のための議論を掲示版で展開
  掲示板への書き込み　→**学生のメールアドレスへ通知**
  学生のメールは名城大学Gmailアドレス（スマホ受信可）

12

- 学生・教員間の活用
  「お知らせ」に書き込み：
  履修学生全員へメールで通知
  「資料ダウンロード」へファイルのアップ：
  履修学生全員へメールで通知
  発展的な学修につながる資料のダウンロード

13

・メリット：「共有」
①授業後の学生間のレポート作成のためのコミュニケーションが容易になる（場所・時間の制約なし）
②教員による掲示板の確認可能：
議論の可視化　→フリーライドを防げる
教員とのコミュニケーション
③授業後の発展的な学修につなげることができる

14

今後の課題

・主としてICTの活用に関して

・①iPadによるスクリーン投影
学生の評価：意見を共有しやすい、理解しやすい

・②iPadのグループレポート作成への活用
メールで討論結果を共有できたが、問題はその先
→「現代に生きる」トークの導入（要検証）

15

・「現代に生きる」での能動的学修にＩＣＴは必要か
必要：ICTのメリット**「共有」**
「民主的市民としての基本事項を培う」
市民：横（水平的）のつながり

・課題：持続性
作業負担　重い
組織的な支援：アップルの教育機関向けプログラム
人員的な支援：技術支援者（授業用）、補助者

第５回 FD 学習会で人間学部の宮嶋学部長が実践報告

大学教育開発センターは７月18日、天白キャンパス共通講義棟東で、第５回 FD 学習会を開催しました。今回は、講師に人間学部の宮嶋秀光教授を迎え、「学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニング－名城大学人間学部『現代に生きる』の実践－」をテーマに実施しました。講演では、人間学部で開講している基軸科目「現代に生きる」を題材として、学部を横断した教員チームによる科目の運営体制や成績評価の工夫、今後の課題等についての情報提供がありました。

実施後の参加者アンケートからは、「教員がユニットを組んで情報共有をしながら授業の工夫をしているのが素晴らしいと感じた」「総合大学の強みを認識できた」「授業運営のテクニカルだけでなく、授業のバックグラウンドとなる考えや経緯が紹介され、分かりやすかった」といった意見がありました。

最後に、安藤喜代美大学教育開発センター長が「学生をアクティブにするためには、教員も情熱を持ってアクティブな講義を行うことが重要です。今後も FD 企画を通じて、学内で行われているアクティブ・ラーニングの取組を共有していきたい」とまとめ、閉会しました。

1

名城大学　第5回FD学習会　2017.7.18

学生の主体的な学びを育む アクティブ・ラーニング

ー 名城大学人間学部
「現代に生きる」の実践 ー

名城大学人間学部
宮 嶋 秀 光

2

話題提供の流れ

Ⅰ. 基軸科目の狙いと教育課程上の位置
Ⅱ. 基軸科目の試行と本格稼働の構想
Ⅲ. 基軸科目「現代に生きる」の実際
Ⅳ. 3年間を通じて新しく導入した試み
Ⅴ. 学生アンケートの概要
Ⅵ. 基軸科目「現代に生きる」の特質
Ⅶ. 基軸科目の今後の課題

3

Ⅰ　基軸科目の狙いと教育課程上の位置

教養教育の導入科目
教養教育＝
単なる広い知識を提供することではなく、
「民主的市民としての基本事項を培うこと」
（「教養教育連携推進委員会要項」）

↓

21世紀の市民として求められる4つの資質

4

①急増する知識・情報のうち、社会の維持・発展にとって不可欠なものを適切に弁別・吸収する能力
②それらに基づいて公正に判断する能力
③その上で議論を行い、合意を形成する能力
④以上を踏まえて、他者と協力して物事を遂行する能力
（「教養教育コア・カリキュラム策定委員会報告書」平成24年10月）

→ 社会の諸問題に関する専門知との接触（弁別・吸収）
それらを踏まえた現状認識と問題解決の模索（判断）
問題解決の基本方針に関する合意形成（合意形成）

↓

その基礎資質を形成する新しい導入科目の新設

5

補）The third wave of science studies.
(Collins,H.M.;Evans,R.,2002)

《政策決定における専門知の役割》
①第一の波（1950年代～1960年代）
「（科学的）権威の時代」 実証主義
②第二の波（1980年代～）
「民主主義の時代」　市民の参加と決定
③第三の波　「専門知の時代」（？）

専門知	⇄	経験
科学		政治
専門家		市民

6

Ⅱ　基軸科目の試行と本格稼働の構想

【トライアルの概要】
統一テーマ：「人口問題を考える」
近似したサブ・テーマごとに三つのユニット（教員グループ）に分けて実施
受講者　：人間学部　新入生　38名
参加教職員：
①コーディネーター教員1名
②専任教員（7学部より11名）
③外部講師（1名）
④大学教育開発センタースタッフ　2～3名
教　室　：150人収容の通常教室

7

【トライアルの経験を踏まえた新授業の構想】
新しい二つの方針
①新入生全員（230名）を一堂に会して実施
学部への所属意識を高めるとともに、施設面での制約を超えて、全学部での実施の可能性を示すため
②学生のグループ討議をいっそう重視
学生の積極的な学びのために、学生間の討議が重要な役割を果たすというトライアルの経験を活かすため

※以上の新方針を念頭に置いて、平成27年4月から人間学部で新科目として実施した。その概要は以下の通り。

8

Ⅲ　基軸科目「現代に生きる」の実際

①授業の基本方針
◇新入生の全員を同一時間･同一空間で、
◇専門家の知見を踏まえ、
◇現代的な問題への取り組みを通じて、
◇学生相互、教員と学生の討論を組織し、
◇その成果をグループでまとめる

9

②授業の環境（科目の種類、受講者等）

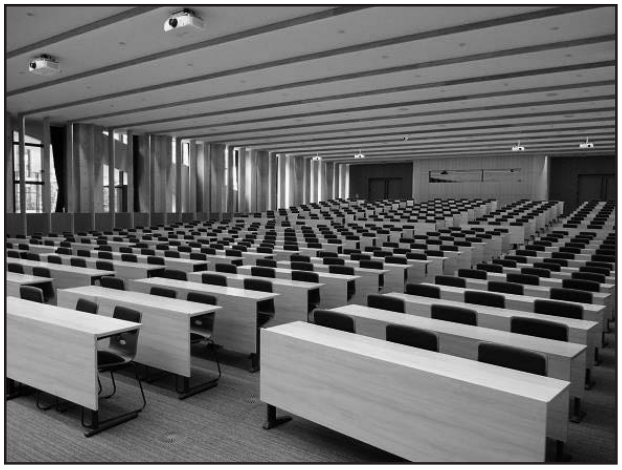
科目の種類：教養教育科目（1年次前期開講）
登録必修科目（2単位）
受 講 者 数：人間学部の新入生全員
2015年 230人、16年219人、17年240人
グループ編成：当初は　1班8名で28班構成
2015年のユニット3以降　1班6名　38班編成
2016年　　1班6名　36班編成
2017年　　1班6名　40班編成
（17年度からユニットごとにメンバー総入れ替え）

10

②授業の環境（施設、設備等）
教室のタイプ：視聴覚施設完備の普通教室
2015～16年　S101 定員510名/座席固定
2017年（移転後）DS101定員421名/座席固定
その他の設備
1）班の立場表示のためのポップ・スタンド
2）学生の意見発表のためのワイヤレスマイク
3）2015年の第10回の授業から、
各班に1つのiPad
4）2017年の第6回の授業から板書用のタブレット

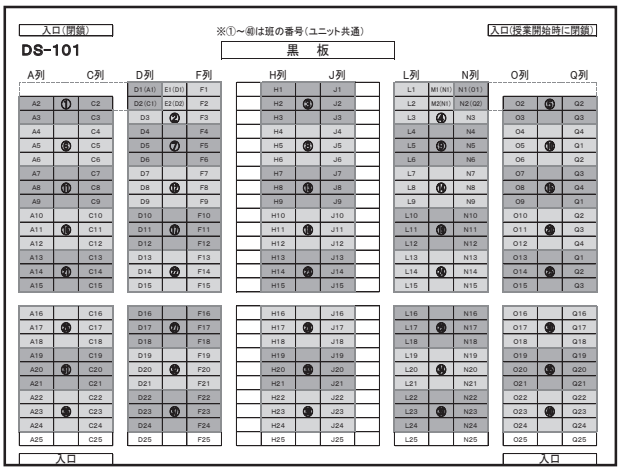
11

12

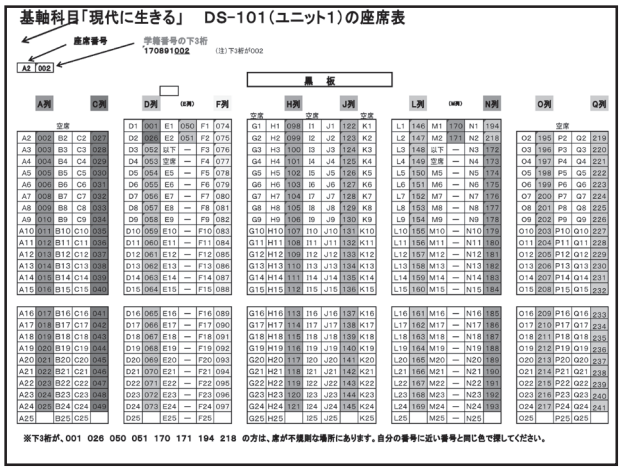


13

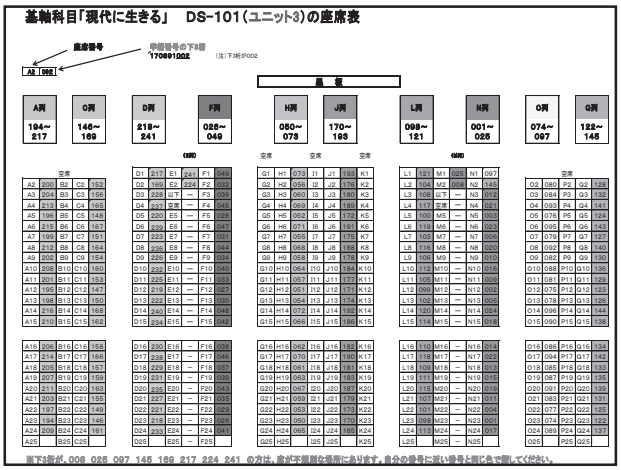
14



15



16



17

③ガイダンスの実施

第1回の授業で詳細なガイダンスを実施

1. 基軸科目（「現代に生きる」）のねらい
2. 座席と出席について
3. 授業の流れと成績評価について
4. 班による討議の練習とiPad活用の練習

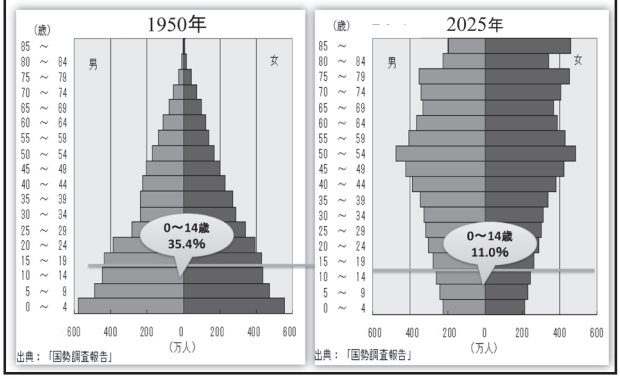
2014年の時点で、 世界の人口は72億4400万人です。
では、約500年前である16世紀の初頭、世界の人口は、どのくらいであったと推測しますか？

5. レポートの提出期限と提出先について
6. 各ユニットと講師･テーマの紹介

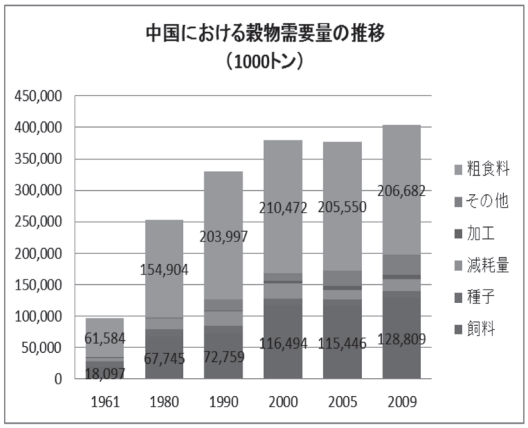
各回の授業で取り上げるテーマをスライド1枚で提示

18

➢子どもが減って、何が問題なの？



19



20

④ 統一テーマと三つのユニット

全体テーマ：人口問題を考える

3つのユニットで構成

ユニット1：人口動態の過去と未来

ユニット2：自然環境の中で生きる人間

ユニット3：食料・エネルギーの需給の見通しと将来の課題

※ 各ユニットは、基本的には5回の授業で構成し、コーディネーターと各ユニット担当の教員全員が毎回参加。最終回は、ユニット担当の全教員が学生と議論。

21

⑤－1 各ユニットの構成（2015年）

ユニット1：人口動態の過去と未来

A先生（経営） 人口調整の歴史 ― 飢餓・疾病・戦争・中絶 ―
B先生（人間） 多様化する家族形態 ― 選択肢としての子ども ―
C先生（法） 少子高齢化と労働力不足 ―人口減少社会における雇用政策 ―
D先生（都市） 都市化と過疎化 ―地域格差と生活基盤インフラ ―

ユニット2：自然環境の中で生きる人間

E先生（農） 類人猿から人間へ ― 人類の誕生と適応放散 ―
F先生（理工） 地球環境問題 ― オゾン層破壊と地球温暖化 ―
G先生（理工） 開発と生態系保全
H先生（人間） 土地をめぐる地域紛争

ユニット3： 食料・エネルギーの需給の見通しと将来の課題

I先生（経済） 逼迫するエネルギー ― 世界のエネルギー需要 ―
J先生（経済） 食料需要の変化と貧困問題の諸相
K先生（経営） 食料の輸出と輸入 ― フェア・トレード、食糧安保 ―

22

⑤－2 各ユニットの構成（2017年）

ユニット1：人口動態の過去と未来

安藤先生（人間） 多様化する家族形態 ― 選択肢としての子ども ―
宮本先生（都市） 子育て支援政策に関する問題
森先生（都市） 縮減社会における地方部の課題 ―伝統文化の価値継承のあり方 ―

ユニット2：自然環境の中で生きる人間

山岸先生（農） 類人猿から人間へ ― 人類の誕生と適応放散 ―
広瀬先生（理工） 気候変動の科学と価値観 ―温暖化問題 ―
谷口先生（理工） 開発と生態系保全
加藤先生（人間） グループ単位の共同的な自主学習

ユニット3： 食料・エネルギーの需給の見通しと将来の課題

西村先生（人間） 中世ヨーロッパにおける人口増加と環境破壊
加茂先生（人間） 土地を巡る地域紛争
杉本先生（経済） 食料授業の変化と貧困問題の諸相
加藤先生（人間） グループ単位の共同的な自主学習

23

⑤－2 各ユニットの構成（2017年）配布資料用

〈1回〉 ガイダンス

ユニット1：人口動態の過去と未来

〈2回〉 多様化する家族形態 ― 選択肢としての子ども
〈3回〉 子育て支援政策に関する問題
〈4回〉 縮減社会における地方部の課題 ―伝統文化の価値継承のあり方
〈5回〉 全体討論

ユニット2：自然環境の中で生きる人間

〈6回〉 類人猿から人間へ ― 人類の誕生と適応放散
〈7回〉 気候変動の科学と価値観 ―温暖化問題
〈8回〉 開発と生態系保全
〈9回〉 グループ単位の共同的な自主学習
〈10回〉 全体討論

ユニット3： 食料・エネルギーの需給の見通しと将来の課題

〈11回〉 中世ヨーロッパにおける人口増加と環境破壊
〈12回〉 土地を巡る地域紛争
〈13回〉 食料授業の変化と貧困問題の諸相
〈14回〉 グループ単位の共同的な自主学習
〈15回〉 全体討論

24

⑥ 各時限の流れ（1）

1）担当教員が専門的な立場から現代的な問題を取りあげ、その背景や基本知識を解説
（おおむね45分、2017年より原則40分）

2）担当教員が選択的な立場決定を迫る問題を提起
→ ※問題例

3）責任者を決めて、班（名）ごとの討論
（おおむね20分） → ★討論の様子、★iPad活用の様子

4）班の立場表示と見解発表（挙手による）
（おおむね20分） → ※立場表明、※発表の評価

5）未発表の班の見解をiPadを通じて全体に提示、それを踏まえた担当教員のコメント

25

※担当教員が提起する問題例（2017年）

1－（1）子どもを持つか持たないか、また、何人持つかは、夫婦が判断することですが、戦後、日本社会では「生活の向上」、「経済的豊かさ」、「経済発展」などを重視し、国が子どもの数を抑制する政策が取られてきました。夫婦にとって、国が子ども数を操作することは、必要なのでしょうか？（国が個人の選択に関与する必要があるのか？）

A. 必要である　　B. 必要ない　　その理由は？

2－（3）外来種の規制に賛成？反対？それとも？

A. 規制に賛成：①理由，②合意形成を促す具体的な方法は？

B. 規制に反対：①理由，②規制せずに生態系を守る方法は？

C. 中立：①賛成でも反対でもない理由，

②「中立」が目指すものは？

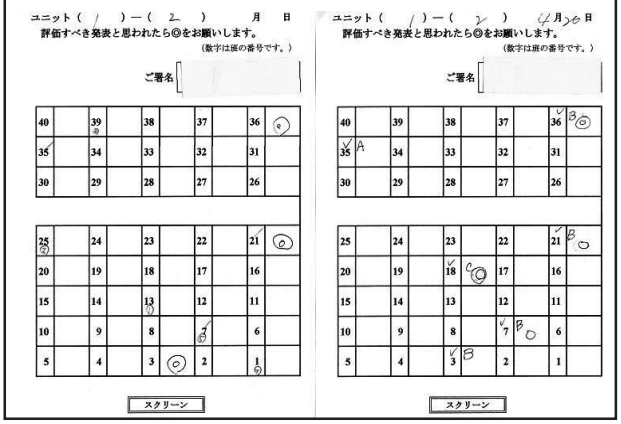
26

※立場の表明(ポップスタンド)

27

28

※発表の評価（発言に対する加点の判断根拠）



29

⑥　各時限の流れ（2）

2017年度導入

【グループ単位の共同的な自主学習】

1）担当者が自主学習の意味と課題を説明

↳ ※課題用紙

2）班ごとにキャンパス内で自由にグループ調査

例：図書館、情報教室など　↳ ★学習の様子

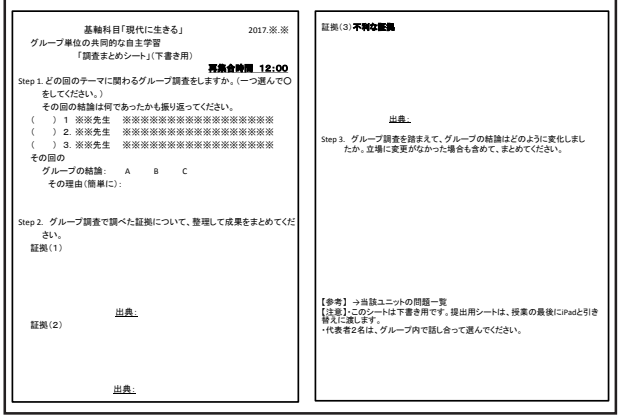
（おおむね55分）

3）教室に再集合して班ごとの成果の発表

（おおむね20分）

30

※共同的な自主学習の課題



基軸科目「現代に生きる」　2017.※.※

グループ単位の共同的な自主学習

「調査まとめシート」（下書き用）

再集合時間　12:00

Step 1. どの回のテーマに関わるグループ調査をしますか。（一つ選んで○をしてください。）

その回の結論は何であったかも振り返ってください。

（　　）1 ※※先生　※※※※※※※※※※※※※※※※

（　　）2. ※※先生　※※※※※※※※※※※※※※※※

（　　）3. ※※先生　※※※※※※※※※※※※※※※※

その回の

グループの結論：　A　B　C

その理由（簡単に）：

Step 2.　グループ調査で調べた証拠について、整理して成果をまとめてください。

証拠（1）

出典：

証拠（2）

出典：

証拠（3）**不利な証拠**

出典：

Step 3.　グループ調査を踏まえて、グループの結論はどのように変化しましたか。立場に変更がなかった場合も含めて、まとめてください。

【参考】 →当該ユニットの問題一覧

【注意】・このシートは下書き用です。提出用シートは、授業の最後にiPadと引き替えに渡します。

・代表者2名は、グループ内で話し合って選んでください。

31

⑥　各時限の流れ（3）

【ユニットの最終回】

1）授業の担当者全員が登壇

2）各回のレポートに対するコメントと問題提起
（各教員10分程度）　★コメントの様子

3）全体テーマ（レポートテーマ）に関するグループ討議
（おおむね20分）

4）教員に対する質問も含めた全体討論
（必要に応じて教員間の討論も含む）

5）ユニットのまとめレポートの課題の確認

32

⑦－1　2種類のレポートと成績評価

【2種類のレポート】

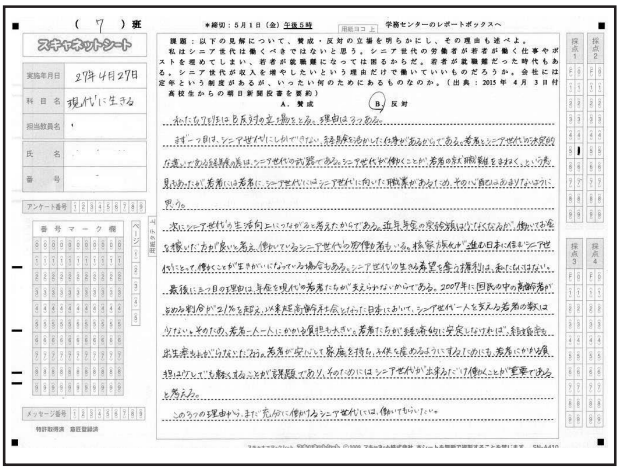
1）毎回グループ単位で提出するもの
内容：授業中の討論の成果を発展させたもの
提出方法：各回の責任者を決め、翌週の火曜日に提出

2）ユニットの最後に個人単位で提出するもの
内容：コーディネーターが提示するユニット全体に関わるテーマに応えるもの
提出方法：授業翌週の水曜日までに各自が提出

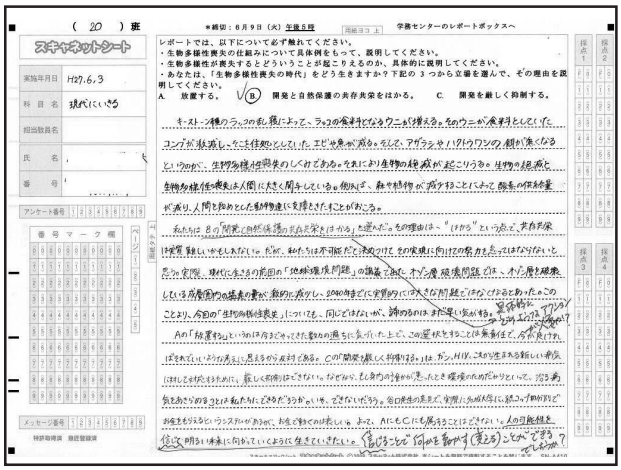
【成績評価】

1）　5点×11レポート　　2）　15点×3レポート
（個人の成績は、これらの合計点による）

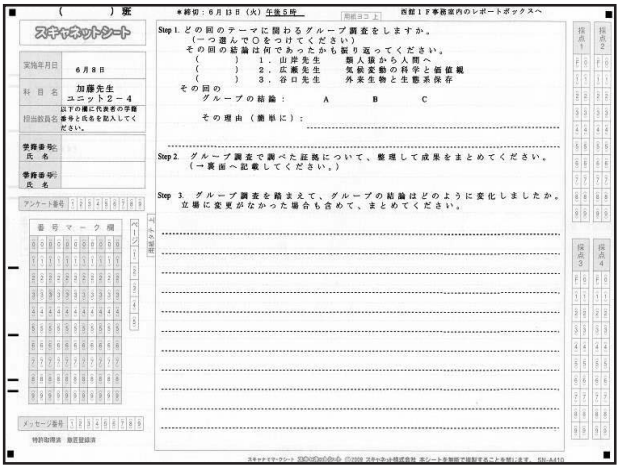
33



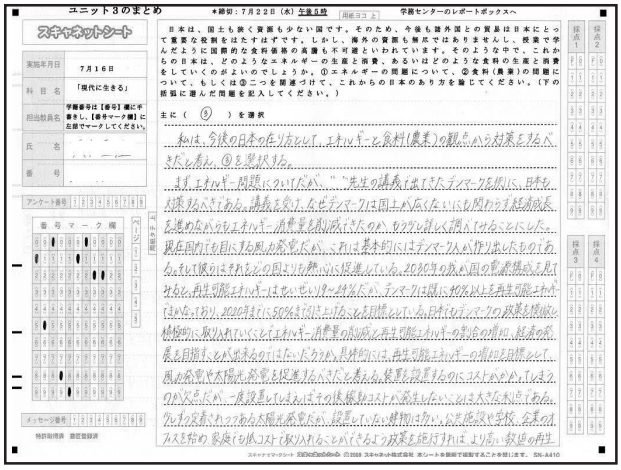
34



35



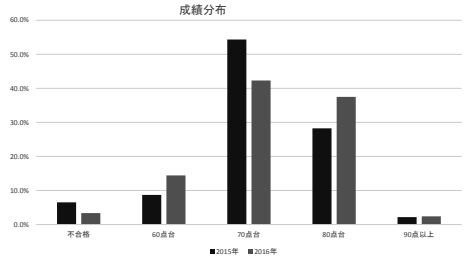
36



37

⑦－２　２種類のレポートと成績評価

2年間の成績分布（2017年度は未集計）



38

Ⅳ 3年間を通じて新しく導入した試み

基軸科目「現代に生きる」担当者のモットー
問題点を共有し、つねに改善と工夫を！

1．チームによる運営

➡ ※班討論の個別的な支援
※ICT導入（←ICT環境の未整備ゆえの要人員）

2．少数班の編成とメンバーの完全入れ替え

➡ ※全員が参加できる班の討議
※多様な学生との関わりの促進

39

3．すべての班にiPadを導入

➡ ※発言できなかった班の見解を全体で共有
※各班の授業外討論の共通情報として活用
（記載事項を電子メール配信、2017年度から
専用HPの班別の掲示板へアップ）

4．WebClassを利用した授業外学習の把握

➡ ※授業外の班の活動を把握し、次回の授業で班の討議を促進（今後はHPの活用へ）

40

5．学生によるグループ調査の導入

➡ ※専門家の話を聞くだけではなく、
自分たちで集中的に情報・知識を集め、
確認・批判する機会の確保

6．基軸科目専用ホーム・ページの開設

➡ ※掲示板を用いた授業外の班学習の促進
※継続的な情報提供による持続的な学習
の機会の提供

↳ ホームページ内の班別掲示板

41

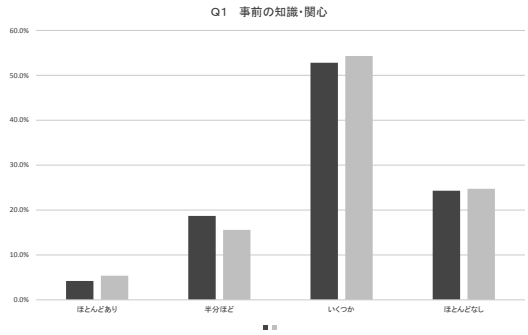
Ⅴ 学生アンケートの概要

※グループ単位のレポートを成績評価に用いたため、学生対象のアンケートは、授業直後ではなく、成績発表後の後期冒頭に以下のような内容に関する設問で実施した。

（1）　授業前の社会問題に対する関心の程度
（2）　授業後の社会問題への関心の深まり
（3）　<u>授業中のグループ討論の有益性</u>
（4）　成績評価の仕方
（5）　授業に集中できなかった時の理由
（6）　授業全体への意欲
（7）　iPadの活用
（8）　その他（自由記述）

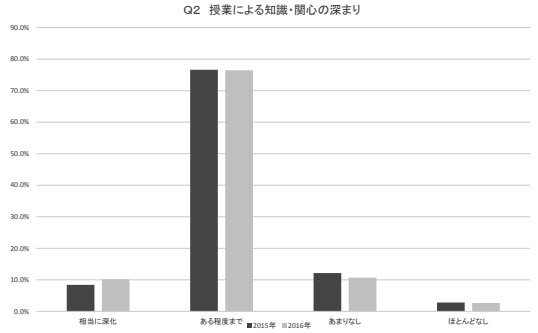
42

（1）　授業前の社会問題に対する関心の程度



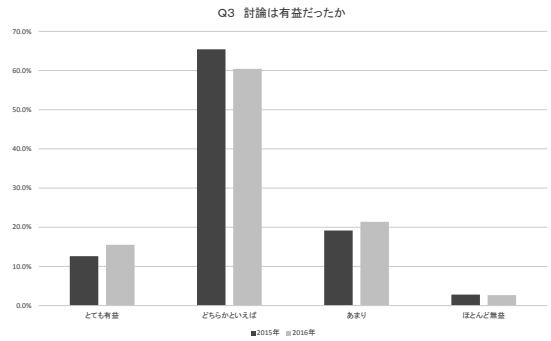
43

（2） 授業後の社会問題への関心の深まり



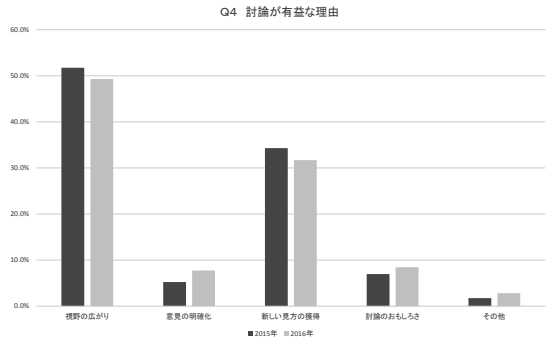
44

（3） 授業中のグループ討論の有益性（その1）



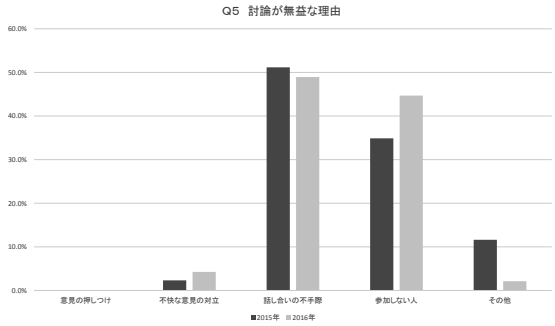
45

（3） 授業中のグループ討論の有益性（その2）



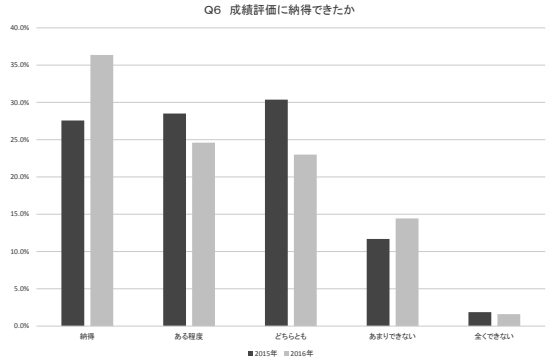
46

（3） 授業中のグループ討論の有益性（その3）



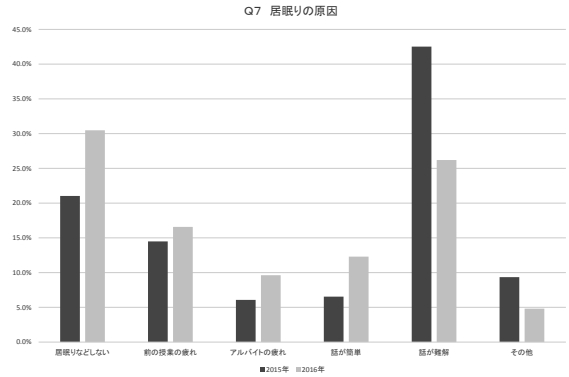
47

（4） 成績評価の仕方



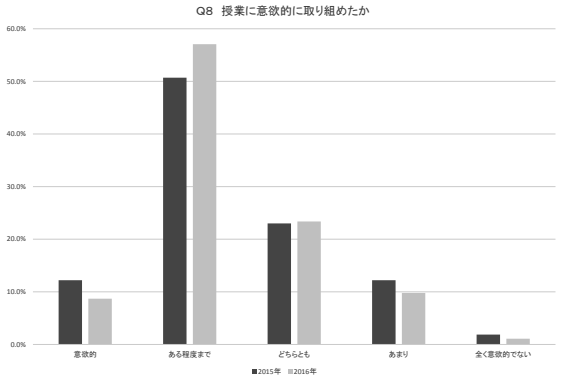
48

（5） 授業に集中できなかった時の理由



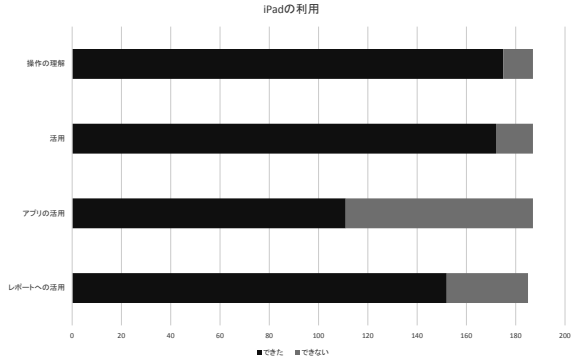
49

（6） 授業全体への意欲



50

（7） iPadの活用（2016年のみ）



51

（補）担当教員の授業後の感想

※2015年度の授業直後に開かれた懇親会で、以下のような感想がありました。

（1）学生が自主的に意見を述べたので、教員としても楽しい授業となった。

（2）（特に人間学部以外の教員から）いままで人間学部の学生のイメージが判らなかったが、今回の授業で人間学部の学生のことがかなり理解できるようになった。

（3）全く異なる分野の教員と交流し、大学内の多様性を知ることができ、それをもっと生かせればと思った。

（4）他の教員も見学しており、また自分も他の教員の授業を参観できたので、最高のFDになった。

52

Ⅵ 基軸科目「現代に生きる」の特質

（1）教員が知恵を出し合って授業を創造

トライアルの成果を踏まえ、教員による協議やユニットごとの打ち合わせの中でアイデアを出し合って授業を構想

（2）教員が共同して授業を運営

１時限だけ教員が講義を受けもつオムニバスではなく、ユニットを担当する教員が毎回参加し、常時、7～8人の教員で運営

（3）学生も授業運営の担い手

グループ単位のレポート提出は、フリーライドの懸念などを含めて、事前にかなり議論になったが、学生自身の自治能力に期待し、それを促す意味で敢えて導入

53

（4）問題点は即座に協議

複数の教職員が参加しているため、新たに生じた問題点は、授業直後に協議され、翌週には対策を実行

（5）後続ユニットの教員に事前に情報提供

ユニット1の状況を、ビデオ録画も含め、ある程度までユニット2以降の教員に提供することで、事前に一定の対策を依頼

（6）担当以外の教員も見学

基軸科目の担当教員だけではなく、基礎ゼミナール等の担当学生の様子が気になる教員も、基軸科目の授業参観を通じて学生の日常の姿を理解

54

Ⅷ 今後の課題

①学生自身が調べる学習を、どのように充実させるか

②全体討論の成果を、どのような形で整理し、どのように次の学習につなげるか

③討論に消極的な学生のために、班の中でどのような取り組みを促すか

④授業外におけるレポート作成の共同作業を、どのように充実させるか

55

最後に－基軸科目「現代に生きる」を通じて
学生諸君に伝えたいこと

「考えてみよ！諸君がどこに居を構えようと、
諸君自身がただちにポリスとなる。」
（ニキアスの演説：トゥキディデス『戦史』より）

これが、基軸科目「現代に生きる」がめざすものです。

長時間のご静聴ありがとうございました。

第6回FD学習会を実施

大学教育開発センター委員会は、12月21日、ナゴヤドーム前キャンパスにて、第6回FD学習会「学生の主体的な学びを促進するアクティブ･ラーニング－農学部･外国語学部の基軸科目実践例－」を開催しました。

事例報告では、農学部生物資源学科の山岸健三 教授（学務センター長）から農学部開講科目「生命・食料・環境・エネルギー」、外国語学部のアーナンダ・クマーラ学部長と都市情報学部の大野栄治教授から外国語学部開講科目「現代に生きる」の紹介があり、本学が展開する特色ある教養教育科目である「基軸科目」に位置付けられる科目の目的や効果、アクティブ・ラーニングの手法等について共有する機会となりました。

その後、参加者によるグループ別の意見交流があり、学生が主体的に学ぶための授業運営の工夫や、アクティブ・ラーニングへの取組方等について、活発な意見交換が行われました。

事例報告を元に意見交換をする参加者ら

1

試行錯誤の基軸科目

農学部基軸科目の自己評価

農学部：山岸健三
2017年12月21日

2017/12/21 1

2

まずは歴史から
全学共通教育の誕生と崩壊

- 共通講義棟南と共通講義棟北が完成.
- 教養教育を**学部横断型の「全学共通教育部門」**とする.
- 大学教育開発センター主導で全学共通教育を運営.
- **2005年（平成17年）カリキュラム改正.**

- ガバナンス体制がなく，一部の学部が参加しなかったため「全学共通教育 」にはならなかった.
- 全学共通教育 VS 学部の専門教育：教養教育に対する各学部の考え方が全学共通教育に反映されにくく，しだいに不満が高まる.

2017/12/21 2

3

基軸科目誕生の背景

- **「全学共通教育体制」の解体論が浮上.**
- 当時の副学長が「全学共通教育体制」に引導を渡し，各学部で教養教育部門を構築することになった.
- 一方で，名城大学の学生として，共通の，最低限の教養教育として**「コアカリキュラム」**が必要という意見.各学部で**「基軸科目」**を設置することが決まる.

- **2015年（平成27年）カリキュラム改正により全学共通教育体制は崩壊.**

- 執行部の方針に対して学部側は「笛吹けど踊らず」.
- 各学部で「基軸科目」に対する温度差があった.
- アクティブラーニング型かオムニバス方式か.

2017/12/21 3

4

当初の基軸科目の設計

講義	A　クラス	B　クラス	C　クラス
回数	責任教員 D 先生	責任教員 E 先生	責任教員 F 先生
1	講義担当 G 先生	講義担当 Q 先生	講義担当 L 先生
2	講義担当 H 先生	講義担当 R 先生	講義担当 M 先生
3	講義担当 I 先生	講義担当 S 先生	講義担当 N 先生
4	講義担当 J 先生	講義担当 T 先生	講義担当 O 先生
5	講義担当 K 先生	講義担当 U 先生	講義担当 P 先生
6	講義担当 L 先生	講義担当 G 先生	講義担当 Q 先生
7	講義担当 M 先生	講義担当 H 先生	講義担当 R 先生
8	講義担当 N 先生	講義担当 I 先生	講義担当 S 先生
9	講義担当 O 先生	講義担当 J 先生	講義担当 T 先生
10	講義担当 P 先生	講義担当 K 先生	講義担当 U 先生
11	講義担当 Q 先生	講義担当 L 先生	講義担当 G 先生
12	講義担当 R 先生	講義担当 M 先生	講義担当 H 先生
13	講義担当 S 先生	講義担当 N 先生	講義担当 I 先生
14	講義担当 T 先生	講義担当 O 先生	講義担当 J 先生
15	講義担当 U 先生	講義担当 P 先生	講義担当 K 先生

2017/12/21 4

5

基軸科目の問題点

- 各学部の独自の考えで運営.
- **「教養教育」に対する重要度の認識に温度差**がある.
- 複数のクラス（学科）に分けた場合，運営責任者がいない.
- 基軸科目の講義担当に協力的な教員は多くない.
- どのようにして学生を議論に参加させるのか，授業形態をどうしてよいのかわからない.
- 基礎知識の無い新1年生に議論ができるはずがない.
- アクティブラーニング型授業を行うことができる可動式の大教室が限られている.

2017/12/21 5

6

人間学部の基軸科目

- 宮嶋教授の熱いリーダーシップ.
- モデルケースとして多くの教員が協力・講義に参加.
- アクティブラーニング型の授業を目指す.
- どのようにして学生を議論に参加させるのか，手探りで毎年改善していった.
- 1学年240名をS101教室（固定机）に並ばせる.
- 講義後，1班6名，40班で議論させ，発表させる.

- 新1年生に議論ができるのか，という不安は吹き飛ぶ.
- 可動式の大教室でなくても，アクティブラーニング型授業を行うことができることを実証.

2017/12/21 6

7

農学部の基軸科目

- 「生命・食料・環境・エネルギー」という科目名.
- 科目のコンセプトは農学部らしいと自負しているが,
- オムニバス方式にせざるを得なかった.
- 教養教育部門の自然科学系の1科目として位置付け.
- 農学部新1年生360名全員を相手にできない．当初は定員200名の抽選科目とした.
- 最近は登録必修科目扱い．S101に1年生360名全員を入れて授業.
- ひたすら講義で詰め込み．レポート提出で復習をさせている．一部の先生は学生に討論もさせている.

2017/12/21 7

8

- シラバス（タイトルのみ）

回	担当	タイトル
1	山岸	生命の多様性と尊厳
2	山岸	農耕の発達と人口爆発
3	山岸	里山の崩壊を考える
4	山岸	生物多様性と外来種
5	平児	日本と世界の農業事情
6	平児	食卓から食料輸入大国・日本を考える
7	平児	中山間地農業を考える
8	平児	過疎高齢化と集落機能

回	担当	タイトル
9	小原	食の安全
10	小原	食と健康
11	田村	地球温暖化の現状
12	田村	微生物と地球温暖化，温室効果ガスの削減
13	井内経済	自然エネルギーを考える
14	山中理工	原子力エネルギーの是非
15	山中理工	太陽光発電の現状と課題

2017/12/21 8

9

基軸科目の問題点

- 知識の詰め込み　VS　アクティブラーニング
  というジレンマが常にある.
- 新１年生にとっては刺激的な講義内容
  １年生もいろいろ考えてくれていると期待している.
- 農業や食料問題について認識を改め，農学部の中で今後４年間何を学んでゆくのか考えてもらう.
- 360人の学生を相手にアクティブラーニング型の授業を行うことは物理的に厳しい.
- 当初の基軸科目の設計では，講義担当者が同じ講義を複数のクラス（学科）で行うことを想定してが，教員が忙しいので，時間的に厳しい.

2017/12/21 9

10

ここでちょっと寄り道

- ３年生ゼミナールでのアクティブラーニング（？）
- 専攻生を４人×３班もしくは４班に分ける.
- 与えられた課題について，２週間，インターネットを中心に調べ，班の全員でパワーポイントにまとめる.
- ３週目にパワーポイントを使って，全員で発表する.
- このパターンで４回，テーマを変えて実施している.
- 毎回，班員の構成を入れ替え，班長も変え，必ず１回は班長を体験させる.

この形式によるゼミナールでの収穫

- 専攻生がお互いに非常に親密になる.
- 前期まで非常に引っ込み思案で，発達障害を疑っていた学生でも，人前できちんと喋れるようになった.

2017/12/21 10

11

農学部の基軸科目
今後の改善点（目論見）

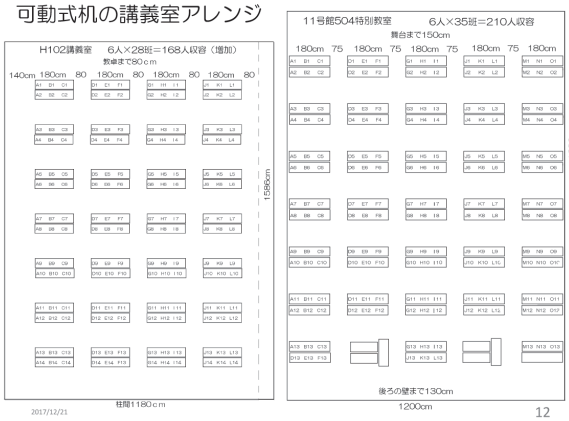
- アクティブラーニング型授業を実現するとしたら.

1. （可動式の）講義室を2室（もしくは3室）用意
   学生を180人，もしくは120人ずつに分散
2. 各講義室に責任教員を1名もしくは数名を配置
3. 各講義室を遠隔授業ができる回線で結ぶ
4. 1つの講義室で講義担当教員が講義
   他の講義室ではスクリーンに講義担当教員を投影
   （もしくは全ての講義室でビデオを流す）
5. 講義室ごとに学生がグループ討論を行う
   講義室ごとに代表学生に発表をさせる

2017/12/21 11

12

可動式机の講義室アレンジ



2017/12/21 12

1

第6回FD学習会

「学生の主体的な学びを促進する
アクティブ・ラーニング

－外国語学部の「基軸科目」の実践－」

「現代に生きる」（月曜日・５時間目）

担当教員：1．アーナンダ　クマーラ　（コーディネータ）（外国語学部）
2．大野　栄治　教授　（都市情報学部）3．岩井 眞實　教授　（外国語学部）

2

「現代に生きる」講義の運営方法・成績評価方法に関して

実施日・形式：後期、月曜日５限、計15回、3名の教員が担当

運営方法について
- コーディネータ：クマーラ
- 運営形式：連続型　（☞　各担当者が、５回にわたり連続的に講義を担当）
  - １クマーラ：１，２，３，４，５回目
  - ２大野先生：６，７，８，９，１０回目
  - ３岩井先生：１１，１２，１３，１４，１５回目

3

（B）成績評価について

- 原則：担当者が、各自の担当分の評価を行う。
- 基準：
  - ◘授業態度（出席状況を考慮することは可能）（クマーラ：40点）
  - ◘小テスト、レポート、試験など（回数は、担当者にお任せする）を考慮し、総合判定を行う（クマーラ：60点）
- 備考：3名担当の授業運営形式から考え、定期試験は行わなく、学生の評価は、担当授業内で行う。

4

（C）具体的な運営方法

- 授業態度（出席状況を考慮することは可能）。
- 各担当者が、適時、小テスト、レポート、試験などを行う。
- 各５回目終了時、受講生の受講状況をもとに成績の総合判定を行う（１００点満点）（方法は担当者に任せる）。
- 成績評価済のリストをコーディネータへ提出。
- コーディネータは、１５回目終了時点で最終評価（３００点満点、単純平均）。
- ボーダーラインの学生がいた場合はコーディネータが判断する。判断が困難な場合、大野教授・岩井教授と相談してから決定。
- 全体のまとめ（コーディネート）はクマーラが行う。
- 上記以外のことについても審議が必要な場合、担当の先生方との相談の上で決定。

5

授業の概要と目的

- 現代について正しく理解することは、将来の自分のあり方を見出す手がかりとなります。
- 本講義は、社会科学、人文科学、自然科学の分野における現代社会が直面している様々な課題について学びながら、
  - ◘学習への動機づけを促し、
  - ◘自ら学ぶ意欲を醸成するとともに、
  - ◘外国語学部の教養教育の導入として、基礎的なものごとの捉え方や考え方を身につけ、
  - ◘主体的な学びの礎を養うことを目的とします。

6

到達目標

現代社会における様々な課題の中から
- ①「グローバル化・国際化」（クマーラ）
- ②「地球温暖化」（大野）
- ③「日本人・その文化の特色」（岩井）

３つの課題を選び、それらの課題に対する理解を高めることを目標とします。

7

クマーラ担当の5回分の講義

		【項目欄】	【内容欄】
授業計画	1	「グローバル化時代について」	現在、ヒト・モノ・金・情報は、国という境目を越えて活発的に動いている時代です。本講義では、それぞれの動きは、我々の生活にどのような影響を与えるのかを分析します。
	2	「若者の国際協力活動について考える」	日本は、開発途上国の発展のために様々な貢献を行っている中、日本の若者の活躍も大いに期待されている部分があります。本講義では、青年海外協力隊の活動に焦点を当て、若者の活躍ぶりに対する理解を深めます。
	3	「国際協力とNPO活動」	日本政府は開発途上国の様々な課題を解決するために協力を行っている中、民間人の活動も大きな貢献を行っています。本講義では、NPOやNGOなどの民間団体の活動に焦点を当て、我々一人一人が世界の発展のためのどのように貢献することができるのかについて考えます。
	4	「超国家時代の企業活動について」	先進国の企業は、他の先進国だけでなく、開発途上国にまで、生産やマーケティング活動を拡大しています。本講義では、アジアに焦点を当て、超国家企業の活動を理解するとともに、海外における日系企業の活動について学びます。
	5	「インフラストラクチャーと住民生活について考える」	社会基盤と訳されるインフラストラクチャーは、実は、道路や電機などの目に見える側面のほかにも広がります。この講義では、その詳細について学びます。

8

6～10回目：大野　栄治先生　担当（次の報告）

6	地球温暖化のメカニズム	地球温暖化のメカニズムを解説するとともに、地球温暖化の将来予測を紹介します。
7	地球温暖化の影響（１）	緩和策（排出削減と吸収増大）と適応策（撤退、順応、防護）の考え方を解説します。
8	地球温暖化の影響（２）	地球温暖化による自然災害（台風、洪水）への影響を解説します。
9	地球温暖化の影響（３）	地球温暖化による健康被害（熱中症、熱ストレス）への影響を解説します。
10	地球温暖化の対応戦略	緩和策（排出削減と吸収増大）と適応策（撤退、順応、防護）の考え方を解説します。

9

11～15回目：岩井 眞實先生　担当（資料を参照）

11	演技する人間	人間は日常を演技し、その演技をTPOによって使い分ける動物であることを紹介します。
12	演技のアプローチ	演技の２つのアプローチ、「感情移入型」と「他者表現型」について学習します。
13	『型』の文化	「他者表現型」の演技に代表される日本独特の「型」の文化について学びます。
14	民俗と日本人	日本古来の民俗・習俗と現代日本の生活との関係について学びます。
15	娯楽と日本人	日本人が享受してきた娯楽、特に演劇・映画・テレビの歴史について学びます。

10

授業運営のポイント・工夫（クマーラ担当分）

資料：WEBCLASS上　OR　印刷・配布（毎回）

これからの学びに関して

形式：PP資料提示、課題に関する説明、学生とのキャッティボール（Q&A)

Q&Aの進め方：自発的に挙手してもらう　&・OR　Randomに学生を当てる（指名）

11

Q&Aにおける課題と工夫、解決策

課題：1年生の1学期の日本人学生自発的な発言に慣れていない

解決策・工夫 ⇒ アクティブラーニング グループワークを導入

☞単純な課題ー＞順にレベルを上げる

☞答えは間違っていても批判しない

☞正解と考えられることについて議論する

※　共通認識をもたらせるための工夫

12

グループワークなどでの工夫：発表者決定

- 自薦他薦OK。じゃんけんの場合もあるが、負けた人ではなく、勝った人が発表するルール　☞笑！
- 発言にチャンスを与えてもらうことの重要性も授業内で説明（グローバル化社会においては、文化・価値観の異なった人との交流【＝仕事】の時に大事である！）ー＞発表できるのは、自分にとって良いチャンスである！
- Q&A時間の充実化のための工夫

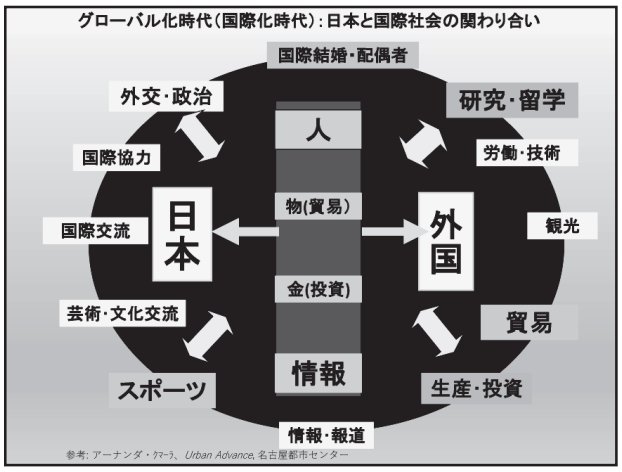
13

例：グローバル化時代の特徴はなに？

- グループワークー＞4分間で話し合いー＞代表者が発表ー＞発表者はグループで決定すること！

発表の後、PP資料を利用しながらなど、説明、解釈・・

14



15

グローバル化時代の生き方、活かし方

特徴：「人」、「物」、「金」、「情報」の自由移動

↓

時間、距離、場所（国）：無関係？

↓

重要：外国との協力関係、理解

↓

注意：競争相手は国内だけでない！

↓

私たちへの教訓は？必要な準備は？

16

テスト問題（レポート・最終回。クマーラ担当分）

- 第１～５回目までの授業で取り上げた課題のうち、最も関心を持った課題を中心にレポートを作成（下記を参照）
- 様式：A４判用紙、手書き。
- 提出場所：DN５０１号室、レターボックス
- 提出期限：２０１７年５月１７日（水曜日、１８：００）（厳守）

1. 自分が最も関心を持った課題は何ですか？
2. その理由は？
3. 選んだ課題について、講義で紹介した内容を踏まえながら、自分はどのように理解したのかを述べてください。（８００字程度）
4. 外国語学部在籍中で理解を深めたいと考えている他のテーマ、分野、ご要望などがあればお書きください。

17

岩井先生が担当分について
「日常を演技する」

- 学生は与えられたテーマについて5～6人程度のグループで討議☞その結果を発表し合う（教師は特に特定の結論を求めはしません。）
- 宿題☞グループで討議したテーマについて1000～1200字のレポートの作成、次回授業日（月曜）の13時です。
- ※13時から授業（月曜5限）の始まる16時30分までに全員分の採点をし、授業中に口頭による講評とともに返却
- 成績評価☞レポート10点、授業への参加度5点、計15点満点を毎回の得点☞5回分75点＝＞100点満点になおして授業責任者のクマーラ先生に提出

18

11～15回のテーマ（岩井先生）

- 第11回：〔下図〕A～Dの人たちのうち、最も自由な魂を持っているのはどの人たちでしょう？　思うところを述べなさい。正解はありません。
- 第12回：イデオロギーと外見との間には相関関係があるでしょうか。思うところを述べなさい。
- 第13回：あなたは俳優です。台本には恋人が亡くなったという状況が書かれています。そしてあなたは“泣く”演技をしなければならなくなりました。どうやったら泣けるでしょう。
- 第14回：あなたの日常の演技は感情移入型ですか、他者表現型ですか。話し方やしぐさ、ファッションなど、様々な例を挙げて説明しなさい。
- 第15回：あなたの身のまわりにある「型」の文化について説明しなさい。思い当たらない人は、あなたの一家の正月前後の過ごし方を克明に書いてください。

1

1

第6回FD学習会
「学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニング」

外国語学部開講科目『現代に生きる』

大野栄治

概要：

① 授業概要
② 授業運営のポイント
③ 今後の課題

2

2

①授業概要

- 目標
  国際問題としての地球温暖化を取り上げ、
  国際協力の在り方を考えてもらう。
- 内容
  1. 地球温暖化のメカニズム
  2. 地球温暖化の影響（自然・生態系への影響）
  3. 地球温暖化の影響（自然災害への影響）
  4. 地球温暖化の影響（健康への影響）
  5. 地球温暖化の対応戦略

3

3

②授業運営のポイント

- 講義
  地球温暖化問題の原因、影響、対応を解説する。
- レポート
  毎回、講義終了10分前にレポート課題を提示し、
  レポート執筆のポイントを解説する。
  課題例）現状のままでは温暖化が進行することを前提として、温暖化を緩和するための国際協力について、各自の考えを400字程度で述べよ。
- コメント
  毎回、講義開始10分程度、前回レポートを論評する。
- 成績評価
  授業態度とレポート内容で評価する。

4

4

③今後の課題

- アクティブ・ラーニング
  現在、
  1）講義（教授⇒学生）
  ⇩
  2）レポート（学生⇒教授）
  ⇩
  3）コメント（教授⇒学生）
  で終わっている。

  今後、
  ディスカッション
  を実施したい。

第７回 FD 学習会実施報告

大学教育開発センター委員会は、平成30年３月９日（金）、天白キャンパス共通講義棟東 H204教室において、第７回 FD 学習会「学生の主体的な学びを促進するアクティブ･ラーニング－法学部･経営学部・都市情報学部の基軸科目実践例－」を開催しました。

本企画では、法学部の伊川正樹教授から法学部開講科目「名城進路講座－大志を抱け－」、「名城進路講座－考動力－」、経営学部の高山晃郎准教授からは経営学部開講科目「人間と環境」についての実践例の紹介があり、都市情報学部の森杉雅史教授からは、「都市情報学部カリキュラムへの基軸科目導入と課題」として、学部における基軸科目の現状や今後の展望を含めた話題提供がありました。企画を通じ、各学部が独自で行っているアクティブ・ラーニングの手法やねらい、運営方法、その成果や課題等について、学部を越えて共有する機会となりました。

1

第7回FD学習会
学生の主体的な学びを促進する
アクティブ・ラーニング

法学部基軸科目
名城進路講座―大志を抱け
名城進路講座―考動力

法学部HPにて内容公開
http://law.meijo-u.ac.jp/sikaku/sinrokoza.html

法学部教授　伊川　正樹

2

授業の概要・特徴（いずれも1年次開講科目）

- 講師は、各界で活躍する本学法学部卒業生
  - 先輩が後輩に本音を語る。
- 「大志」は、経験談に基づき、学生生活の過ごし方や人生に関するメッセージを送る。
  - 2011年度～（前期）
  - 火曜5限（受講生約100人）
- 「考動力」は、進路選択に向けた具体的な取組みに関するアドバイスを送る。
  - 2014年度～（後期）
  - 火曜5・6限（受講生30～40人）

3

開講の動機

- 「しょせん名城生だからムリ・・・」という学生の意識を変えたい。
- 名城出身で社会で活躍する先輩たちの姿を見せることで、「名城生でもやればできる」ことを証明したい。
- 挫折、紆余曲折を経て、成功に至るプロセスを示したい。

4

「大志を抱け」の概要（2017年度）

	明日	講師名	職　業	卒業年	タイトル
1	4/4	オリエンテーション	―	―	―
2	4/11	矢島　裕子	キャリアサポーター	1996・平成8	自分の人生をプロデュースしよう
3	4/18	三輪　貴哉	社会保険労務士	2006・平18	「時間は有限である」 ～何を決め、何を捨てるのか～
4	4/25	関野　恭子	敷島製パン株式会社	1991・平成3	高校生・大学生のワタシと今のワタシ ～実は、法学部卒業でした！
5	5/2	田村　喜彦	社会保険労務士・ 人財育成コンサルタント	1996・平成8	志（アンビシャス）をもってHappyに生きよう！ ～天職をつかむためにできること
6	5/9	青山　紀子	フリーアナウンサー・ 東海ラジオパーソナリティ	1990・ 平成2短大卒	まだ見ぬ自分の可能性を引き出す方法
7	5/16	古家　秀樹	行政書士・企業コンサルタント	1999・平成11	挫折からの脱却方法
8	5/23	先輩に聞く①	―	―	―
9	5/30	宮城　拓	司法書士	1996・平成8	自分らしく、情熱的に生きる
10	6/6	加藤　幹彦	名城大学常勤理事	1979・昭和54	先輩として伝えられること
11	6/13	網中　政機	名城大学名誉教授・元学長	―	名城大学のルーツと私と名城大学
12	6/20	伊川　正樹	名城大学法学部教授	1996・平成8	悩みのタネと視点の転換
13	6/27	太田　雅之	ヤマザキマザック株式会社	2008・平成20	過去を変える力
14	7/4	プレゼンテーション（準備）	―	―	―
15	7/11	プレゼンテーション（発表）・ 総まとめ・先輩に聞く②	―	―	―

5

「考動力」の概要（2017年度）

回	講義内容とタイトル	講　師
1	オリエンテーション 進路選択と進路決定、進路へ向けた計画的な取り組み	伊川 正樹
2・3	進路選択概論 失速しない人生を送るために　今から始める就職活動	会社員 （人事担当経験者）
4・5	自己分析と自己PR 自分を未来へ導こう　今すぐ役立つ自己分析と自己PR	キャリアサポーター
6・7	コミュニケーション能力 企業からみた学生　コミュニケーション能力とは	社会保険労務士 人財育成コンサルタント
8・9	情報収集・分析法 企業研究の方法・情報収集法　新聞の読み方	会社員
10・11	業界研究・民間企業編 「民間企業のしごと」営業職ってどんな仕事？起業	会社員 企業経営者
12・13	業界研究・公務員編 「公務員の魅力」役所と私たちの生活とのかかわり	県庁・市役所職員 警察官
14	業界研究・士業編 「○○士の日常」法律を活かした仕事の実態	弁護士・司法書士・税理士・社会保険労務士・行政書士・宅地建物取引士
15	総まとめ　進路選択に向けた意識は変わりましたか？	―

6

アクティブ・ラーニング手法
― 大志を抱け

講師のメッセージを鵜呑みにする必要はないが、自分にとって参考にできる内容を探すこと

- 出席カードに、授業の感想や評価を記入（毎回）
- 単位認定要件として、講師が出すレポートを3回以上＋共通レポート
- 毎回の講義につき、質疑応答（15～20分程度）、質問カードの提出
- 「印象に残った講師のことば・エピソード等」に関する学生によるプレゼンテーション

講演の寄せ集め
→ ALの要素

7

アクティブ・ラーニング手法 ― 考動力

心構え・考え方
＋
具体的ノウハウ

- 各講師による座学＋各種ワーク
- 最終レポート：進路選択に対する意識がどのように変化したか

- 固定観念の除去
- 考え方・情報の具体化

8

効果：「大志」（学生のレポートから）

- 大学生活に対する目的意識の芽生え

「私は、これからの大学生活に対しての意識や目標を以前より明確にもてるようになった。以前であればただ漠然と勉強や部活をこなしていって、4年生になって就職活動をしてそれからの人生を歩んでいくということになっていたと思う。しかし、この講演を聞いて、明確な目標や大学での活動に対しての意識の持ち方を変えられたと確信している。」

9

効果：「考動力」（学生のレポートから）

- 進路選択に対する気づき・問題意識の具体化・視野の拡大
  - 「今まで私は漠然と"人を笑顔にする仕事・人の役に立つ仕事"がしたいと思っていた。ところがこの授業を受けて、全ての仕事が人を笑顔にしたり、役に立っているということに気づいた。」
  - 「自分はこの授業を受けるまでは公務員だけを目指していて、公務員の先輩方の話を聞けると思ってこの授業を履修しました。しかし、企業で働く方達の話を聞いていると、とても幅広い職種があり、営業職の内容ややりがいなどを教えてもらい、民間企業にも興味を持ちました。」
  - 「自分は、今まではただ安定した職業である公務員になりたいという思いだったが、公務員についての説明を聴いて、実際行っている業務内容や働き方について詳しく教えてくださり、公務員のイメージをより膨らませることができた。」

10

課題（両授業共通）

- 「単位取得 ＞ 学び」という受講生の意識
- 芽生えた意識の継続 → 具体的な結果にどうつながっているか、どうつなげていくか？
- 受講者数、特に上級学年の受講者数の少なさ

11

課題の克服に向けた取り組み

- 講師による検討会（年2回：3月・9月）
  - 3月3日検討会テーマ
    - 「アクティブ・ラーニングの導入」
    - 「学生時代に身に付けておきたい社会人基礎力」
- 法学部HP・懇談会報での紹介
- 新入生オリエンテーション・在学生ガイダンスでの講座紹介DVDの上映

12

今後の具体的課題

- 双方向性・学生による授業参加機会の拡大
  - 集中力の持続・内容の落とし込み
- 目的意識・自分を客観視する意識の養成
- 受講者数の増加と授業運営のあり方
- 講師のすそ野の拡大と意識の共有化

1

第7回　名城大学FD学習会

事例報告
経営学部開講科目「人間と環境」

経営学部
高山　晃郎

2

授業の概要

●「21世紀型市民」として生きるために必要な基盤的教養の養成
●受講者数は333名（今年度）
●1年生の受講を念頭に置いている
：新入生オリエンテーションで、この科目を履修するように指導している
●前期木曜日3限にS301教室で実施
●授業の最後15～20分間でレポートを作成
：スキャネットシートを利用
●授業担当は、経営学部14人の教員により実施（今年度）

2

3

授業担当

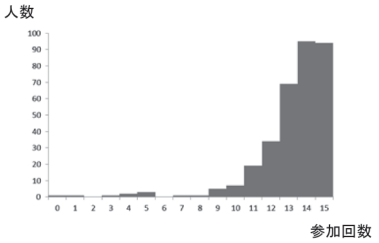
回	系列	2017年度担当者	担当日
1	（前年度学部長）	瀬川　新一	4/6
2	マネジメント	岸川　典昭	4/13
3		橋場　俊展	4/20
4		田中　武憲	4/27
5	会計ファイナンス	東田　明	5/11
6		高山　晃郎	5/18
7		柳田　純也	5/25
8	マーケティング	大崎　孝徳	6/1
9		澤田　慎治	6/ 8
10	スポーツ健康科学	横野　均	6/15
11	法律	村上　広一	6/22
12	語学	堀畑　正樹	6/29
13	情報	堀川　新吾	7/6
14	キャリア形成	五十畑　浩平	7/13
15	（前年度学部長）	瀬川　新一	7/20

●各系列から、毎年、担当者を選出
●系列によっては、毎年、同じ教員が担当

3

4

授業への参加状況



●授業に多くの学生が参加している

4

5

授業の流れ（授業前後も含めて）

●基軸科目取り纏め担当者の事前準備
：運営マニュアルの作成と配布
：シラバス作成
：スキャネットシートの注文等
：スキャネットシートの集計用ソフト「らく点先生2」の使用準備

●各担当教員の業務内容（次のスライド）

●各回終了後の取り纏め担当者の業務
：採点の集計（「らく点先生2」の利用とエクセルによる得点集計）
：成績評価（入力等）

5

6

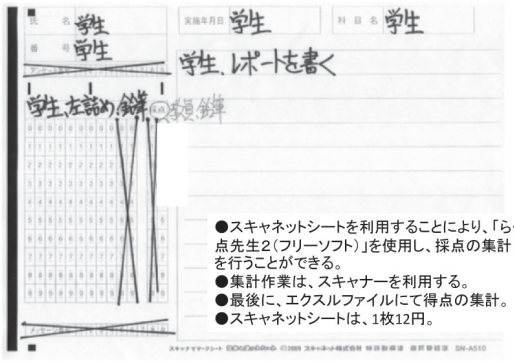
各担当教員の業務内容

①スキャネットシートは、講義担当予定日の1週間前に先生方の資料室ボックスに入れておきます。
②講義担当者は講義当日、このスキャネットシートを教室に持参します。
③講義を60分程度行い、その後、レポート課題を黒板に板書し、学生にその場でレポートを書かせます。
④スキャネットシートを学生に配布します。次ページの記入例に「学生」と記入している部分については、学生に直接に記入させます。
⑤授業終了までにスキャネットシートを回収します。
⑥スキャネットシートの採点をお願いします。採点後、「採点」欄にマークをお願いします。
⑦採点したスキャネットシートを資料室の友田さんにお渡しください。もしくは教授会の時にでも高山まで直接にお渡しください。

6

7

スキャネットシートとは？



●スキャネットシートを利用することにより、「らく点先生2（フリーソフト）」を使用し、採点の集計を行うことができる。
●集計作業は、スキャナーを利用する。
●最後に、エクスルファイルにて得点の集計。
●スキャネットシートは、1枚12円。

7

8

授業内容と学生のレポート（抜粋）

1.　ガイダンス 担当：瀬川　新一
：経営学部を選んだ理由を質問

2. 企業活動と私たちの生活 担当：橋場　俊展
「私の今までのライフスタイルを変えた印象がある製品はiPod touchです。（中略）iPod購入以来友達との輪が広がっただけではなく、気になったことをすぐに調べられるようになって世界が変わったと思いました。」

3. 貿易と日本経済 担当：田中　武憲
「私はB案を支持します。全て外国にばかり頼った姿勢でいると日本の伝統として守ってきたものや日本の良い面が失われてしまい、自由貿易のメリットの方が経済的にはいいと思いますが、日本自体のものを大切にすべきだと思うからです。」

4. 日本的型営と経済環境 担当：岸川　典昭
「終身雇用は良いと思う。自分が決めて努力して入った会社に最後まで働きたいと考えている人は多くいると思うからです。」

5. 会計と社会 担当：東田　明
「間違っているかもしれませんが、A社は目標を何%達成したということを示していますが、B社は前の年から何%改善できたかという示し方をしていると思ったので、B社のほうが私は分かりやすくて良いと思いました。」（報告者加筆修正）

8

9

授業内容と学生のレポート（抜粋）

6. 生活と金融 担当：高山　晃郎
「銀行がないと、起業するときの資金を集めることができないので、会社がつくれません。そうすると働ける場所が増えなくて、産業が活性化しなくなってしまうと思いました。」

7. 国家財政と私たちの生活 担当：柳田　純也
「私はライフプランを考える意義はお金を計画的に使うためだと思います。」

8. マーケティングと社会貢献 担当：大崎　孝徳
「標準化戦略は望ましくないと考える。理由は、現地の人のニーズに合わせて売った方が売れゆきが変わると考えるからである。」

9. 商品の周辺環境 担当：澤田　慎治
「私はステム教育やデザインとテクノロジーの内容は必要だと思いました。このようなことを学ぶことにより、自分の発想力や創造力が上がり、企業などに就いたときに様々な視点から物事を考えることができると思いました。」

10. 生活とからだ 担当：槇野　均
「今、私達は一番体力がある時期を生活しているので、その大切な時期にしっかりとした生活習慣を送ることが大切だと思った。」

9

10

授業内容と学生のレポート（抜粋）

11. ビジネス常識としての法律 担当：村上　広一
「何か問題が起こる前に、規制（法律）を作ってしまうことで、問題が起こる可能性は低くなることは間違いないが、経営の幅が広がりにくくなるのではないかと思った。」

12. フランス語はどういう言語か 担当：堀畑　正樹
「語学はやるべきであると思う。なぜなら語学で人々はつながっているし、語学によって、人と人との関係を築けていけると思うからである。」

13. コトバ、コミュニケーション、そしてメディア 担当：堀川　新吾
「LINEは、人との関わりが簡単にとれるため自分のもつ価値ある情報を他の人と共有することができる。文字や記号として目に見える形で相手に伝えることができる。」

14. キャリア形成―夢とキャリアの関係性― 担当：五十畑　浩平
「デメリットばかりを考えず、ポジティブに挑戦をすることで大学四年間を自分が理想としていた形になるように行動していきたいと思う。」

15. まとめ 担当：瀬川　新一
：最も印象に残った講義について質問

10

11

専門分野の内訳

●当日のパワーポイントのスライドに「専門分野の内訳」に関するデータを掲載します。

●会計ファイナンスに苦手意識のある学生が多い

11

12

専門分野と教養分野の比較

●当日のパワーポイントのスライドに「専門分野と教養分野の比較」に関するデータを掲載します。

●教養に苦手意識のある学生が多い

12

1

都市情報学部カリキュラムへの基軸科目導入と課題

名城大学　都市情報学　　教授
森杉　雅史

2

アクティブラーニングの定義
～Wikipedia～

- **アクティブ・ラーニング**は学修者が**能動的**に学習に取り組む学習法の総称である。これにより学習内容を確かに修得しつつ、**座学**中心の一方的教授方法では身につくことの少なかった21世紀型スキルをはじめとする汎用的能力、ひいては新しい学力観に基づくような「**自らが学ぶ力**」が養われることが期待されている。
- 技術や社会環境が急激に変化し、教育機関で学んだ内容がすぐに陳腐化してしまう現代の知識基盤社会において、将来にわたって必要なスキルを身につけさせる学習法として注目され、国内外で様々なアクティブ・ラーニングが実施されている。その多くは**発見学習、問題解決学習（課題解決型学習）、体験学習、調査学習、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等**を有効に取り入れており、このような授業は**アクティブラーニング型授業**とよばれている。

3

アクティブラーニングの定義
～名城大学・シラバス作成手引きより～

アクティブ・ラーニングの形態

消極的

宿題：教員が学修者に対し、一定の学修、作業課題を正規の授業時間以外（授業外学修時間）で行わせ、その結果を定められた期日までに提出するように義務付けたものを指します。

理解度の確認：授業内において、その授業の学修内容や学修方法、自分自身の学修状況などを想起し、ノートやコメントシートに記入を行うことや、小テストや練習問題、授業内レポートなどの実施を指します。

積極的

ペアワーク：学修者が課題に対して、ペアで相互協力を行いながら学修を進めていく共同学修を指します。

グループワーク：集団に参加する者が、相互に影響しあう教育的過程であり、集団過程や集団における相互作用など、学修の集団的な側面を強調する学修形態を指します。

ディスカッション：集団成員の参加によって、課題について話し合う学修を指します。

ディベート：二組の個人またはグループが一定のルールに従って一つの論題について論争することを指します。

プレゼンテーション：学修者が他の人々を対象にして、言語的・身体的表現活動（模造紙や写真、OHPやビデオ、コンピューターなどのメディアを使った口頭発表のほかにも様々な形態がある。）を行うことを指します。

フィールドワーク：ある目的を持ち、一定のフィールドにおいて観察・調査をしたり、資料を直接収集したりする調査活動を指します。（図書館やICTを使った資料収集なども含みます。）

PBL：Problem-Based Learning（問題解決型）と呼ばれる少人数グループによる問題解決型学修方法と、Project-Based Learning（プロジェクト型）と呼ばれる少人数グループによるプロジェクト型学修方法を指します。

4

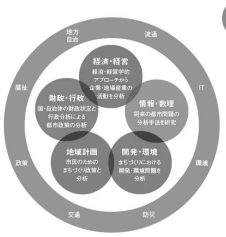
都市情報学部の基軸科目への対応

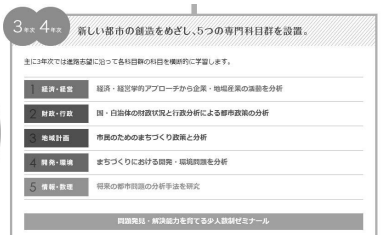
- 現時点では**考案中**。当面、2年生の配当講義（選択必修科目）である**『サービスサイエンス特別講義ⅠとⅡ』**の改組に際して、実験的にアクティブラーニング要素の導入を図る。
- **『人間と環境』**は森杉が担当する地球温暖化問題総論の講義。当面基軸科目として再編予定なし。

⇒これは元々、人間学部**『現代を生きる』**の原案（教養教育検討委員会において宮嶋先生のご提案）からきている。各学部は全共科目である『人間と環境』を共通の基軸科目として設定し、参加メンバーが構成するユニットは、次々と各学部を渡り歩いていく、という。

5

文理融合領域である都市情報学部





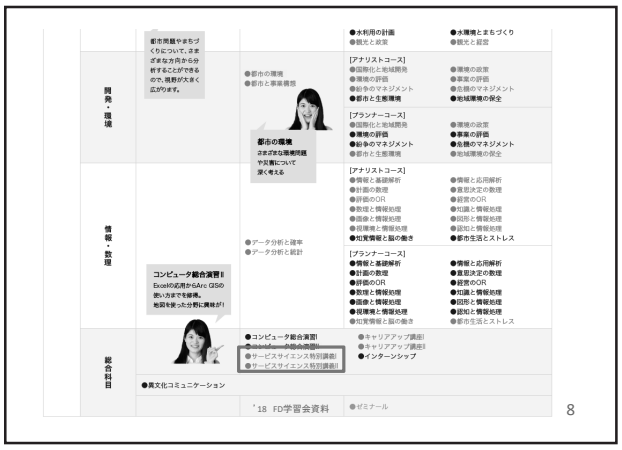
6

選択科目
～様々な都市問題を情報処理技術を駆使して解決できる人材づくり～

- **経済・経営**
  - ●都市の経済　●企業の経営　●貨幣の経済　●都市と金融
  - ●事業のマネジメント　●企業の経済　●企業の会計　●経済の政策
  - ●都市と社会　●経済と地理
- **財政・行政**
  - ●都市と行政　●都市と財政　●地方と財政　●都市と自治
  - ●都市と社会保障　●都市と福祉　●公共の政策　●都市と公企業
  - ●都市と国際関係　●国際社会と政治
- **地域計画**
  - ●都市の計画　●都市のデザイン　●都市の再生　●防災とまちづくり
  - ●交通の計画　●交通とまちづくり　●水利用の計画　●水環境とまちづくり
  - ●観光と政策　●観光と経営
- **開発・環境**
  - ●都市の環境　●国際化と地域開発　●都市と事業構想　●環境の政策
  - ●環境の評価　●事業の評価　●都市と生態環境　●地域環境の保全
  - ●紛争のマネジメント　●危機のマネジメント
- **情報・数理**
  - ●データ分析と確率　●データ分析と統計　●情報と基礎解析　●情報と応用解析
  - ●計画の数理　●意思決定の数理　●数理と情報処理　●知識と情報処理
  - ●画像と情報処理　●図形と情報処理　●視環境と情報処理　●認知と情報処理
  - ●評価のOR　●経営のOR　●知覚情報と脳の働き　●都市生活とストレス

7

8



9

サービスサイエンス特別講義Ⅰ

開講日	提出期	担当教員	講義内容	成績評価
4月6日	第1回	大野先生	1）授業の概要を説明する。2）安全性志向の行政サービスの事例を取り上げ、その計画と評価を解説する。	レポート
4月13日	第2回	若林先生	(1) サービスサイエンスとは未定義の分野であることの理解 (2) アクティブラーニング方式によるサービスサイエンスの あり方についての討議 (3) 相手の立場に立つことの重要性を理解させる	レポート
4月20日	第3回	鍵田先生	サービスサイエンスとは何か？－主観的学問の可能性と必要性	レポート（講義時間中に回答）
4月27日	第4回	鈴木先生	オペレーションズ・リサーチ(OR)	レポート
5月11日	第5回	鈴木先生	オペレーションズ・リサーチ(OR)	レポート
5月18日	第6回	柄谷先生	サービス・マネジメント、リスク・コミュニケーション、水害防災、防災・減災、音動・共動・公動	レポート
5月25日	第7回	水野先生	サービスの価値の計測 【官能検査、感性工学 ―対比法、Visual Analog Scaling】 一般に、サービスの計測は重要であるにもかかわらず困難である。官能検査と理化学的検査について紹介した後、感性評価について述べ、サービスの価値の計測手法について実習する。	ミニテスト
6月1日	第8回	福島先生	サービスサイエンスと空間環境活用型モデル サービスサイエンスの概念的枠組みを示したうえで、サービス価値と経験価値の観点から、空間環境活用型サービスモデルについて論じる。	レポート
6月8日	第9回	手嶋先生	金融サービス 銀行経営とゲーム理論 フィンテック	小レポート
6月15日	第10回	酒井先生	患者が病院に期待する医療サービス	確認テスト
6月22日	第11回	酒井先生	患者が病院に期待する医療サービス	確認テスト
6月29日	第12回	森杉先生	エネルギー供給の視点における効率性、リスク、そしてサービスサイエンス	ミニレポート
7月6日	第13回	森杉先生	京都議定書からパリ協定まで－日独の理念と数値目標達成可能性－	ミニレポート
7月13日	第14回	森杉先生	再生可能エネルギー、FIT＆FIP、スマートグリッドシティー－日独の挑戦－	ミニレポート
7月20日	第15回	大野先生	1）利便性志向の行政サービスの事例を取り上げ、その計画と評価を解説する。2）授業の総括を行う。	レポート

'18 FD学習会資料
9

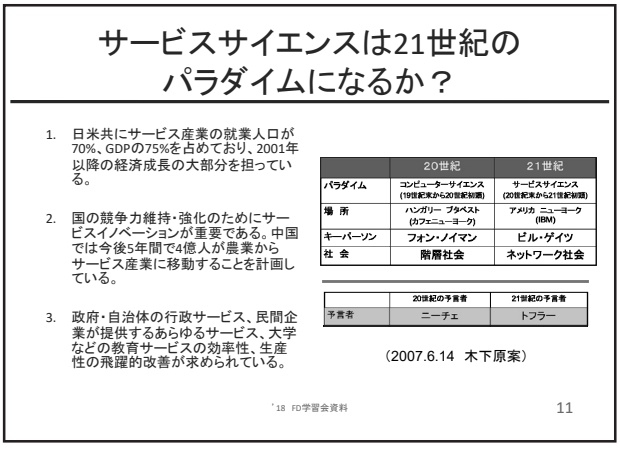
10

サービスサイエンス特別講義Ⅱ

開講日	提出期	担当教員	講義内容	成績評価
9月14日	第1回	大野先生	1）授業の概要を説明する。2）快適性志向の行政サービスの事例を取り上げ、その計画と評価を解説する。	レポート
9月21日	第2回	雑賀先生	サービスの定義、特徴、サービス産業の種類、生産性	小テスト
9月28日	第3回	雑賀先生	サービスの定義、特徴、サービス産業の種類、生産性	小テスト
10月5日	第4回	鍵田先生	サービスサイエンスの事例-地方創生と地域包括ケア	レポート（講義時間中に回答）
10月12日	第5回	手嶋先生	金融サービス 銀行経営とゲーム理論 フィンテック	小レポート
10月19日	第6回	酒井先生	患者が病院に期待する医療サービス	確認テスト
10月26日	第7回	酒井先生	患者が病院に期待する医療サービス	確認テスト
11月9日	第8回	杉浦(真)先生	サービス経済、サービス業	レポート
11月16日	第9回	水野先生	サービスの価値の計測 【官能検査、感性工学 ―対比法、Visual Analog Scaling】 一般に、サービスの計測は重要であるにもかかわらず困難である。官能検査と理化学的検査について紹介した後、感性評価について述べ、サービスの価値の計測手法について実習する。	ミニテスト
11月23日	第10回	水野先生	ブロックチェーン技術とスマートコントラクト 【ブロックチェーン、ハッシュ関数、公開鍵暗号、スマートコントラクト】 契約を自動執行するITサービスであるスマートコントラクトと、そのインフラであるブロックチェーン技術を紹介する。スマートコントラクトのビジネスとしての特徴を、損害査定に注目して解説する。	ミニテスト
11月30日	第10回	鈴木先生	オペレーションズ・リサーチ(OR)	レポート
12月7日	第11回	宮本先生	子育て支援政策、中央政府、地方政府	レポート
12月14日	第13回	杉浦(伸)先生	情報サービスと情報倫理サービスサイエンスと数理計画学(OR, Operations Resear	課題レポート等の提出
12月21日	第14回	杉浦(伸)先生	情報サービスと情報倫理サービスサイエンスと数理計画学(OR, Operations Resear	課題レポート等の提出
1月11日	第15回	大野先生	1）持続可能性志向の行政サービスの事例を取り上げ、その計画と評価を解説する。2）授業の総括を行う。	レポート

'18 FD学習会資料
10

11



サービスサイエンスは21世紀のパラダイムになるか？

1. 日米共にサービス産業の就業人口が70%、GDPの75%を占めており、2001年以降の経済成長の大部分を担っている。
2. 国の競争力維持・強化のためにサービスイノベーションが重要である。中国では今後5年間で4億人が農業からサービス産業に移動することを計画している。
3. 政府・自治体の行政サービス、民間企業が提供するあらゆるサービス、大学などの教育サービスの効率性、生産性の飛躍的改善が求められている。

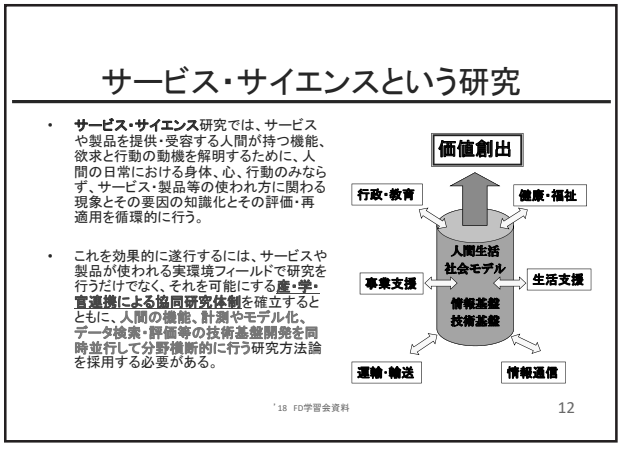
	20世紀	21世紀
パラダイム	コンピューターサイエンス（19世紀末から20世紀初頭）	サービスサイエンス（20世紀末から21世紀初頭）
場 所	ハンガリー ブダペスト（カフェニューヨーク）	アメリカ ニューヨーク（IBM）
キーパーソン	フォン・ノイマン	ビル・ゲイツ
社 会	階層社会	ネットワーク社会

	20世紀の予言者	21世紀の予言者
予言者	ニーチェ	トフラー

（2007.6.14 木下原案）

'18 FD学習会資料
11

12



サービス・サイエンスという研究

- **サービス・サイエンス**研究では、サービスや製品を提供・受容する人間が持つ機能、欲求と行動の動機を解明するために、人間の日常における身体、心、行動のみならず、サービス・製品等の使われ方に関わる現象とその要因の知識化とその評価・再適用を循環的に行う。
- これを効果的に遂行するには、サービスや製品が使われる実環境フィールドで研究を行うだけでなく、それを可能にする**産・学・官連機による協同研究体制**を確立するとともに、**人間の機能、計測やモデル化、データ検索・評価等の技術基盤開発を同時並行して分野横断的に行う**研究方法論を採用する必要がある。

'18 FD学習会資料
12

13

公開講座

～民間企業や団体、行政とのコミュニケーション～

Extension Lectures and Seminars
-Many participants from local government, university and colleges, private sectors and NPO, NGOs.
-Intense discussions were held to try to open new academic fields.

13

14

可児キャンパス

'18 FD学習会資料

14

15

名城大学 連携協賛 ECO CAMPUS PROGRAM 親子で里山体験 第2回8月1日（土）

-COP-CBD 10 will be held in Nagoya city in 2010
-里山 means to make forest and mountain vigorous, familiar with human and other living natures

'18 FD学習会資料

15

16

'18 FD学習会資料

16

17

『都市情報学概論Ⅰ・Ⅱ』（1年次必修）

＜授業の概要と目的＞

この講義は，都市情報学部で開設されているすべての科目の基礎になる部分である。講義内容は多岐にわたるが、各担当者は、下記の「授業の要旨」で示されているように，現在取り組んでいる**研究テーマ**の内容をできるだけ分かり易く説明し，また，**授業の終わりに毎回学生諸君から質問を受け，それに答える形で学生諸君の都市問題に対する関心をできるだけ引き出すように努める**.

毎回担当者が変わり，色々な切り口から**都市問題**を論じることになるが、全体を通して理解したとき、都市問題には多様な側面があり、1つの視点から問題を見ているだけでは解決することができないことに気づくに違いない.

＜H29実施要領＞

前期担当：

鈴木・杉浦（真）・島田・赤木・稲葉・宇野・若林・張・大野・小池・岡林・酒井・杉浦（伸）・水野

後期担当：

雑賀・宮本・鎌田・手嶋・昇・柄谷・福島・海道・森杉・森・長谷川・亀井・西野・山谷

⇒**オムニバス方式**で**消極的アクティブラーニング方式**ではある。それぞれの研究者が一コマずつ担当し、かみ砕いて自身の研究テーマを解説。1年次の学生に、我々が確立を目指す **『都市情報学』『サービスサイエンス』**について、具体的なイメージを持ってもらうことが目的。

'18 FD学習会資料

17

18

『都市情報学概論Ⅰ・Ⅱ』⇒座学

一口に**"都市情報学"**と言っても、その学問領域は広く、文系・理系の枠に留まりません。そこで、1年次に**『都市情報学概論Ⅰ・Ⅱ』**を開講し、今後4年間の学びや研究テーマを紹介していきます。授業は都市情報学部の全教員が**オムニバス形式**で担当。都市情報学の学びの広さに触れることができます。

主なテーマと内容（2016年度開講予定）

都市情報学概論Ⅰ

サスティナビリティって何？／都市問題対する情報処理的アプローチ（ウェブプログラミング）／水と都市生活のかかわり／都市交通計画の重要性／中央政府と地方政府／高齢社会における地域補助、在宅医療システムの有効性の検証

都市情報学概論ⅠⅠ

地球温暖化問題に対する都市情報学的アプローチ／災害に強い都市づくり／歩けるまちづくり／企業経営と会計情報の重要性／デジタルテクノロジーのための数学／医療情報システムの役割と技術

'18 FD学習会資料

18

19

19

20

人間学部　基軸科目　『現代に生きる』

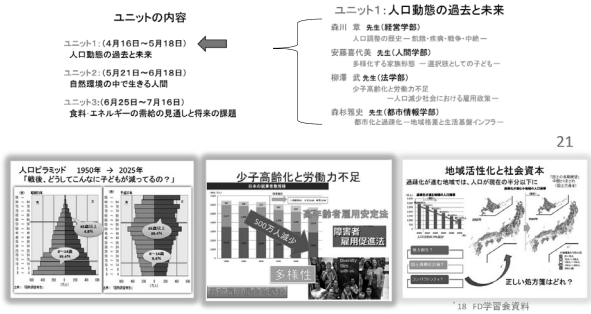
⇒杉浦真一郎先生、宮本由紀先生、森龍太先生が都市から出向

'18 FD学習会資料　20

21

人間学部　基軸科目　『現代に生きる』

⇒2015年度、森杉も参加



21

'18 FD学習会資料

22

『サービスサイエンス特別講義ⅠとⅡ』のお手本は『現代に生きる』

- 現在、座学形式にある講義は受講人数が多く、その規模で人間学部の**『現代を生きる』**を超える**積極的アクティブラーニング方式**の導入方法は考えられない。間違いなく、我々のお手本になる。

ハーバード白熱教室のように、毎回担当教員がネタを振る。考え方の選択肢を2－3に集約する。**グループワーク**で学生に考え意見を集約させ、**プレゼン**させ、教員あるいは学生間で**ディベート**する。

- 融合領域である都市情報では、専門領域の多様性と教員の人数（26名の専任+特任助手2名）を生かして、自力で**オムニバス方式**を展開できる。あとは、どのようにして**積極的アクティブラーニング方式**、教員⇔学生との双方向のやり取りをさせる仕組みを構築し、既存科目**『都市情報学概論Ⅰ・Ⅱ』**との差別化を図るか？

'18 FD学習会資料　22

23

都市情報学部にも『現代に生きる』を造るべきか？①

- **『都市情報学概論Ⅰ・Ⅱ』**はフィロソフィーとしては**基軸科目**そのもの。しかし、現時点で教員は26＋2名から成り、一人一回の研究紹介でほぼ全コマ埋まってしまう。いわば、**新入生へのオリエンテーション**が1年間続いているようなもの。必修で200名以上の受講者もいることから、**積極的アクティブラーニング方式**の導入は難しい。

- **積極的アクティブラーニング**として、都市問題としての適切な現場に赴き、研究と教育を実践することも定義の一つ。**『公開講座』**では、**サービスサイエンス**という学部の教育・研究における一本筋を産官学の協力体制で紡いでいる。

- あくまで、**演習**という形式での**アクティブラーニング**に拘るならば…？
  ⇒結構、都市情報学部は豊富な実績

'18 FD学習会資料　23

24

コンピュータ演習Ⅰ～Ⅵ、コンピュータ総合演習Ⅰ・Ⅱ

コンピュータ演習は主に1・2年次に開講される科目であり、**都市情報学**に必要とされる情報処理技術の習得を目的とする。Ⅰ～Ⅳは必修で、1クラス40名程度の5クラスで編成され、各クラスには、複数の教員・スタッフを配置し、**丁寧な個人指導**が行われる。

24

25

ゼミナールと卒業研究、大学院
～フィールドワーク、PBLまで対応～

'18 FD学習会資料

25

26

都市情報学部にも『現代に生きる』を造るべきか？②

- **『サービスサイエンス特別講義Ⅰ・Ⅱ』**も同様に**基軸科目**的であり、同様な**オムニバス**である。2年次⇒3年次の進級時にゼミ配属されるため、**ゼミ紹介の場としても都合がいい**。選択必修科目なので受講者数も絞れるし、教員の担当も任意である。よって、**アクティブラーニング**の導入は可能と思われる。

しかし一方で、どのような意味で**アクティブラーニング**は都市情報学部に必要なのか？導入にあたって（作業量以外の）デメリットは何か？

- **問題1：フリーライダーの存在**　…意識が高い学生は満遍なく自己表現の機会に恵まれ、その資質を伸ばせる。一方で、低い学生はグループの中に埋没し、ほぼ何もしなくとも単位を修得できる場合も…。
- **問題2：目標の曖昧さ**　…複数担当、複数の学際領域が存在する以上、避けがたい問題。ある意味、**基軸科目**の理念と相反することも。

'18 FD学習会資料　26

27

一つの答？
ファンデーションコース（2008～2015）の再編と再導入

'18 FD学習会資料　27

28

合格者と入学者の平均偏差値推移

河合塾 NO.43

＜合格者の平均偏差値＞

	学部	2000	2005	2009
1	法	49.1	48.7	47.5
2	経済	46.9	48.0	49.1
3	経営	46.8	48.4	48.2
4	理工	50.6	49.8	49.4
5	農	54.0	52.1	51.0
6	薬	56.3	59.5	55.9
7	都市情報	44.4	44.2	42.1
8	人間		47.6	46.7

＜入学者の平均偏差値＞

	学部	2000	2005	2009
1	法	46.6	45.6	45.0
2	経済	45.2	44.6	46.4
3	経営	45.0	46.1	46.3
4	理工	47.5	46.1	46.2
5	農	51.0	49.4	47.3
6	薬	53.9	57.0	53.0
7	都市情報	42.4	41.6	40.4
8	人間		45.0	44.8

※河合塾入試結果調査データより作成

Copyright © Kawaijuku Educational Institution. All rights reserved. 43

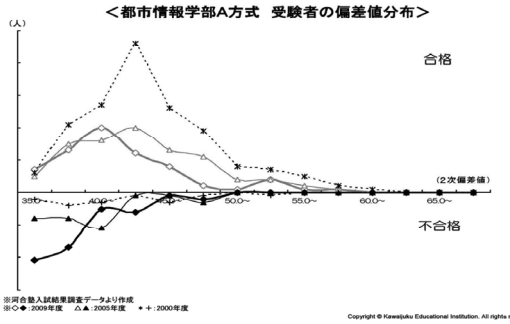
'18 FD学習会資料　28

29

学部別の学力分布（都市情報学部）

河合塾 NO.36

＜都市情報学部A方式　受験者の偏差値分布＞



※河合塾入試結果調査データより作成
※◇◆：2009年度　△▲：2005年度　＋＋：2000年度

Copyright © Kawaijuku Educational Institution. All rights reserved. 36

'18 FD学習会資料　29

30

入学者学力低下の一般的要因

- 高等学校教育までの授業時間数の低下
- 高等学校教育までの授業内容範囲の狭小
  ⇔大学の研究やカリキュラム内容は変化なし
- 少子化・大学全入時代による競争環境の欠如

'18 FD学習会資料　30

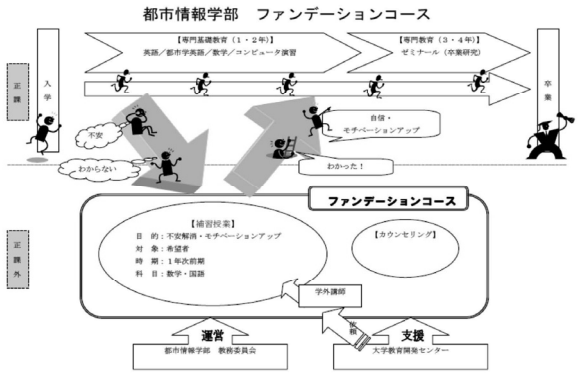
31

学部教員として感じる学生の抱える問題点

- 90分授業が集中できない、もたない、受講モラル・出席率の低下
- 文章作成能力、自己表現能力、基礎数学能力の欠如に懸念
  ⇒就職活動、進級に悪影響
- ゼミ生のレベルの低下、研究活動の入り口に達していない
- 自発的学習意欲の低下
  ⇒専門性の高い、深い研究領域まで達しない

'18 FD学習会資料 31

32



'18 FD学習会資料 32

33

ファンデーションコース発足経緯

- ファンデーションコース委員会の立ち上げ

  構成：教務委員の3名（森杉・島田・柄谷）、大学教育開発センター（高木・難波）、職員（横井・小林・宮川・富永）で構成（教職協働の活動が必要！）。
- 業者の選定：ベネッセコーポレーション

  選定理由：教養演習の担当であり、学部学生の実態に詳しく、初等教育に関してノウハウが豊富。プレイスメントテスト・学習実態調査など早期に実施可能な体制。
- 科目の決定：国語講座と数学講座

  選定理由：木下前学部長により、国語能力の醸成を第一課題とすることの要望。数学の高等学校教育課程の再履修は、主に教員からの要望。対して、英語初等教育のカリキュラムは比較的全学共通教育で豊富と判断。
- 少人数クラスの編成

  選定理由：他の講義では100人を超え、演習形式の実践が難しい。キメの細かい、学生の持つ問題を発見し解決することのできる授業編成・クラス規模としては、1単位30人程度が妥当。

'18 FD学習会資料 33

34

実施要領

- 出席率の向上案：既存科目との単位重複制度

  都市情報学概論Ⅰ（前期・必修）の単位要件20%をファンデーションコース基準で満たすこととした。プレイスメントテストの結果、概ね総合点数にして下位60名ずつを選定、選定された対象者は上記20%の点数分を講座受講によって回復することとした。

  ○一回の講座出席+課題提出　⇒　2点満点

  ○遅刻・早退・課題の完成度・受講態度によりけりで減点措置を定め、学生に通達（評価基準の明確化、学生への確実な通達）
- 講座実施時間：木曜日4限、隔週で各講座5回

  選定理由：学生にとってエキストラの講義負担になるため、比較的講義の薄い同時間帯を設定。また、1コマをMAX90分として、講師の裁量で任意に時間を区切れることとした。入学年次前期のみで同コースを遂行し、少人数クラスを編成するためには、このスケジュールが限界。

'18 FD学習会資料 34

35

「学力テスト（プレイスメントテスト）」の構成

≪対応している科目とパターン（難易度・試験時間）≫

教科・科目	時間	英語	国語	数学		理科		
				α	β	物理	化学	生物
Standard	40分	総合英語	知識+読解	ⅠAⅡ	ⅠAⅡBⅢ	物理ⅠⅡ	化学ⅠⅡ	生物ⅠⅡ
	20分	総合英語	知識+読解	ⅠAⅡ	ⅠAⅡBⅢ			
Basic	40分	総合英語	知識＋読解	ⅠA	ⅠAⅡB			
	20分	総合英語	知識＋読解	ⅠA	ⅠAⅡB			

●都市情報学部では2科目を実施

①国語（Basic・20分）
※国語については、テストに加えて、別途作文を実施（テーマ「私が興味のあること（200字程度）」）
②文系数学（Basic・20分）

科目	分野構成
国語	1：語彙・基礎表現 2：論理的文章読解
文系数学	1：計算　2：関数 3：図形　4：思考

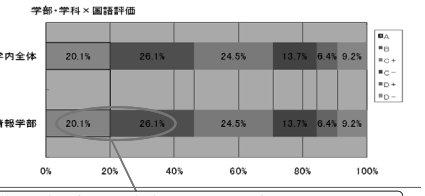
'18 FD学習会資料 35

36

学力分布と受講者選抜ライン 「国語」

【ランク別人数】

ランク	得点	人数
A	37～50	50
B	29～36	65
C+	24～28	61
C−	19～23	34
D+	15～18	16
D−	0～14	23



国語の基礎力（語彙・読解）は比較的高い学生が多い

●「D」ランクの学生は全員を無条件に対象者として選抜
●「C−」ランクは、別途実施した作文の内容により一部学生を選抜

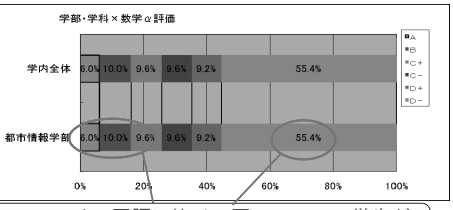
'18 FD学習会資料 36

37

学力分布と受講者選抜ライン 「数学」

【ランク別人数】

ランク	得点	人数
A	42~50	15
B	34~41	25
C+	29~33	24
C−	25~28	24
D+	21~24	23
D−	0~20	138



数学については、国語に比べ、要フォローの学生が相当多いと共に、二極化を生みだす可能性が高い

「D−」の中でも0～10点の学生を対象者として選抜
（1教室30名程度（最大40名）が適正人数との判断による）

'18 FD学習会資料

37

38

業者に特にお願いしたこと

- 内容：国語（表現力）⇒文章作成能力+対話方式

  選定理由：教員側からは、学生の意見表現能力・理解力・自発性について問題指摘。学生が前向きに対話に臨めるような意識をもつよう、グループディスカッション方式の内容を試験的に導入。

- 内容：数学⇒中等教育相当の内容を再履修+現実問題との対比

  選定理由：教員側では研究指導などに際して、微分・積分などの基礎理解を求める声が多いが、実情はそのようなレベルに達していない。関数などの数学の基礎概念とは何か、このような数学の知識を得ることが実生活においてどのように役立つのか、など、更に遡った内容の再教育を図ることが必要と判断。中学の二次関数あたりから始めること、現実との対比をイメージできるような課題の作成を検討。

'18 FD学習会資料

38

39

「ファンデーションコース」の構成～数学講座

●講座を進めるにあたって重視したポイント

①使用する問題は、より基本的なレベル・内容で構成する
②単なる公式や解法の解説ではなく、数学（的思考）に
興味を持たせるような話題を織り込んでいく

●講座・全5回のカリキュラム

回	実施内容
①	数字の法則（数列・n進法）
②	方程式の活用（仕事算／速度算／損益算）
③	関数とグラフの基礎
④	集合・順列・組合せの考え方
⑤	確率の考え方・表の読み取り方

【使用教材】
●「数的処理問題の徹底研究」
（※抜粋してプリントとして配布）
●講師作成の小テスト

'18 FD学習会資料

39

40

「ファンデーションコース」の構成～表現力（国語）講座

●講座を進めるにあたって重視したポイント

①「読む」「書く」「聞く」「話す」を総合的にカバーする構成
②ワーク（特にグループワーク）を重視し
動きのある講座を展開をする（一方的な講義形式を避ける）

●講・全5回のカリキュラム

回	実施内容
①	コミュニケーションや文章を書くことの大切さについて考える
②	インプットのポイント（話を聞く／情報収集）
③	考えをまとめる
④	分かりやすく伝える
⑤	文章を組み立て・整える

【使用教材】
●「ライティング」
●「コミュニケーション」
（※抜粋してプリントとして配布）

※各回とも200字程度の文章作成を実施

'18 FD学習会資料

40

41

「ファンデーションコース」の展開～数学講座

【各回の基本的な進行】

時間	テーマ・内容
14:50～15:00 （10分）	●イントロダクション（本日の内容説明）
15:00～15:30 （30分）	●今回の取り扱い分野（テーマ）解説 ・この知識が、どのような場面で活かされるか （大学での学びの充実／社会常識の一つとして） ・基本的な解法パターンの解説 （適宜、数学に興味を持たせるような話を挟んでいく）
15:30～15:50 （20分）	●確認テストの実施（すぐに解法の解説も実施） ⇒出席票として提出させる
15:50～16:00 （10分）	●講座のまとめと次回内容の説明 ●アンケート記入

※16：00以降は個別質問対応の時間とする

★「数学の楽しさ」を感じる
話題を織り込んで展開↓

'18 FD学習会資料

41

42

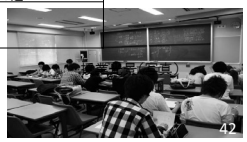
「ファンデーションコース」の展開

【表現力（国語）講座・第1回の基本進行】

時間	テーマ・内容
14:50～15:00 （10分）	●イントロダクション（本日の内容説明）
15:00～15:25 （25分）	●【解説】コミュニケーションの大切さ ・コミュニケーションとは何か ・コミュニケーションが成立するには ・「知らない人と関わる」ことの意味と必要性 ●【ワーク】「自分のことを話してみよう」
15:25～15:55 （30分）	●【解説】文章を書くことの大切さ ・文章を書く場面はこんなにある ・よい文章を書けることのメリットとは ●【ワーク】「良い文章」と「悪い文章」の違い
15:55～16:10 （15分）	●講座のまとめと次回内容の説明 ●課題用紙・アンケートの記入 ⇒出席票として提出させる

※16：10以降は個別質問対応の時間とする

★解説だけではなく
ワークを重視した展開↓



'18 FD学習会資料

42

43

【効果検証③】学生の意識変化（アンケート自由回答より）

【数学講座・回答（代表的なもの）】

かなりわかりやすくてよかった
数学はむずかしいが分かるとうれしい
だんだん数学が楽しくなった
数学だけでなく、さまざまな事をならいました
方程式の解き方をなんとなく思い出した
関数は当分やっていなかったけど、何とか思い出せて解けた
図を書いて問題を解くと分かりやすく、簡単にとけた
確率はおもしろいと感じました
表もよく見れば解ける問題もあるんだなと思った
0．9999999・・・＝1の話が面白かった！大学生活をがんばるようにしたいです

数学に対する「楽しさ」「面白さ」を感じることができた学生がいたと共に、学生生活に対する前向きな意識を示した意見もあり、講座実施の効果が見られた。

'18 FD学習会資料　43

44

【効果検証③】学生の意識変化（アンケート自由回答より）

【表現力講座・回答（代表的なもの）】

聴き手の態度の大切さを実感した
ただ話すだけしゃダメなんだなと思いました
表情の大切さがわかった
他国の人と仲よくできました
文章は内容がよくても順序が大切ということがわかりました
文章を書くときにいくつ話すことがあるか先に書く、このやり方は使えると思った
4回目（※次回）がたのしみです
「なるほど！」と思う部分がたくさんあり、とてもよくわかりました
この授業を受けてよかったと思います
たのしかったです！基礎みたいな授業だけどよかったと思います

表現のテクニックを理解することだけではなく、普段、なかなか取り組むきっかけのないグループワークなどは、学生にとって新鮮なものであったと考えられる。

'18 FD学習会資料　44

45

【効果検証④】学生の不安度変化（前半）

●あなたが、これから大学で勉強するにあたっての気持ちについて、あてはまるものを次の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選んでください

①とても不安だ　②まあ不安だ　③あまり不安ではない　④全く不安はない

【質問項目】
A）勉強したいことがみつかるかどうか不安だ
B）大学の授業についていけるかどうか不安だ
C）学生生活にとけこめるかどうか不安だ
D）友人ができるかどうか不安だ

【数学講座（1年生：20名）】

講座受講前(4月24日)						講座受講後(6月4日)				
項目	①	②	③	④	平均	①	②	③	④	平均
A	2	10	8	0	2.30	2	9	7	2	2.45(+0.15)
B	3	13	2	2	2.15	1	9	9	1	2.50(+0.35)
C	0	6	10	4	2.90	0	0	13	7	3.20(+0.30)
D	0	4	9	7	3.15	0	3	5	13	3.65(+0.50)

【表現力（国語）講座（1年生：19名）】

講座受講前(4月24日)						講座受講後(6月4日)				
項目	①	②	③	④	平均	①	②	③	④	平均
A	6	7	3	2	1.95	1	13	2	3	2.37(+0.42)
B	10	3	5	1	1.84	9	6	3	1	1.79(−0.05)
C	0	9	8	2	2.63	0	5	8	6	3.05(+0.42)
D	1	2	10	6	3.11	0	4	5	10	3.32(+0.21)

'18 FD学習会資料

ほぼ全項目において、不安軽減の傾向が見られる　45

46

【効果検証④】学生の不安度変化（後半）

●あなたが、これから大学で勉強するにあたっての気持ちについて、あてはまるものを次の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選んでください

①とても不安だ　②まあ不安だ　③あまり不安ではない　④全く不安はない

【質問項目】
A）勉強したいことがみつかるかどうか不安だ
B）大学の授業についていけるかどうか不安だ
C）学生生活にとけこめるかどうか不安だ
D）友人ができるかどうか不安だ

【数学講座（1年生：18名）】

講座受講前(4月24日)						講座受講後(7月9日)				
項目	①	②	③	④	平均	①	②	③	④	平均
A	5	9	3	1	2.00	4	8	6	0	2.11(+0.11)
B	12	4	2	0	1.44	10	6	2	0	1.56(+0.12)
C	2	11	5	0	2.17	0	4	9	5	3.06(+0.89)
D	1	6	8	3	2.72	0	2	8	8	3.34(+0.62)

【表現力（国語）講座（1年生：25名）】

講座受講前(4月24日)						講座受講後(7月9日)				
項目	①	②	③	④	平均	①	②	③	④	平均
A	4	14	6	1	2.16	3	11	9	2	2.40(+0.24)
B	5	15	4	1	2.04	4	12	8	1	2.24(+0.20)
C	1	6	12	6	2.92	1	2	13	8	3.04(+0.12)
D	1	6	11	7	2.96	1	2	10	13	3.48(+0.52)

'18 FD学習会資料

特に、友達づくりに関する不安は大きく改善されている　46

47

担当講師の所感

倉橋　良之講師（数学講座　担当）

最初は、学生のレベル・受講態度などに、正直戸惑ったところもあったが、話をしてみると、しっかりした学生たちであると感じた。前向きになって、物事に取り組めば、大きく伸びていくのでは…そのきっかけをどう作るかが重要かと思う。

室町　めぐみ講師（表現力講座　担当）

国語の学力とは、直接関連付けられる内容ではなく、学生の反応が懸念されたが、グループワークなどにも、しっかり取り組んでいた。毎回、書いてもらった文章も、回を追うごとに良くなっていく学生が多かった。

'18 FD学習会資料　47

48

終わりに

- やはり、**アクティブラーニング**とは本来**少人数教育**が主であると感じざるをえない。**アクティブラーニング**自体が解決手段となるならば、その問題意識は、自ずと**学生の自己表現能力の醸成**となるであろう。**『サービスサイエンス特別講義Ⅰ・Ⅱ』**への導入効果についても、目下個人的には懐疑的である。
- そこに**基軸科目**との共存はありうるのだろうか？実践の場において**自己問題発見と解決能力を醸成**するというのは言葉ほど簡単ではない。そもそも、**基軸科目**自体に固まった概念がない。
- **アクティブラーニング**ではあるが、**居残り勉強型**の**『ファンデーションコース』**は効果的ではあったが、エクストラのタスクの強制という点から、受講生にも専任教員にも受けが悪い。やるならば、意識の高い、関心の強い学生のみを募り、**フィールドワーク**や**ディベート**、**プロジェクト志向型**の**『英才教育科目』**を造る方がいい、と個人的には思う。

'18 FD学習会資料　48

教育功労賞表彰報告

教育功労賞制度とは、学校法人名城大学職員規則第47条に基づき、各学部及び研究科等において、教育活動及び教育改善に大きく貢献した者を表彰することにより、職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育の質の向上に資することを目的として表彰するものです。

表彰の種類は、各学部及び研究科等における教育活動及び教育改善に大きく貢献した者及びグループ（事務職員を含む）を表彰する教育功労賞と、その対象者の中で、特に全学的な取組として波及できる可能性のあるものを表彰する特別教育功労賞から成っており、いずれも各学部及び研究科等からの推薦された対象者について大学教育開発センター委員会で候補者として相応しいか否かを選考し、大学協議会での審議を経て学長が決定するものです。

平成29年度の候補者は各学部から、２件の推薦があり、大学教育開発センター委員会（平成30年１月11日開催）で慎重に審査した結果、推薦のあった２件を教育功労賞候補者として相応しいと認め、大学協議会（平成30年１月26日開催）において、承認されました。

記

教育功労賞表彰者について

氏名・グループ名	所属学部	表彰対象となった活動・テーマ
雑賀　憲彦	都市情報学部	実践的企業演習
英語教育委員会・ 英語コアカリキュラム担当教員	外国語学部	統一したカリキュラムの相乗効果

※審査の結果、特別教育功労賞については、該当者なしと決定しました。

教育功労賞表彰者の推薦書は以下のとおりです。

教育功労賞候補者推薦書

名城大学大学教育開発センター委員会委員長　殿

学部・研究科・センター等　　都市情報学部

下記の教育職員（グループ）を「教育功労賞要項」に基づき、教育功労賞候補者として推薦します。

教育功労賞候補者

所属学部等　　都市情報学部　　候補者氏名　　雑賀　憲彦

取組タイトル　　実践的企業演習

１．推薦理由（教育活動及び教育改善の取組概要、教育実績、学生指導、学部・研究科等への貢献等）

【教育活動の取組概要】

候補者である雑賀憲彦教授は就任当初より積極的に学生指導に当たり、下記のように学部・研究科に大きく貢献されました。これらの成果を踏まえ教育功労賞候補者として推薦いたします。

（１）ゼミナールにおいて学生と教員の共同で、**日本ではこれまでほとんど例のない企業への無料経営診断を行いました**。平成23年に企業への無料経営診断の告知を行ったところ、地元企業３社から依頼があり、日本ウエストンと㈱濃尾葬祭の２社の経営診断を平成24年、25年の２年にわたりゼミナールで実施されました。手法としては、まずは決算書を10期分お借りして、その財務診断を学生にゼミナールで指導しながら分析を行い、次にゼミナール室にそれぞれの企業の部長以上の役職者にご来校していただき、現状の企業の問題認識等についてのインタビュー調査をお一人１時間程度実施した上で、同業他社分析を行うために、学生と同業他社の資料を収集したり、銀行業界が用いる貸出審査辞典を使用したりして、業界分析も行い、最終的には30頁程度の経営診断報告書を作成し、それぞれの企業へゼミナールの学生とともに出向き経営診断報告会を実施するというもので、教育的価値のある取り組みでした。

（２）**ゼミの学生を引率してメッセナゴヤの企業展に平成19年から11年連続して参加しておられます。**オープニングセミナーに参加し、その当時の話題の経営者や経営学者の講演を聞いたのちに、各企業の展示ブース千数百社のブースを約２～３時間かけて見学するという内容であります。地元企業の技術力を目の当たりにさせて、学生の就職力の向上に役立てると同時に、

中小企業の中でも優れた技術を持つ企業が多数あるということを認識させ、このことが現在も都市情報学部の就職率向上に寄与していると思われます。

2．取組の発展性について（今回の取組の中で、全学的な波及効果が期待できる事項）

（1）企業への無料経営診断

これは雑賀教授が個人的な職業経験から得られたノウハウにもとづいて実施しているため、同様な診断については難しいかもしれませんが、ゼミナール単位で実施できるため、企業とのコンタクトや連携に興味のある教員であれば実施することが可能と思われます。また、現在名城大学には企業向けの経営講座をいくつか実施している学部もありますので、そうした学部の教員が単独または共同でゼミナールの学生と一緒に経営診断を行っていくことも可能ではないかと思われます。もし全学的な波及を期待されるのであれば、雑賀教授がアドバイザーとして支援することも可能で、その実績及びノウハウが蓄積できた段階で、逐次、企業との連携に関心のある学部の教員にそうしたノウハウを伝播させていくという形で、全学的な波及が期待できます。

（2）メッセナゴヤへの企業展への参加

雑賀教授は名城大学では数少ない教員として同企業展に参加して来ておられましたが、学生単独で参加している意識の高い学生もおり、企業への就職へのアプローチとして、キャリアセンターが主催となって全学的に波及させていくことが可能と思われます。また、学生の就職面だけではなく、研究者と産業界との交流など産学連携による共同研究の絶好の機会でもあるため、全学的にも重要な活動であるように思われます。そうした観点からも是非とも全学的な実施につながることが期待されます。

3．その他教育活動に係る特記事項

（1）雑賀教授は平成22年度から23年度の教育の質保証プロジェクトにおいて「教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化プロジェクト」の取り組みの実施責任者としてサービスサイエンスを志向した新カリキュラムの定着と教育内容の充実を図ることに大きく貢献されました。また学生の学外視察や見学を積極的に後押し、学生の学習意欲と就職意識を大きく高めてまいりました。この２年の取り組みのあと、同プロジェクトにおいて「官と民のサービスイノベーションに関する提案型能力育成プロジェクト」の取り組み責任者を２年間継続され、産官学の連携を深め開かれた大学の実現、地域社会への貢献に寄与されました。

（2）平成29年度には大幸財団の競争的資金に採択されました。これは雑賀教授が都市情報学部でサービスサイエンス委員会の委員長を務めておられた際に、日本のサービス業の生産性が低いことに問題意識を持ち、その向上のための対策を纏めて申請、提案したことが評価されたものと思われます。

教育功労賞表彰者の推薦書は以下のとおりです。

教育功労賞候補者推薦書

名城大学大学教育開発センター委員会委員長　殿

学部・研究科・センター等　　外国語学部

下記の教育職員（グループ）を「教育功労賞要項」に基づき、教育功労賞候補者として推薦します。

教育功労賞候補者

所属学部等　　外国語学部　　候補者氏名　　村田　泰美教授　他15名

取組タイトル　　統一したカリキュラムの相乗効果

グループ名　　英語教育委員会・英語コアカリキュラム担当教員

外国語学部国際英語学科　村田泰美、西尾由里、柳沢秀郎、藤原康弘、宮崎新、Max Praver、Paul Dickinson、Brian Gallagher、中山麻美、Ian Roth、Tanja McCandie、James Rogers、Gregory Minehane、Paul Wicking、Nicholas Boyes、Jeremiah Hall

1．推薦理由（教育活動及び教育改善の取組概要、教育実績、学生指導、学部・研究科等への貢献等）

複数の教員による統一的カリキュラムによる教育は、学生に多くの恩恵を与えることが知られている。学習機会の平等、アカウンタビリティーの確保、高水準の教育の達成などである。特に英語専攻の学生の初年次教育において、他大学でも統一カリキュラムを掲げるところはあるものの、顕著な成功例は報告されていない。

ひるがえって本学外国語学部では、英語教育委員会の基に、英語コアカリキュラム担当教員（専任および特任講師）が教材作成から授業実践、評価方法にいたるすべてのプロセスの統一化に成功し、相応の成果をおさめている。このプログラムによって、学生の TOEIC の成績は2016年度の６月（平均496点*）から12月（平均546点*）にかけて飛躍的に上昇した。また、平均スコアも全国平均［語学・文学系（英語専攻）］(464点）を大きく上まわった。

*TOEIC IP テストを６月および12月の両方とも受験した学生の平均点

（１）組織

英語コアカリキュラムはコミュニケーション･スピーキング･リーディング･ライティング･ディスカッションの科目から成る。各科目にはコーディネーターを置き、科目を教える全ての教員が

共通の目標を目指して教育に取り組めるよう様々な支援を提供している。

（2）教材の作成

担当教員全員が議論を重ね、共通の英語教材を作成した。すなわち宿題プリント、授業で使用するスライド、毎週の小テスト、配布資料などである。また、ライティングとリーディングの授業においては中間・期末テストを共同で作成し、ライティングの担当教員はライティング問題集を作成した。各々の教材は科目担当者全員で討議され、学生の達成度とニーズに応じて随時修正される。

（3）授業実践

英語コアカリキュラム担当教員は頻繁にミーティングを重ね、進捗報告をし、授業の工夫やアイデアや問題点を共有する。またFD活動の一環として相互授業参観を実践し、様々な教育方法やアクティビティ、あるいは有用な知見や新しい着想を得ることに努めている。

（4）共同評価

学生が平等に評価されるよう、教員は原則として自らのクラスを評価しない。例えば、コミュニケーションの担当教員は他のクラスのスピーキング試験を採点し、ディスカッションやライティングの教員は他の教員の期末試験の評価を行う。評価の公正を期すため、教員は共同でrubric（評価方法）を開発し、研修会を開催してその実践方法について討議した。

2．取組の発展性について（今回の取組の中で、全学的な波及効果が期待できる事項）

本学部の英語教育は、文系・理系を問わず、現在名城大学の全学部で行われている英語科目にも有用なモデルを提供することが可能である。各学部には学部独自の英語教育の目的やニーズがあり、英語科目教員の経験や能力も様々であろう。しかし、本学部で実践されている標準カリキュラム、コーディネーターを中心とした授業運営、評価方法等を用いることによって、各学部の目指す英語教育の目標は達成され、教育の質は保証されると考える。

本学部ではアクティブ・ラーニングを積極的に推進している。アクティブ・ラーニングは学生主体の学習と親和性が高く、英語のスキルを伸ばしていくための有効な教育方法である。アクティブ・ラーニングを基本とした授業運営や授業構築を全学における英語教育に広げていくことは十分可能である。

なお、本学部の学生は、上記の統一的教育によってTOEICにおいても相応の成果を挙げた。TOEIC対策は、全学部にわたる課題であろう。

3．その他教育活動に係る特記事項

外国語学部は、平成28年度4月にナゴヤドーム前キャンパスに新設された学部であり、前述の通り英語コアカリキュラム担当教員が英語プログラムをゼロから立ち上げて、積極的に先進的な教授方法を実践した。

英語教育プログラムに限らず、外国語学部の全授業において、アクティブラーニング、自律的学習を促進するタスクなどが推進されており、学生たちが主体的に学ぶことができ、満足度の高い教育内容を確保するための研究が常に行われている。さらに、MS-26で掲げている通り、ナゴ

ヤドーム前キャンパスはICTスマートキャンパスとして、iPad、WebClass、SNSなどのICTを活用した学修支援を行っており、デジタルデバイスを自由に使いこなせる人材育成も目指している。その実践の機会として海外大学の学生とのvideo exchangeにも取り組む試みが進行中である。

外国語学部の教育全般が21世紀型教育を目指して実践されていると言え、英語教育チームがこれを牽引する存在となっている。来年度以降も、社会・学生のニーズを計りながら、グローバル社会へ貢献できる人材育成を進めていく。

そのために、本学部では英語教育で培った教材・授業実践・評価の統一化・標準化の方法を多科目、とりわけ基礎演習等の初年次教育にも応用することを目指している。また、教員が共通の目標に向かって教育に取り組めるよう、積極的にFD活動に参加し、ICTの活用や教授法のアイデアを交換する。

7．資　　料

大学教育開発センター要項

（目的）

第１条　大学教育開発センター（以下「本センター」という。）は、全学を対象としたファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）活動の実施及び各学部、研究科へのFD活動・教育の質向上の取組の支援により、本大学の教育改善を推進することを目的とする。

（業務）

第２条　本センターは、前条に定める目的を達成するため、次の業務を行う。

⑴　教育に係る調査・研究・提言に関すること

⑵　教員の教育力向上に関すること

⑶　入学前教育及び入学後の学修支援に関すること

⑷　高大連携及び接続教育に関すること

⑸　その他必要な事項に関すること

（センター長）

第３条　大学教育開発センター長は、学長の命を受けて本センターの業務を総括し、代表する。

（委員会）

第４条　本センターの業務に関する基本事項を審議し、実施するために、大学教育開発センター委員会（以下「委員会」という。）を置く。

②　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

⑴　大学教育開発センター長

⑵　学務センター長のうち１名

⑶　各学部から選出された教育職員　各２名

⑷　独立研究科から選出された教育職員　各１名

⑸　教職センターから選出された教育職員１名

⑹　大学教育開発センター事務部長

⑺　学務センター事務部長

⑻　その他委員長が必要と認めた者

（委員長及び副委員長）

第５条　委員会に委員長及び副委員長を置く。

②　委員長は、大学教育開発センター長をもって充てる。

③　副委員長は、委員の互選による。

（任期）

第６条　第４条第２項第３号、第４号、第５号及び第８号の委員の任期は２年とする。ただし、再任を妨げない。

②　委員が欠けた場合の補充委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（会議）

第７条　委員会は、委員長がこれを招集し、その議長となる。

②　委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。

③　委員会は、委員の過半数の委員の出席により成立する。

④　委員会の議事は、出席委員の過半数により決し、可否同数の場合は、議長がこれを決する。

（委員以外の出席）

第８条　委員会が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

（専門委員会）

第９条　委員会は、必要に応じて専門委員会を置くことができる。

②　専門委員会の運営に関する事項は、委員会において別に定める。

（事務）

第10条　委員会の事務は、本センターが分掌する。

附　則

①　この要項は、平成29年４月１日から施行する。

②　従前の「FD 委員会要項」は、この要項の施行の日から、これを廃止する。

平成29年度　所属別 FD 活動参加状況

所属			所属人数（※1）	H29前期授業改善アンケート	H29後期授業改善アンケート	FDフォーラム	第5回FD学習会	第6回FD学習会	第7回FD学習会	教育功労賞（※2）	教育年報（※3）			学外セミナー・研究集会等への派遣（※4）
											教育実践報告寄稿	教育功労賞受賞者による特別寄稿	特色ある教養教育、アクティブラーニングの特集記事	
教員	学長・副学長		5	0	0	2	1	0		0	0	0	0	0
	法学部	法学科	24	21	15	1	3	1		0	0	0	0	0
		応用実務法学科	14	12	11	1	1	0		0	0	0	0	0
		計	38	33	26	2	4	1		0	0	0	0	0
	経営学部	経営学科	17	17	16	2	0	0		0	0	0	0	0
		国際経営学科	14	14	13	1	0	0		0	0	0	0	0
		計	31	31	29	3	0	0		0	0	0	0	0
	経済学部	経済学科	17	18	18	12	2	1		0	0	0	0	0
		産業社会学科	12	11	9	10	2	0		0	0	0	0	0
		計	29	29	27	22	4	1		0	0	0	0	0
	理工学部	数学科	19	19	18	0	0	0		0	0	0	0	0
		情報工学科	19	17	16	1	0	0		0	1	0	0	0
		電気電子工学科	17	13	9	0	0	0		0	0	0	0	0
		材料機能工学科	12	9	9	0	0	0		0	0	0	0	0
		応用化学科	10	10	10	1	0	0		0	4	0	0	0
		機械工学科	15	13	13	0	1	0		0	0	0	0	0
		交通機械工学科	14	13	11	0	1	0		0	0	0	0	1
		メカトロニクス工学科	12	9	12	0	0	0		0	0	0	0	0
		社会基盤デザイン工学科	12	8	9	0	0	0		0	0	0	1	0
		環境創造学科	11	10	9	0	0	0		0	0	0	0	0
		建築学科	16	13	12	0	1	0		0	0	1	0	0
		教養教育	16	12	11	4	0	0		0	0	0	0	0
		計	173	146	139	6	3	0		0	5	1	1	1
	農学部	農学部	1	1	1	0	0	0		0	0	0	0	0
		生物資源学科	13	12	13	3	3	2		0	0	0	0	0
		応用生物化学科	13	13	13	2	0	0		0	0	0	0	0
		生物環境科学科	13	11	12	1	1	0		0	0	0	0	0
		教養教育等	2	1	1	0	0	0		0	0	0	0	0
		附属農場	4	1	4	0	0	1		0	0	0	0	0
		計	46	39	44	6	4	3		0	0	0	0	0
	薬学部	薬学科	61	23	31	1	2	1		0	6	0	0	0
		教養教育等	3	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
		計	64	23	31	1	2	1		0	6	0	0	0
	都市情報学部	都市情報学科	27	25	25	3	0	11		1	1	0	0	0
	人間学部	人間学科	22	22	22	8	6	6		0	0	0	0	0
	外国語学部	国際英語学科	25	23	20	2	0	5		16	0	0	3	0
	大学院法務研究科		14	0	1	2	1	1		0	0	0	0	0
	教職センター		8	8	8	1	1	0		0	0	0	0	0
	総合学術研究科		14	6	10	3	1	0		0	0	0	0	0
	小計		496	385	382	61	27	29		17	12	1	4	1
職員	監査室		2	0	0	2	0	0		0	0	0	0	0
	学長室		2	0	0	2	0	0		0	0	0	0	1
	秘書室		3	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
	経営本部		9	0	0	2	1	1		0	0	0	0	0
	総合政策部		6	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
	総務部		16	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
	渉外部		8	0	0	1	0	1		0	0	0	0	0
	財政部		14	0	0	4	0	0		0	0	0	0	0
	施設部		11	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	入学センター		15	0	0	2	0	0		0	0	0	0	0
	学務センター		30	0	0	4	3	1		0	0	0	0	1
	保健センター		4	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	教職センター		5	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	大学教育開発センター		6	0	0	5	4	5		0	0	0	0	16
	学術研究支援センター		14	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
	キャリアセンター		16	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	国際化推進センター		7	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	情報センター		6	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	社会連携センター		1	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	障がい学生支援センター		1	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	附属図書館		7	0	0	1	1	0		0	0	0	0	0
	法学部		7	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
	経営学部		7	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	経済学部		7	0	0	3	0	0		0	0	0	0	0
	理工学部		18	0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
	農学部		8	0	0	2	0	0		0	0	0	0	0
	薬学部		10	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	都市情報学部		2	0	0	1	1	0		0	0	0	0	0
	人間学部		2	0	0	0	1	0		0	0	0	0	0
	外国語学部		2	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	ナゴヤドーム前キャンパス事務室		13	0	0	1	0	1		0	0	0	0	0
	愛知総合工科高等学校専攻科		3	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	附属高校		10	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
	小計		272	0	0	36	11	9		0	0	0	0	18
計			768	385	382	97	38	38		17	12	1	4	19

※1　平成29年10月1日現在。
（教員：助手を含む。終身教授、特任教授（1・2・3号）は含まない。副学長は学部から除く。／事務職員：業務職・契約職員を含む。派遣職員は含まない。）
※2　延べ人数。グループでの申請の場合は構成員もそれぞれ1とカウントする。
※3　延べ人数。共同執筆者もそれぞれ1とカウントする。なお、所属は受賞当時のものとする。
※4　延べ人数。

8．おわりに

あ と が き

大学教育開発センター

本報告書は、本学におけるFD活動や正課外教育活動についてまとめたものであり、大学教育開発センター委員会や各学部・研究科・センターのFD活動状況及びその内容について詳細を示しております。

本学のFD活動は、各学部・研究科・センターが主体となってFDを推進するとともに、大学教育開発センター委員会がその活動をサポートする形で企画運営や各種取組を行っています。平成12年度から始まった本学のFDはこのようにして、教育改善についての堅実な土台が形成されております。

大学教育開発センター長の巻頭言にもある通り、平成29年度におけるFD活動については、従来の「FD委員会」を「大学教育開発センター委員会」と統合し、新体制となる「大学教育開発センター委員会」の下で進められました。この委員会の統合に伴い、今年度から、従来のFD活動に加え、正課外教育の内容についても取りまとめております。今年度の本学のFD活動や正課外教育の現状を本報告書でご確認いただくことで、皆様の教育改善の一助となりますことを願っております。

最後に、本報告書の企画・編集、各FD活動の企画・運営にご協力いただいた皆様方に、心より御礼申し上げます。

平成30年3月

発　行：名城大学 大学教育開発センター委員会

編　集：名城大学 大学教育開発センター

住　所：〒４６８－８５０２
名古屋市天白区塩釜口一丁目501番地

電　話：（０５２）８３８－２０３３
ＦＡＸ：（０５２）８３３－５２３０

MEIJO UNIVERSITY

FOUNDED 1926

NAGOYA JAPAN